早く濟めばいゝ！　併し死人は何にも感じないんだらうか？　もう何にも感じないといふ事も知らないんだらうか？』

若い騎兵士官は、モスリンの下に朦朧と輪郭を描いてゐる死人の横顔を見た。死人も矢張り耳の端で、此の不可解な文句や合唱の返答を聽いてゐるのだらう。併し考へは散々になつて了ふのだ。――彼は斯う思つた。

早かれ晩かれ自分も額に白布を卷いて、兩手を胸に組んだまゝ、白いモスリンの下に横はるのだ。自分の屍の周圍では讃美歌を歌つたり、香を焚いたりするだらう。白い冷たい光りが窓に注いで、祝福するやうに、呪咀するやうに腕を擴げた上帝の姿が、圓天井の上に搖めくだらう……併し自分は見も聽きもしない……さうだ、さうに違ひない。昨日ナジーモフの家で痛飲した事もカルパーコフ中尉に五十留負けた事も意味がない。今方まで生きてゐて、立つたり、聽いたり、考へたりしてゐた事も意味がない。昨日接吻しようとしたら、カーチャが怒つて、自分の手を打つたことも意味がない。自分は横はつてゐて、見も聽きもしないのだ。怖ろしい事だ！　何うして人間はこれを考へないのだらう？　何うで避くべからざるものであるから、人間もこればかりは考へずばなるまい。實際見る事も聽く事も出來ないのだらうか？

『兄第朋友親族と知人や、我の聲もなく、氣息もなく、爾等の前に伏すを見て……愛する者や來りて別離の接吻をなせ……』

『哀れな、哀れなクラウゼ！』若い騎兵士官は斯う思つた。涙は彼の睫毛に浮んだ。

彼の周圍では人々が動き出した。別離の接吻の儀式が行はれた。將校達は一人々々聖壇に昇つて、忙しげに十字を切つた。彼等は固く脣を結んだ親しみのない顏を喫驚したやうに見て、骨張つた寒氣を催すやうな腕に接吻すると、再び忙しげに壇を降りて行つた。

讀敎の聲は靜まつた。再び石疊の上を行く足音や、燭臺を動かす音が聞える。會葬者の中から、指先の顫へた手が出て、蠟燭の火を消した……細い煙は側の方へ捻れてゆく。

再び騷々しくなつた。新しい材木に釘を打ちつける音が一つ一つ手に取るやうに聞える。棺は氣息を吐くやうに上つて搖れ動いた。そしてまた下ろされた。會葬者は敎會堂から流れ出た。

鐘は親しげな響きで棺を迎へた。『聖なる神、聖なる勇氣、聖なる常生のもの！』再び合唱の聲がした。僧侶の黑い袈裟はもう石碑や十字架の中に遠かつた。

白い明るい日である。

凋んだ樹の葉は秋の透明な冷氣の中にほんのりと匂うてゐる。空は高かつた。黃色い樹

の葉にも、赤味を帶びた草にも、黑天鵞絨の法衣にも、將校達の銀色の肩章にも、赤土の深い塋穴に降りてゆく棺の波形の屋根にも――秋の冷たい光りは映えてゐた。樹の葉は大抵散り盡して了つたので、墓地の中は訝かしい程がらんとして明るかつた。遠く十字架や樹木の間には、草のない野原が光つてゐる。其處は廣々として悲しかつた。曠原の限りない悲しみは、靑みゆく彼方の地平線から覗いてゐた。蒼褪めた自然は周圍に消えた。樹木は黃葉を音もなく散らしながら、身動きもせずに立つてゐる。

老人の柔かい聲は早口で何か不明瞭に讀み上げてゐた。白い高い空の圓屋根の下では、それが事のほか弱々しく聞える。

『永遠の記憶、我等の兄弟……』

『永遠の記憶、永遠の記憶、永遠の記憶！』合唱が絕望したやうに聲高く響く。鐘の音が呼び合ふやうに間を置いて鳴る。騷がしくなつた。シャベルを持つた兵卒が何處からか現れて來た。人々が動き出した。棺の屋根は搖れ動いて、穴の中に下された。其處には生もない。光りもない。永遠の死ばかりだ。

柵外では一齊射擊が行はれた……帽子を阿彌陀に被つたイワーノフ中尉が、顏を眞赤にして號令を掛けてゐた。

一同は身震ひした……樹木の小枝は搖れて、別離の贈物のやうに、樹の葉がひら〳〵と塋穴に散つた。

構へられた騎兵銃の細い銃腔や、忙しさうな兵卒達の顏が石垣の向うに見える。再び一齊射擊が……また響く……僧侶は聲高に歌ひ出した。と、不意に鈍い音を立てゝ、土塊が塋穴を埋める。

『安んぜよ、スチェパーノフ！　安らかに眠れ！』訝かしいほど生々した聲が聞えた。

勿論だ！　愚かな騎兵少尉はもうゐないのだ。彼は永遠に甦らないのである。

昨日は彼もまだ我々と言葉を交はしてゐた。太陽を見てゐた。生氣ある響きを聞いてゐた。彼獨特の不可解な生活で、世界の一隅を充たしてゐた。彼の軍服、彼の姓名、乘馬、奇妙な部屋、磨き上げた靴、ヴィオロンセロ……極めて些らぬ物が彼の亡靈として殘されてゐる……彼も自分の思想や苦痛や歡喜を有つてゐたのだ……併し死は不意に訪れて來て、彼の席を空虛にしてしまつた。腐敗に歸依した彼の面なく見苦しい屍は、土の闇に隱れてしまつたのだ。

彼の足跡は浮世の響動の中に紛れる。時が過ぎる。彼の顏を見た者や、聲を聽いた者は、もう一人として此の世に殘つてゐない。生活し、苦痛に惱み、無慘な最後を遂げた騎兵少尉

クラウゼの記憶も、新時代の人々の間にもう甦りはしない。

墓は平らかにされた。刺戟性な杉の香のする綠葉で蔽はれた。新たに白い十字架が建てられた。そしてひよろ長い十字架は、古びた墓石や十字架の間に、謎の如く突立つてゐた。

僧侶は歸つた。聯隊長も行つて了つた。將校達は拱手と墓の傍に暫く佇んでゐたが、それも急に解散して了つた。會葬者は散々に墓地を出て行く。低い聲が聞える……美しい令孃が同伴者の方へ駈けて行く。將校の一人は彼女に調戯つた……誰だか笑つた。暫くは物思はしげに靜まつた墓地の世界も、再び忙しげに活動し始めた。

騎兵中隊は道路を延びて行つた。兵卒は何か笑つて、相互に口汚なく言ひ合つてゐた。喇叭卒の白い一列は、死の世界から自分たちの溫かい兵舍や厩に向つて、もう遠く街を歩いてゐる。

墓地には一人も殘つてゐる者がなかつた。靜寂は蒼白く墓石の上に漂うた。灰色の古びた十字架は眞白な新客を默然と見詰めてゐた。粘土の小山の上には、綠色の凋んだ杉樹が項垂れてゐる。

暗青色の小鳥が黃色い叢から飛び出して來て、十字架の上に止つた。小鳥は周圍を見廻して、頭を振り動かした。そして翼を逆立てながら、氣遣はしげに泣いた。

十九

チーシュは暑さうに外套を捲つて、街の方へ足を急がして行つた。

彼の胸は重苦しかつた。自分とルイスコフの他、クラウゼの友人で墓地へ行つた者は一人としてない。小さな大學生は、もう一同から見捨てられて了つた事を、哀れなクラウゼが知り拔いてゐるやうに思つて、故人のために悲しみと腹立ちを覺えた。

『アルブーゾフの莫迦が言つたのは事實だ！』チーシュは悲しさうに考へた。『友情は或る時機までのものであつて、死ぬまで續くものではない。確かに事實だ……有らゆる人に忘れられなかつた者があらうか！　世人はブーシュキンを思ひ出す……併しそれとてもブーシュキンその人ではなくて、文學上の偉業を思ひ出すのだ……莫迦らしい！』

彼の頭腦は混亂してゐて、自分の感情なり思想なりを纏める事が出來なかつた。近頃彼は胸を傷めてゐた。發砲や屍の倒れる音ばかりが耳について、夜もおち〳〵眠れなかつた。彼にはこれが實際あり得べき事か何うかも信じられなかつた。眉毛の斜めな蒼白い顏は、絕えず彼の眼前に搖めいてゐる。

『哀れな男だ！』彼は斯う思つた。『何のために死んだのだらう？　ナウーモフは惡人だ！

彼奴は誰の仕出來した事なのか知らないんだ！』

人生は、小さな大學生から見れば、ナウーモフの理想などは問題にならぬ程、絶對の價値を有するものだつた。自分の說が齎らす結果を知つたら、恐らくナウーモフも今までのやうな事は口にしなかつたらう。彼は騎兵少尉クラウゼの短銃自殺が、ナウーモフの影響である事を疑はなかつた。彼は技師に會つて、悲しい事實を正面から言つてやりたかつた。

『殺したにしてもいゝ！』彼は抓られるやうな氣がした。『兎に角彼奴が殺したんだ！』

『キリール・ヂミートリエヴィッチ！　待つて下さい！』ルイスコフの聲が後方から聞えた。

小さな大學生は暫く待つた。二人は肩を並べて行つた。

ルイスコフも胸を傷めてゐるらしい。彼は氣遣はしげに洋杖を振つて、呆然と足下を見ながら歩を進めた。

『貴方は今度の事を何う思ひます？』チーシュは遂に口を開いた。

『えゝ……』ルイスコフは鬱々と答へた。『これに就いては隨分私も考へましたよ……何を愚圖々々してゐたんだらう！　一思ひにやればいゝんだ！　私はナウーモフ氏と全然同意見です！』

チーシュは足を止めた。

『何を言ふんです！』チーシュは腹立たしげに叫んだ。『何を言ふんだか譯が解らない！　そんな泣言を口にする時ですかよ？　空氣を吸つてゐるんですか？　貴方には愚痴と臆病に過ぎない事が解らないんですかなア？』

『ふう！』ルイスコフは激動したやうに低い聲で言つた。

『ふうぢやない！　なるほどでせう！　自殺といふのは生に敗れて、卑怯未練に逃げ廻つてゐる奴等のする事ですよ。第一、生命を斷つたり、自分が創造したのでもないものを破壞する權利は人間にない！』

『それはまた何故です？　キリール・ヂミートリエヴィッチ！』ルイスコフは信じられぬやうに遮つた。

此の簡單な平凡な質問には、チーシュも些か狼狽した。彼はこれに相當する簡單な平凡な返答を見出すことが出來なかつた。ルイスコフは彼の狼狽に心づいて、呆然と洋杖を振つてゐた。

『妙な質問だ！』チーシュは言つた。

『何が妙です？』ルイスコフは幾らか嘲弄するやうに遮つた。『私は當然な質問の積りですが。貴方は權利がないと仰有るが、それはまた何故なんです？』

『生命は貴方が造つたものぢやないでせう！』漠然とした自分の返答の自覺に焦れながら、小さな大學生は繰り返して言つた。

ルイスコフは微かに笑つた。

『私が造つたものでなければ何うなんです？』彼は蔑すむやうに言つた。『私は生を與へて呉れと頼みはしません。ですから生を保つ義務もありませんさ……キリール・ヂミートリエヴィッチ！　理窟を言へば斯うですが、實際は一言で足りるんです。若し生きてゐるのが退屈だつたら何うです？　生きてゐるのが苦しかつたら？』

『苦しい！　何うしたいんです？　貴方は人生を謝肉祭の連續にしたいんですか？　生は娯樂でない！　義務です！　幾ら苦しいからと言つて、失心しては不可ない！　奮闘しなければ不可ない！』

『キリール・ヂミトリエヴィッチ！　貴方は「不可ない不可ない」つて仰有るが、何うして不可ないんです？』

『さもなければ人道は跡を斷つ。人類は獸と化して飼匈ひになります！』

『何うならうと構はない！』

チーシュは射貫かれた雀のやうに身體を搖ぶつた。

『さうでせうさ……さう考へてゐるなら！』

そして暫くは口を噤んでゐたが、嘲弄するやうな口調で言ひ加へた。

『貴方もナウーモフ主義に感染れたらしいですね。』

『感染れやしません。たゞあの人と同意見なんです……すべてがすべてと言ふ譯でもありませんが。』

チーシュは彼を流眄に見て、腹立たしげに言つた。

『總てではない？　ではどの點が反對なんです？』

ルイスコフはてれかくしに洋杖を振つた。

『私は何方かと言ふと……クラウゼに共鳴しますね。即ち人間が……他人は何うとも、自分のために問題を解決したいんです。理想はつまらな……』

『貴方も莫迦な事を言ひますね。』チーシュは堪へられなくなつて遮つた。

ルイスコフは幾らか顏を赤らめた。そして洋杖を振るのをやめた。併し何と言はれてもといふ自信の色は彼の顏から去らなかつた。チーシュは直ぐにそれと察した。ナウーモフは何か彼に言つたのだ。哀れなルイスコフは他人の思想や言葉を著込んで、新思想に精通してゐるやうな顏をしてゐるのだ。それを凡人には不可解な自分の思想の積りでゐるのだ。

『ナウーモフといふ男は惡人ですぜ！』小さな大學生は腹立たしげに言葉を續けた。『あんな人間こそ、狂犬のやうに絞殺する必要がある。あの男は自分の惡事を知り拔いてゐるんです。何といふ事だ！』

ルイスコフは自分の理解してゐる事さへ理解し得ぬ小さな大學生の方を、蔑すむやうに見た。そして默然と口を噤んでゐた。

二人は口を噤んだまゝ、かなり長い間歩いてゐた。ルイスコフは頭髮を搔き上げた艶氣のない頭を高々と反り返してゐた。チーシュは神經質に身震ひした。胸の中は煮え返るやうだつた。彼は數千言の論駁を試みたかつたのであるが、ルイスコフ如き愚人の前でそれを口にするのは些か羞かしかつた。けれども矢張り激昂に捉はれて了つた。

『ルイスコフさん！　解りますか？』彼は『莫迦！』と言はないばかりだつた。『あんな讒言は現世紀の產物ですよ。一般の厭世的氣分があんなものを產んだんです。併し軈ては新しい波が襲うて來て、ナウーモフ主義の如きは、沈澱した古池の青水のやうに、跡方もなく流して了ひますさ！　今でこそ貴方には自殺の宣傳が賢の頂上のやうに見えても、五六年經つて御覽なさい、屹度あんな墓掘りのやうな奴から顏を反向けて了ふ！』

ルイスコフは疑はしさうな微笑を浮べた。そして洋杖を振り廻した。

『勿論』全身の血潮を沸かしながら、小さな大學生は言葉を續けた。『現在のまゝでは生は退屈です！　苦痛です！　生きてゐる甲斐が無いやうにも思はれませうさ。貴方は私が生を苦にしないと思つてゐるんですか？　それ所ではない！　併し何うする事が出來ます？　苦痛や爭鬪なしには、何物も得ることが出來ない。生は生贄を要求しますよ。來るべき時代まで我々は生きてゐないかも知れない。しかし我々は決してそれに驚かない。潔く死にますとも！』チーシュは斷乎と言つた。彼の明るい顏には、狂信者のやうな感激と絕望とが爭うてゐた。『來るべき時代の人々が我々の屍を乘り越えて行きます！　もう勇敢な叫聲が聞える！　もう厭世氣分もない！　社會は目覺めてゐる！　ナウーモフやクラウゼの如き徒は、明けゆく夜の影です！　卑怯に自殺すべき時でない！　我々――人道を問題にする人間は戰ふんです！　働くんです！』

ルイスコフはぢつと聽いてゐた。彼はもう洋杖を振り廻してゐなかつた。

『臆病者や嫌人主義者は勝手に死ぬがいゝ！　併し强者は最後まで自分の位置に傲然と立つんです。時は近づいた！　民本の時代です！　勝利は疑ひない！　來るべき時代のために、未來の明るい日や、赫々たる人道のために、我々は喜んで生活すべきです！』

チーシュは此の時自分の眼前に、無數の群衆や、飜る眞紅の旗を見た。彼は忽ち血を沸か

した。眼を光らした。古帽子を阿彌陀にして、往來中に響くやうな聲をあげてゐた。

併し四邊は灰色の垣根や、貧民窟や、野菜畑や、刺のある蕁麻や、薊の生ひ繁つた空地ばかりである。總てに無頓着な豚が、尻尾を卷きながら、往來の眞中を歩いてゐた。

最初はルイスコフの胸も感動に似たものを覺えた。けれども未來とか、群衆とか、人道とかいふ漠然たる言葉は、たゞ彼を陰鬱にさせるばかりだつた。彼は熱狂してゐる小さな大學生が煩はしくなつた。

『この人は何うしたんだらう？　何を喜んでゐるんだらう？』ルイスコフは斯う思つた。そして言つた。

『キリール・ヂミートリエヴィッチ！　貴方には同じ事なんぢやないんですか？　何時の事だか分りやしない！』

チーシュは不意に足を止めた。

『貴方は豚なんですか？』水道に身體をすり寄せてゐる豚の方を指しながら、彼は腹立たしげに言つた。

ルイスコフは狼狽した。

『頭腦のある人間と豚の區別は此處なんですよ。豚は自分のために生活する。併し人間は社會と自分との關係を、忘れる事が出來ない。建設を知らぬ嫌人主義者などの言ふ事に耳を傾けては駄目ですよ！』

小さな大學生は厭世主義の思想より憎むべきものを知らない程、人間が社會を愛すべきである事を固く信じてゐた。彼はなほ何か言ひ加へたかつた。が、此の時人道を塞ぐやうにしてゐた豚に突き當つて了つた。豚は恍惚と水道に身體をすり寄せてゐた。

豚は大聲をあげて、再び往來の眞中に逃げ去つた。そして尻尾を卷きながら、自分を嚇した小さな大學生の方を、共處から身動きもせずに見詰めてゐた。

『畜生！』チーシュは惱ましさうに叫んだ。

ルイスコフは思はず微笑を浮べたが、直ぐまた眞面目な顏を作らうとしてゐた。チーシュは彼の微笑を見て、自分がうつかり口を辷らした事に氣がついた。彼は餘りに昂奮したのが羞かしかつた。

『莫迦な！』彼は斯う思つて、顏を顰めながら言つた。

『まア、いゝです……何時か私の所にいらつしやい……話しませう……今日はもう歸らなければ……左樣なら！』

二人は別辭を告げた。小さな大學生は行き當つた横道を曲つて、重苦しい惱ましい胸を抱

きながら、何處までも續いてゐる垣根に添うて行つた。ルイスコフは洋杖を振り廻して、眞正面を見ながら、大通りを先へ歩いて行つた。

行き逢ふ人々は物珍らしさうに、彼の顏を見てゐた。彼がクラウゼの自殺の現場に居合はした事は、もう街中の人が知つてゐた。それは彼をその主人公のやうにさせた。

ルイスコフは彼等の眼光に氣がついた。彼は自分勝手な解釋を施して、誇らしげな顏を作つた。彼は自分の表情が如何にも詩的で、神祕的な運命の影が全身に射してゐるやうな氣がした。何故かは自分にも解らないが、實際自分が主人公のやうに思はれてならない。そして連發短銃を握り締めながら、最後の諷刺たつぷりの演說をした騎兵少尉クラウゼを、何時の間にか自分の事にして了つた。實際一言もさう考へた譯ではないが、彼はそれに氣がつかなかつたのである。

『その時になつたら、彼等は自分を理解するだらう。』彼は苦しい快感を覺えて、こんな事を考へた。

彼は理解すべきであるとは自分でも思はなかつたが、理解するだらう位には信じてゐた。屹度自分を理解して呉れるだらう。自分の偉大なる心を理解するだらう。悲劇的な運命を理解するだらう。

程なく彼等は自分を憐れむやうになるだらう。令嬢達も自分に興味を起すだらう。彼等は一會計官であるが爲めに、從來自分には注意を拂はなかつたのだ。また自分の最後の言葉は街中に擴がつて行くだらう。

勿論だ！　彼等は自分を一會計官に過ぎないと思つてゐる。併し自分は英雄だ！　萬人が恐怖に戰慄する最後の一線を、怖れる事もなく傲然と越えるのだ。哀れなる生には愛想が盡きた。愚かなる喜劇には愛想が盡きた。そして自分は死を……美しい死を選んだのだ！

ルイスコフは餘りの驕傲に氣息が詰らぬばかりだつた。

彼は世界を侮蔑するやうに、『蒼白い頭』を高々と上げながら、大通りを歩いて行つた。彼の頭腦は幻想に燃えた。彼は死や苦痛のお蔭で、死後の自分に戀する美しい少女が、もう眼前に見えるやうな氣がした。少女は言ふ。

『あの人は戀を知りませんでした。併しあんなに憧憬れてゐたんです……　貴方がたはあの人を理解しませんでした。理解する事が出來ませんでした。あの人は死んで了つたんです。私は冥府であの人の妻になります。』

ルイスコフの眼前には、秋の墓地や、悲しみに沈んだ女の姿が現れて來た。白衣の女は何故か髪を亂して、秋草を墓に獻げてゐた。

彼は自分の小説を思ひ出した……黄色い頬は幾らか赤くなつた。ルイスコフは瞬きして、怯々と四邊を見廻した。いや、少女などに用はない。自分は寂しい生活を送つて、たつた一人で死ぬのだ。その方がいゝ。その方が美しい。自分は知らぬ人々に圍まれて、棺の中に横はつてゐる……自分の顔は嚴かで、蒼褪めて、得も言はれぬほど美しい……周圍には將校達が項垂れてゐる……ルイスコフは自分が軍人でない事にも氣がつかなかつた。そして葬曲さへも耳にした。銅製の喇叭は嚴かに鳴つて別離の一齊射擊が今日のやうに響く……

我が身に對する憐憫からルイスコフの鼻は詰つた。彼は、我が家の前まで來たのも忘れた程、深く幻想の世界に彷徨うた。そして子供の時分から親しみの深い哀れな側家を、暫くは酩酊したやうに呆然と見詰めてゐた。側家には二つの暗い窓があつて、皮膚を剝がれたやうな陰鬱な顏をしてゐた。

突然彼は會計長がクラウゼの事件に關係した事を快く思つてゐない事や、時も時、事務の大過失を彼に説明しなければならない事を思ひ出した。ルイスコフは、惡寒を覺えて戰慄した……若し役所を免職になつたら何うしよう?

彼は呆然と氣を失つて了つた。何んだ! 自分は英雄ではないか!

ルイスコフは宅地を通つた。そして家へは寄らずに菜園へ出た。彼は哀傷に捉はれて、自分の陰鬱な部屋や、惡臭のする臺所や、年中小言ばかり言つてゐる母の顏を見たくなかつたのである。

此の町に添うた花園や菜園は、みんな大きな沼に面してゐた。崩れかけた垣は沼の中に沈んでゐた。曲りくねつた路次や、藻茸の屋根や、低い鎭樓や、市場の赤い店や、もう薄く黄色くなつた哀れな花園——陰鬱な街のパノラマは、霧のこもつた岸に搖めいてゐる。白い空は低かつた。秋の微風は枯蘆や枝垂柳に囁いてゐた。唸るやうな響きが間斷なしに沼の上を走つて行く。蘆の向うには一面の水——沼の面が白く見える。細かい波が何時も一處だけ動いてゐるやうに思はれる。灰色をした漣の眞中に、黑い一點が輪を描いてゐた。ルイスコフは機械的にそれが鴨であるのを識つた。

『翼が疲れたんだなア……凍つて了ふだらうに!』

今はまだ間を描きながら泳いでゐる。一思ひに死んで了へばいゝに! さもなければ……寒氣は襲うて來るし、周圍の水は日毎に狹まつて來るし……何のために水を搔き擴げようと して、鴨は水の中で身を藻搔くだらう……併し水は黑くて冷たい……夜になつて睡眠につくと、氷は鴨を閉ぢこめて了ふ!

『愚かな鳥だ!』

彼ルイスコフはそれまで待つてはゐまい。チーシュには好きな事を言はせて置かう。大學生だとか、何でも知つてゐるとか、何でも讀んだとか……嘗く斯うしてゐて、此處を去るんだとか……勝手な事を言ふ。五年も會計官の椅子に坐つた上で、人道を口にするがいゝ！

ルイスコフは憎惡の笑ひさへ洩らした。

『人道！　何處に人道がある？　みんなやくざものばかりだ！　そりやロでは何とでも言へるが　やくざものの他には何にもない！　百年に一度位はほんたうの人間が生れるかも知れない。人道は其處にあるのか！　何處にあるのだ？　會計長か？　商人か？　貧民か？　無學の百姓か？　官吏か？　莫迦な！　人間を個々に見れば塵屑だ！　塵屑が伴ふものが人道なんだ！　人間に生を維持させる爲めのものだ！　呪はれた塵屑！　手頃の柳に首を縊つて了へば、それこそお前達にとつては人道なんだ！』

此等の言葉は、ルイスコフを狂氣に導いたのである。彼は世人が人道を嘲笑してゐるのか何うか、ほんたうの事が解らなかつた。何處を振り向いても、豚の鼻ばかりが突き出てゐる。新聞では無賴漢のやうに罵り合つてゐる。一人でも卓越した人間が出ると、奇蹟を見るやうに驚異の眼を見張つて、聖物のやうに奉る……何處も此處も塵屑ばかりだ。そして此等の塵屑を集めると、彼等は直ぐに讃美歌を歌ひ出すのだ。

『人道か！』

ルイスコフは哀傷の情に捉はれて了つた。再び柩の白い蓋が搖めく。葬曲が聞える。一齊射擊が響く。美しい氣高い顏が棺の中に現れる。

彼は此の時遂に、自分が軍人ではない事や、葬曲も一齊射擊も美しい容貌もなくて、彼の全生涯のやうに、哀れな不幸な葬儀が始まるのである事を意識した。

死の舞臺に於ても、美や氣品は彼のものでないのだ。

ルイスコフは胸が惡くなつた。彼は頭を沼に突込んで、そのまゝ此處に凝結して了ひたかつた。

彼は急に振り返つた。そして憎惡と哀傷から蒼褪めた顏に決意の色を浮べながら、家の方へと歩いて行つた。

彼が自分の決心を意識したのは此の瞬間であるらしい。此の日と翌日に起つた餘の事柄は、此の動かすべからざる決意の結果か、憎惡や絶望の最後の痙攣に過ぎないのである。

部屋に入つて行つた時、臺所の惡臭と、玉葱や油の煮詰める匂ひは、ぷうんと彼の鼻をついた。洗濯物の浸つた桶から、甘い湯氣の絲が天井に昇る。床の上には泥だらけな足跡が亂れて、その窪みには石鹼の水が溜つてゐる。窓は汗をかいてゐた。冬の日のやうに薄暗くて

息苦しい。母は袖を捲りながら、骨張つた黄色い手で、食事の支度をしてゐた。彼女は魚のやうな愚かしい眼で、自分の息子を意地悪さうに迎へた。

『會計長さんの所へは行かなかつたのかい？』

ルイスコフは喉を詰らした。

『行きませんでした。もう行くもんですか。何うでもなれ！』彼は荒々しく叫んで、傍を通らうとした。

母は皿を推しやつて、嶮しく彼の顏を見詰めた。

『何だつて？　そんなら御役所は免職になつたのかい……莫迦！』

ルイスコフは憎々しげに彼女の顏を見た。嫌悪の情は、恰かも彼の眼を開かせたやうである。突然彼は母が穢ならしい、意地の悪い　愚かしい、傍惡しきつた老婆である事や、彼女の顏が黄色く弛んでゐる事や、裾が油に汚れてゐる事や、魚のやうな圓い暗い眼をしてゐる事に氣がついた。

『腐れた鰤のやうだ！』彼の頭腦にはこんな考へが閃いた。

『行きますよ！　人の顏ばかり見なくつたつていゝぢやありませんか！　胸が悪いや！』彼は胸に湧いて來た狂ほしい忿怒を漸くにして抑へながら言つた。

『胸が悪い？　私は胸が悪くないと思つてゐるのかい？』老婆は、老いの愚かな忿怒を覺えて、息子に喰つて掛る口實を得たのを喜ぶやうに叫んだ。

ルイスコフは腕を振つて、洋机についた。

二分間ばかり二人は默然と食事してゐた。程なく老婆は匙を置いて、唐突に聲をあげた。

『神様は殺して下さらない！　お前は私が樂をしてゐるとでも思ふのかい？　お前を喰べさせて……』

『また始まつた！』ルイスコフは惱ましさうに言つた。

『何が始まつたんだよ？　私はお前のお母さんぢやないのかい？』

ルイスコフは彼女に注意も向けまいと思つた。そして低く皿の方へ屈みながら、食事してゐた。けれども母は止めなかつた。

彼女の眼は憎惡に燃えてゐた。彼女の聲には鋸をひくやうな響きがあつた。

『お前の事を心配してゐますよ。御役所を出されたら、餓死するか、垣根の下に行倒れになるんだよ！　私は方々駈け廻つて……職を捜してやつてさ……一人前の人間にしようと思へばこそだ……それなのに、厭に氣取つてさ……お前が氣取る柄かよ？　莫迦！　自分を可哀

さうと思はないまでも、お母さんを可哀さうとお思ひ！　お前のやうな莫迦でも私が産んだんだよ！』

ルイスコフは、疾うから母の愚痴に慣れてゐた。彼にはそれが時效によつて消滅しない生活の附屬物のやうに思はれてならなかつた。彼の生活は愚痴そのもののやうに愚かで、暗かつた。彼女は年中愚痴をこぼして、その日その日の生存に戰いてゐた。恰かも二人の生存は何人かの惠みであつて、その人は自分達を思ひ出す事も出來ろし、草鞋蟲のやうに踏み潰す事も出來るらしい。彼女は息子が役所から戻つて來る毎に、會計長は滿足してゐるかとか、上役の人が怒りはしなかつたかとか、仕事を精密にやつて來たかとか尋ねるのである。で若し何か間違ひでもあると、彼女は恐怖にうたれて口汚なく息子を罵つた。そして頭巾を被ると、帳簿頭の所へ泣きつきに行つた。――會計長の家には流石に鐵面皮しく行かれなかつた。彼女にして見れば、既にこれが大仕事である。彼女は有らゆる人々を怖れて、有らゆる人々に頭を低くしてゐた。そして街中に莫迦な噂を擴めたり、息子に羞かしい思ひをさせたりして、漸く心を安めるのであつた。

ルイスコフが物心づいた頃から、彼女の愚痴は引續いて止まなかつた。父も同じやうに苦しめられてゐた。そして哀れな不幸な父は素直にこれを忍んで、たゞ時折に吐息を洩らすだけだつた。

ルイスコフは父の事を思ひ出した。――優しい微笑、喫驚したやうに瞬く眼、剃刀を當てぬ頬、鳩色の鼻、禮儀、挨拶……意地惡な老婆と一緒に暮した長い退屈な一生、こつそり飲んでゐた酒、垣根の下に醉潰れた事、裂れた肘、慢性の加答兒、掛け通した椅子……會計長や帳簿頭や檢察官や……自信ありげに大聲で口を利く人々の前での戰慄……貧窮と、戰慄と、火酒と、辛くも首をきられずに濟んだ會計省との他には何にもない。戀もない、信仰もない、思想もない、絶望さへもない……たゞ混沌たるものがあつたばかりだ。

ルイスコフは恐怖に捉はれた。これは自分自身の運命ではあるまいか！　他には何一つあるまい。あり得べき筈がない。

『お母さんを可哀さうとお思ひ！　お前を産んで、育てゝ、養つて……』老婆は何時までも一つ愚痴を並べた。

不意にルイスコフは匙を投げ出して立ち上つた。

『たれが頼みました？』彼は荒々しく言つた。『恩を著せる氣になつてゐる！　産んでやつた！　頼みもしないのに、生を與へたのなら、そんなら……私は貴方がた兩親といふものが呪はしい！』

彼は拳を固めた。氣息を喘いだ。喉を鳴らした。そして急に部屋から跳び出して行つた。

老婆は眞蒼になつて、口をぽかんと開けたまゝ、彼の跡を見送つてゐた。彼女は長いあひだ自分にかへることが出來なかつた。そして今の出來事が腑に落ちぬやうに、ぢつと椅子に腰掛けてゐた。暫くすると、長い黄色い顔は妙に歪んで、大きな涙が皺だらけな顔に流れて來た。

『これが母に言ふ事だらうか？　生みの母親を呪ふなんて！　おゝ神様！』彼女は斯う唸つて、洋机の端を叩いた。

『サーシェニカ！』

ルイスコフは背後の扉を力まかせに閉ざして、長い間部屋の中を歩き廻つてゐた。彼の全身は震へてゐた。長い顔は眞白だつた。眼には頼りない哀傷の情が浮んでゐる。彼は氣息を詰らして、母ではない……彼を犬ころか、誰にとつても不必要な塵屑のやうに投げ出して、これが彼の感謝すべき生であると說得してゐる人間に、絶えず拳を固めて威嚇してゐた。

『何の事だ……何の事だ！』ルイスコフは部屋の中を歩きながら呟いた。

水色の手帳が彼の眼に止つた。ルイスコフは無意識に讀み返しながら、一分間ばかりは狼狽したやうに、ぢつとそれを見詰めてゐた。

『戀……アレクサンドル・ルイスコフ作……戀……アレクサンドル……』

彼は急に躍り掛つて、それを引掴むと、寸斷々々に引裂いて了つて、壁の方へ叩きつけてやつた。白と水色の紙片は訴へるやうな音をして、部屋中に飛び散つていつた。ルイスコフは漸く正氣にかへつて、重い頭を抱へながら、窓の前の椅子にぐつたりと身體を投げ出した。そして硝子扉の外に擴つてゐる濁つた沼の方へ、絶望的な視線を向けた。

長いあひだ彼は斯うしてゐた。彼の心は霧に包まれて、心臟は靜寂の中に凝結してゐた。彼の頭腦には流行唄の一節が執拗く響いてゐる。

哀れなる少女は此處に眠れり
彼女は肺を患ひて……

『何うでもなれ！　何うにでもなるがいゝ！』ルイスコフは無意識に繰り返して言つた。併し例の曲は彼の意志に逆つて、幾度となく繰り返されるのである。

白きリンネルの下に
碧玉の瞳も消ゆるならん

濁つた窓の外には荒廢した野菜畑が灰色をしてゐた。其處には腐れたキャベツの莖が見えてゐた。その後方には冷たい沼が白々として、愚かな鴨が彼方此方泳ぎ廻つてゐた。

ルイスコフの胸は頼りのないほど靜まつて來た。狂ほしい衝動も過ぎて、殘つてゐるのは疲勞しきつた、光明のない、陰鬱な哀傷の情ばかりである。

夕闇は濃くなつて來た。

ルイスコフは低い訴へるやうな唸り聲を耳にした……恰かも蜘蛛の巣に絡まつた蠅が、何處か近くに泣いてゐるやうである。彼は顔を上げて、その唸り聲に耳を傾けた。

『お母さんが泣いてゐるんだ！』

彼は誰かが近づいて來て、喉を締めつけるやうな氣がした。

『う……うッ……』ルイスコフは眼を閉ざして、頭を抱へながら蹌踉(よろめ)いた。『何をするぞ、神様！』

併し『誰か』は耳も傾けずに、彼の喉を締めつけてゐる。そして恰かも彼の耳の近くに、細い唸るやうな聲で、唄を歌つてゐるやうである。

哀れなる少女は此處に眠れり

彼女は肺を患ひて……

二十

日は暮れた。蒼白い微光が日光に代つて、畫室の窓に訪れて來た。パレットには餘程前から繪具が見えない。併しミハイロフはそれに氣がつかなかつた。彼は何氣なく振り返つて、部屋隅に擴つた物怖ろしい霧を見てから、ずつと繪筆を投げ出してゐるのである。

どの位ゐ畫布の前に時を過したのか、ミハイロフはそれさへ知らなかつた。けれどもパレットを捨てると、彼は急に背中が痛んで、疲勞のために足が顫へてゐるのを感じた。

彼は反對側の部屋隅に退いた。そして熱病患者のやうに底光りのする眼で、ぢつと畫布の面を見詰めてゐた。前にも彼は退いて見たのであるが、彼の眼も仕事の際中には、とかく色彩に奪はれ勝ちだつた。彼も背景の近過ぎる事や、或る形狀が十分に描出されてゐないことや、前景の色彩を強くする必要のある事には氣がついた。併し繪そのものは解らなかつた。けれども今日の仕事が終つた今、彼は心から仕事を離れて、繪畫全體を見る事が出來たのである。

四邊(あたり)はすつかり暗かつた。壁に懸つた寫生畫は色彩を失つて了つた。デッサンは妙に歪んで、相互に融け合つてゐた。風景畫に代つて、歪んだ身體(からだ)や、奇怪な怖ろしい顔に、斑點の散らばつた物がある。たゞ描きかけの大きな畫布の上には、窓の弱々しい光りが殘つてゐて、其の繪は凄いほど闇の中から浮き出てゐた。

ミハイロフは突立つたまゝ、貪るやうに畫布を見詰めてゐた。彼の指先は依然として仕事を續けてゐるやうに動いてゐる。

例によつて、これも心の奥の幽處から突然湧出したものである。最初彼は大料理店の一室の下畫を描いた。――酒壜や果物や皿や杯は、まだ片附けられてない。黎明の弱々しい光りは、絹カーテンの下された窓に觸れてゐる。肘掛椅子の上にはだらりと腕を垂れたまゝ、自殺者の屍が横はつてゐる。彼は、謎のやうな怖ろしい死の靜寂と不動に充ちた部屋を支配するやうに、家具を動かしたり、自殺者の姿勢(ポーズ)をかへたりして、幾度かデッサンを機械的に描き改めた……と、何物かが急に彼の心を照らす。何物かが彼と描かれた畫面との間に擴がる。混亂した幻像が腦髓の内部に燃え始める。そして内部の苦しい戰慄が全身に起つて來る――彼はこれを知つてゐた。愛してもゐたし、怖れてもゐた。何故なれば、これは果しない不滿の堪へ難い哀傷と快感とを持ち來すのである。

打克ち難い衝動に捉はれたミハイロフは、自分の下畫を投げ出して、大きな畫布や額縁を引出したり、釘や金槌や釘拔を捜したりした。而かも病的な苛立ちと激昂との不可解な動搖の中にやつたのである。容易に埒の開かぬ事や、釘が何處かへ見えなくなつた事や、畫布が擴がらない事や、額縁が歪んでゐる事は、無暗に癪の種となつた。漸く畫布が思ふやうに擴がると、今度はパレットに繪具の少い事が腹立たしくなる。ミハイロフは絶望したやうに、思ひきつて繪具を推し出した。そしてそれと同時に、繪筆を掻き集めて、空虚(からつぽ)になつた繪具の管を憎々しく抛り出した。彼は何事かを失敗して、刻一刻と貴重なるものを失つて行くやうな氣持になつた。神經は此の病的な感觸に殆んど堪へる事が出來なかつた。

準備は漸く出來た。彈力のある大きな平らかな畫布は、殆んど畫室全體を塞いでゐた。ミハイロフは繪具皿と繪筆の束を持つて、數分間はぢつと畫布の前に突立つてゐた。恰かも他人の眼に映(うつ)らぬ物を見てゐるやうである。彼は繪筆で急に太い縞を塗(なす)つた……と、組みの甘い支柱は、大きな畫布の動搖に弛んで、額縁は後方へずれていつた……再び繪具皿を捨てゝ、初めからやり直さなければならない。ミハイロフは苛立ちと腹立ちに泣き出さないばかりだつた。

突然彼は時間(タイム)に就いての有らゆる觀念を失つて了つた。恰かも、心の怖ろしい緊張の中に凝結してゐるやうだ。

彼は齒を喰ひ縛りながら、身體の輪郭をなす滑らかな太い線や、粘りついたやうな瑞々しい斑點や、郭大された薄い影の色を塗つてゐた。併し彼は何にも描き出さなかつた。畫布の一方の端まで行つては、また以前(もと)の處へ歸つて來て、何にも描き出しはしなかつた……畫布

は震へながらずれる。人氣のない家の内部は靜寂に支配されてゐる……光輝のある、殆んど混沌とした、而かも美しいものが、繪具の斑點の中に閃く。ミハイロフは齒を喰ひ縛りながら、製作を續けてゐた。彼の胸は悲しかつた。

最早彼は數多の經驗と感情とを有つて、笑つたり、飲んだり、話したりする事の出來るミハイロフではなかつた。全身の氣力は昂奮に燃えて、或は輝き、或は見開く眼の中に集中されてゐる。彼は自分の繪の題目を忘れ、自分の經驗を忘れ、クラウゼの事を忘れ、狂技師の話に喚起された蒼白い幻影を忘れ、リーザの怖ろしい眼を忘れ、ジェーネチカの美しい顏を忘れた。たゞ彼等との細い聯絡の絲が殘つてゐる。それが怪物のやうな鞠となつて、ゆるやかに動いては、不吉な作品の幻影になつて行く。

彼の美しい顏は眞蒼だつた。そして項垂れてゐた。彼の眼は光つてゐた。彼は絶えず乾いた脣を舐めてゐる。

正午頃、彼は一度畫布から退いた。併し釘付けられたやうな視線は畫布を離れなかつた。彼は亂れた髮を突立て、青い繪具だらけな顎をして、繪具皿を手にしたまゝ、晝食を攝つた。それとても、自分の仕事の杜切れに氣がつかなかつたほど機械的なものである。食事を濟ますと、ミハイロフは食器を洋机の上に置き、再び繪筆を掴んで、斑點を打つたり、長い線を引いたり、杯の端に青い光りの色を加へたりした。そしてもう夕方迄は繪筆を捨てなかつた。

併し最後に身を退けて、深い溜息を洩らしながら、繪具皿を置くと、彼は忽ち以前のミハイロフにかへつたのである。

亂雜な線や、思ひの外大膽な影や、まだ畫布に殘つてゐる白い個處や、混沌とした粗雜さの中には、彼の胸中に存するものが、感じたまゝに描出されてゐる。此の混沌とした粗雜さは、彼の下繪に力と新鮮と魅力とを加へた。併しこれ等は作品の完成と共に消失するのであらう。消失して了ふに違ひない。

霧深い街の蒼褪めたる黎明の光りは、透明な絹カーテンを透して、大料理店の壯麗な一室に怯々と流れ込んでゐる。電燈は消されて、騷がしい饗宴の小道具には、蒼白い曉の色が朦朧と觸れてゐた。椅子や洋机は亂れてゐる。洋机掛は酒に汚れて、その上には酒壜や色硝子の杯が並んでゐる。葉卷の冷たい煙が漂うてゐる。銀瓶の中にはナプキンで包まれた酒壜の喉が突き出てゐる。一本の酒壜は洋机の端に轉げて、鮮血のやうに赤い葡萄酒の帶は、床の上に水溜りを拵へながら、洋机掛の上に流れてゐる。黎明の光りは硝子張りの側面に散らばつて、洋机の傍の肘掛椅子にぐつたりと凝結した哀れな男の蒼白い顏を接吻してゐる……

自殺者は夜を徹して饗宴に疲れた若者である。口もとに皺の寄つた彼の面長な死顏は、俯向

いて、酒と女と遊びに過した放埒な一生を物語るやうに、青い影が漂うてゐる……血は襯衣の襟や燕尾服の縁を汚しながら、蒼白い頬に流れてゐる……連發短銃は力なく垂れた腕から床の上に落ちてゐる。森然とした怖ろしい部屋のなかは女達で一杯である。彼等は蒼白い血の氣のない黎明そのもので造られた亡靈のやうに朦朧としてゐる……屍の周圍に集つて、泣いたり、擦つたり、脅したりしながら、腕を差し延べてゐる……狂女のやうに昂奮してゐるのもある、慘いほど冷靜なのもある、祈つてゐるのもある、憎惡に燃えたのもある……けれども彼等の歪んだ顏は、みんな屍の方を向いてゐる……贅澤な化粧をした、高價な草花のやうに美しい浮氣女もゐる。下素な身振りをした、眼の下に青い暈のある、脣が血を塗つたやうに赤い濃艶な女優もゐる。薔薇色の編物を足に纏うた薄衣のオペラ女優は、素肌の細い腕を屍の方へ差し延べてゐる。ジプシイ女の淺黑い顏は、憎惡に燃えた眼で彼を睨んでゐる。部屋隅には白いエプロンを掛けた少女が泣いてゐる。悲しみに沈んだ、灰色の貧しい衣裳の女は、屹と眉毛を動かしながら、身動きもせずに突立つてゐる。素肌の肩に黎明の青い光りを浴びた凄艶な賣笑婦は、飲みかけの杯を差し出してゐる……破産した生活の思ひ出と、大都會の朝の青白い霧で織られた亡靈のやうな女達は、泣いたり、祈つたり、嘲したり、呪つたりしてゐる。

此の作品は何を意味してゐるのかと訊かれても、ミハイロフには說明する事が出來ないだらう。これは空虛になつた彼の靈である。怖ろしい運命の端に近づいて行く彼の一生である。あらゆる哀傷も、光輝ある幸福に對する熱狂的な衝動も、あらゆる絕望も、クラウゼの死も、リーザやネルリやジェーネチカも、ナウーモフの狂人じみた言葉も、忘れたる過去の記憶も――哀傷と最後の創造力との激しい衝動の中に、有らゆる物が此の作品と融合してゐるのだ。

それは言葉で表現する事が出來なかつた。併し、空虛になつた胸の奧底から搾り出された眞理である。それはミハイロフ自身の胸を壓した。

夕闇は濃くなつた。畫布の上の幻影は愈々物凄くなつて來た。自殺者の顏は、永遠の闇へ消えようとするやうに、蒼白く融けてゆく。

ミハイロフは總てが謎のやうな霧の中に融け合ふまで、身動きもせずに立つてゐた。暫くすると溜息を吐いて、眼を閉ざしたまゝ、安樂椅子に腰を下ろした。

終日彼を畫布の前に立たした怖ろしい緊張も、忽ちのうちに弛んだ。全身は輕い疲勞に包まれた。彼は安樂椅子の枕に凭れて、力なく腕を垂らしながら、ぢつと腰を下ろしてゐた。暮れゆく今日の最後の光りは、彼の顏を蒼白く照らしてゐる。これは憔悴した美しい顏が、

彼の作品から抜け出たやうに思はれる。

もうミハイロフは繪を見てゐなかつた。恰かも自分の作品に就いて、何か頭腦を惱ましてゐるやうである。併し彼が畫布の上に描いたものは、漠然と記憶に浮んだものと融け合つて了つた。見覺えのある顏が彼の眼前に現れて來て、或は悲しげな、或は恨めしげな、或は愛と苦しみに充ちた眼で彼の顏を見詰めては、幻のやうに霧の中へ消えながら、音もなく行つて了ふ。昨日のやうに判然とした顏もある。忘れかけた遠い過去のやうに朦朧とした顏もある。何となく悲しい。何となく殘り惜しい。

不圖ミハイロフは、終日誰にも會はなかつた事や、誰の聲にも接しなかつた事を思ひ出した。彼の事を思ひ浮べた者も恐らくあるまい。彼が頭腦を惱まして、繪筆を動かしてゐたのは、誰にも關係のない事なのである。

自分の作品が他の數百點の繪畫と共に展覽される時見物に來るべき人達も、今は何處か此處から遠く離れた處に生活してゐる。彼等は感激したり嘲弄したりする事だらう。或は自分の作品を見て、思ひに沈むかも知れない。併し今は自分の事を考へてもゐない。自分から無限に隔つた處にゐて、自分が與る事の出來ないそれぞれの生活に支配されてゐるのだ。自分はたつた一人で生活しなければならない。併し自分は彼等に踏み躙らせ、土臺の上に置かせる爲めに、苦痛と疑惑の中に自分の胸が堪へ忍んで來たものを、彼等に提供しなければならないのだ。

此處には何となく莫迦らしいものがあつて、彼の胸に不可解な感情を喚起した。それは彼等に對しても、自分の作品に對しても、自分の生命に對しても、自分自身に對しても——有らゆるものに對して嫌惡と反抗とを產んだ。

ミハイロフも直ぐには此の感情を了解する事が出來なかつた。何うして斯う悲しいのか、何うして斯う不快なのか——彼にはそれが解らなかつた。

彼は不圖ある青年作家が自分に話した言葉を思ひ出した。その男は自己を反省して、深く思ひに沈んでゐた。

『昨日僕は窓際へ行つて、硝子越しに往來を見てゐた。僕の宿は四階で、仲々高い處にある……一言いつて置かなければならないが、その時まで僕は調子に乘つて、筆を動してゐた……見ると、莫迦に白い……可笑しいほど白い日だ……空は低くて明るくて、一面に白い雲だ。風は乾燥して、太陽は見えない……秋だなア！　敷石道は風のお蔭で、祭日か何かの前に掃き淨められたやうだ。けれども通行人は少くて、何となく物悲しい。祭日の準備はすつかり出來たやうだ。準備は生氣と歡喜とをもつて出來上つた。だが用意がなつて、綺麗に片づい

て、もうする事がないとなると、今度は何だか退屈になつて、何が祭日だか毫つとも興味が起らない。僕は往來を見下しながら、祭日の事だの、何もかも取片づけられてがらんとしてゐる事だの、空や家屋や敷石道が白々としてゐる事だの考へてゐた……考へると言ふよりは、此等の印象を頭腦に藏ひ込んでゐるのを識つたんだな……全く無意識的ではあるが、同時に頭腦は判然と働いてゐる……これは自分にとつて入用なものだ、忘れては不可ない、街ががらんとしてゐる所や、主人公が往來を見てゐる所を何かに書いて見よう……斯う感じると、僕は直ぐ自分の感じてゐる事を意識した。僕はチエーホフの「ツリゴリン」を思ひ出して不愉快になつた。チエーホフの言ふ通り、ピアノのやうな恰好をした白雲を見ると、ピアノのやうな白雲が漂うてゐる事を、小說の中に書き入れようと考へるんだ……僕は不愉快ながら自分を說得した——「ツリゴリン」は想像の人物でも何でもない、作者は實際これを考へてもゐないんだ。白い光りも、白い敷石道も、人通りのない事も、四階から硝子越しに見てゐる事も、祭日に就いて考へてゐる事も、思ひ出して書かうと思つた事も、「ツリゴリン」の事も、自分の不愉快な感情の事も、チエーホフが「ツリゴリン」を書いた事も、それを僕が考へた事も、此等の言葉そのものも、殆んど意識する事の出來ないほど微細な感情や思想の流れ——有らゆるものを記憶に止めて創作するんだ。僕は堪へ難いほど不快になつた。そして長い間解決がつかなかつた。併しこれが自分自身の感情ではないか！　眞實の經驗ではないか！　赤裸々の心ではないか！　僕は感情や苦痛や疑惑や眞實さへも集めて、眞珠か何かのやうに隱して置く……自分の所有する纖細い感情や、苦しい經驗や、深い眞實に對して、名聲と報酬とを得たいのだ。隨分さもしい、愚かしい心だ。けれどもさうなのだから仕樣がない！　謙つた言葉を口にして、言譯するのは澤山だ！　誰だつて同じ事だ！　大美術家だらうが、大思想家だらうが、天分のある詩人だらうが同じ事だ！　さもなければ藝術などのあらう筈がない。經驗は經驗されて了へば、經驗されたといふ一事で、萬事は既に終つてゐる。それに肉附けする必要があるものか！　最も偉大なる思想にせよ、それが自分一個のものであるなら、肉附けようが肉附けまいが、それはもう大した問題にはならない。僕が一つの思想を抱いたら、他人が知らうと知るまいと、それは僕にとつて既に一つの思想である。街へ出して、自分の心を赤裸々にして、世人の注目や評價や理解を氣遣うて……我々は賣笑婦でなくとも、洒落者か職工位のところだ。感情の美によつて生活の保證を得るために働くのだから、賣笑婦よりは眞實な所がある。』

ミハイロフは其の時彼の言葉を面白く聽いた。併し彼には全く解らなかつた。正直の所、彼の言葉は餘りに漠然としてゐた。彼はたゞ惡意に充ちた胸中の嘲弄と共に、此の青年作家

が自分の苦しみで媚び、自分の言葉に聽き惚れながら、話してゐる事と思つてゐた。恐らく作家もそれに氣がついたのであらう。彼は幾らか顏を赤らめて、眞實の苦しみを眼に浮べながら行つて了つた。

けれども夕闇と孤獨の死んだやうな靜寂の中で、ミハイロフは不意に彼の言葉を思ひ出した。そして病的な激しい嫌惡の念を覺えた。彼は直ぐにも立ち上り、ナイフを引掴んで、自分の繪を上から下に切り裂きたかつた。その希望は殆んど堪へ難いほど激しいものだつた。併しこれを引裂いたら、生涯自分の作品を虐殺した罪に苦しめられるだらう。ミハイロフは恰かも生物を切るやうに、虐殺といふ字を思ひ浮べた。

彼の胸は亂れて來た。親しい人に會つてみたい。慈母のやうな優しい溫かい親しみに接したい。何もかもうちあけたい。心の中をさらけ出したい。そして其の親しみの中に、自分の胸を溫めて、自分を壓し苦しめてゐる總ての物を沈めたい。

眼の光つた、眉毛の黑い、生々とした明るい顏が、再び彼の眼前に閃いた。それも鋭い痛みを殘しながら閃くのだ。——彼は總てを思ひ起した。マスクワのホテルの一室、柔かい寢臺、露はな肉體、敵意を有つてゐると思はれるほど鋭い肉慾……傷けられたもの、拭ふ事の出來ないほど汚されたもの、辱められたもの、不具にされたもの……

『リーザの事か？』

彼はリーザを追ひ出さないばかりにした。併しそれは何でもない……それは償ふことが出來る。

そして彼は直ぐにそれを償ふ必要のない事を識つた。

『私の運命の人！』ミハイロフは彼女の言葉を思ひ出した。

哀れな少女だ！　笑ふべき女だ！　彼等の愛などで自分が滿足出來ると思ふのか？　自分の胸はもう空虛である。そんな愛情に對して何の支拂ひが出來る？

彼は愈々悲しくなつた。胸の中は愈々空虛になつて來た。恰かも何人かに靈を奪はれたやうである。

粗暴な愛撫は望ましくない。春のやうな優しい樂しい物思ひに沈みたい。何事かを幻想し、期待に胸を戰かし、祈禱も冒瀆もせずに、怖れや戰きや見果てぬ夢と共にありたい。

『莫迦な！』ミハイロフは急に荒々しく獨語を言つた。

そんな物はない。そんな物があり得る筈はない。春のやうな戀は一時的のものだ。それは晴れた朝の眠覺めの床で、太陽よ！　太陽よ！　と叫ぶやうなものだ。跳び起きたい、笑ひたい、何處かへ駈けて行きたい、金色の光りや、綠の樹木や、朝の空氣の樂しい海に浸つて、

心ゆくばかり身體を溷めたい。軈て仕事にかゝる。倦怠しきつた太陽が沈むまで、埃つぽい熱苦しい晝が長たらしく續く。それだけの事だ！　若し戀の大詰が天國の舞臺に終つて、人間が戀の光輝に浸つたり、瑠璃色の空の白雲のやうに全世界と融け合つたら！　いや、そんな事はない！　短い刹那があるばかりだ。最初の情緒、最初の情慾、次には反覆の習慣、過去の哀傷……

ミハイロフは幾度か女達に言はれた言葉を思ひ出した。

『一緒に仕事をしませうね！　あたし貴方のお仕事を手傳ふわ！』

彼は何時も羞かしくなつた。煉瓦を運んだり、子供を育てたりするなら知らず、生活や感情を助力する事が人間に出來ようか？　心の奥に進行してゐる神祕的な作用ばかりは誰にも示す事が出來ない。戀人の手もこれに觸れる事は出來ない。若しそれが無いなら、完全な聯絡の絲がないのなら、何にも無い事になる。野獸に等しい快感だけだ。それは人間を誘惑するが、生活を充實させる事は出來ない。何故なれば快感には際限がある。慾望の力にも際限がある。

周圍は閉ざされてゐる。一方には無理にも融合しようとする怖れや、未知の世界に誘ふ小强い呼聲に迸つて、靈を沈めて行く沼澤がある。また一方には相手を選ばぬ瞬間の空虛があつて、靈はその中に散らされて行く……

或は自分が過つたのであらうか？　生活を充實させるだけの女を捜し出す事が出來なかつたのであらうか？　自分は選擇もせずに、女から女へ移つて行つたのであらうか？　もう澤山だ！　選擇が何だ！　どんな人間でも祕密はある。莫迦や白痴の生活でも、賢人や美人の生活と同樣に、矢張り謎ではないか。

輕くではあるが、思ひきつて扉を叩いてゐる音が聞えた。ミハイロフは顏を上げて、本能的な不安の中に、胸を戰かしながら叫んだ。

『お入んなさい！』

扉は靜かに開いて、再び閉つた。濃くなつた夕闇の中に、婀娜やかな黑い影が閃いた。そして亡靈のやうに暗闇に止つた。ミハイロフは聲をあげた。

『誰です？』彼は喫驚したやうに問うた。

不圖彼は顰んだ細い眉毛や、脅すやうな、歎くやうな眼光に氣がついた。

『ネルリ！』彼は怖ろしさうに叫んだ。

『私ですさ！』ネルリは無遠慮に答へた。彼女は扉口を離れて、部屋の眞中に出て來た。

二十一

ミハイロフは心の底まで戦かしながら、徐ろに後退りした。

『お前かい？』

ネルリは默つてゐた。

ミハイロフは妙な手付きをした。彼は何と言つていゝか解らないらしい。

ネルリは暫く彼の顏を見詰めてゐた。窪んだ眼の上の二匹の黑い蛭は怪しく動いてゐる。彼女は切れ〳〵な聲で、急に慌々しく言つた。

『私は……あの……なにしに來たんぢやありません……火をお點けなさいましな！　何故暗闇の中に坐つて被居るんです？』

彼女は莫迦丁寧に言つた。併し言葉づかひなどには二人ながら氣がつかなかつた。

ミハイロフは洋燈を點しに掛つた。彼は、自分の胸が或る樂しい不安に戰いてゐるのを識つた。丁度、久し振りで親しい人の思ひ掛けない訪問を受けた時のやうである。彼は何うしていゝか、何と言つていゝか解らなかつた。

彼が忙しさうに洋燈を點してゐる間、ネルリは畫室の眞中に突立つて、別れた前のまゝか

何うかを檢べるやうに、細い眉毛を動かしながら、室内を見廻してゐた。

ミハイロフは漸く火を點した。

洋燈は燃え上りながら、きら〳〵と畫室の内部を照らした。金色の額緣や繪具や掛布は壁の上に光つた。眼付の訝かしい、眉毛の顰んだ細い蒼白い顏は、洋燈の光りを受けて、浮き出て來た。

『何うしたんだい？　脫いだらいゝぢやないか……帽子を脫つて……私は非常に嬉しい！』

ミハイロフは呟いた。彼は何を言つてゐるのだか自分にも解らなかつた。けれども、清らかな明るいものに、自分の心が照らされてゐる事だけは識つた。

彼は『可愛い女』と言はないばかりにして、彼女のしなやかな手を握つた。

ネルリは氣づかれぬやうに腕をはなして、訝かしさうに彼の顏を覗いた。顰んだ眉毛の間には痙攣が走つた。彼女はこれを期待してゐなかつたのだらう。突然彼女は惡意の決心に身を震はした。

併しミハイロフはそれに氣がつかなかつた。彼は女の傍をうろ〳〵して、帽子や外套や手袋を脫がしてやつた。そして嬉しさうに微笑を洩らした。彼の男性的な美貌はそれがために、子供のやうな無心な愛らしい顏となつた。

ネルリは外套と帽子を男に渡して、平生の姿となつた。そして其處に突立つたまゝ、部屋の中を見廻してゐた。

『此處にも暫く來ませんでしたわね！』彼女は物思はしげに言つた。

此等の言葉は激くミハイロフの胸を痛めた。彼は陽氣な歡喜が、自分に不適當である事を識つた。けれども眼ばかりは意志に逆つて、感激したやうに彼女の全身を見詰めてゐた。以前のまゝの彼女だ。ほつそりとした姿をしてゐる。白い細い手をしてゐる。黑い衣裳を着けてゐる。淺黑い襟足を見せてゐる。幾らか亂れたやうな髪をしてゐる。

『何しに來たんだい？』胸騷ぎに顫へぬばかりの聲で、ミハイロフは訊いた。

『たゞ來ましたのさ！』ネルリは冷靜らしく答へた。

ミハイロフは大きな光つた眼で、彼女の顏を見詰めてゐた。彼女はたゞ抱き締めてやりたい程、愛らしい、懷しい、親しい女に思はれる。

ネルリはこれに氣がついたらしい。彼女は男の傍を離れて、部屋の中を歩き出した。

『近頃の繪を見せて頂戴な……すつかりですよ！』彼女は無遠慮に言つた。

此の無遠慮さはミハイロフを單に驚かしたばかりでなく、彼の胸を動かしさへもした。彼は洋燈をとつて、高々と頭の上に持ちあげた。そして幾つかの畫布を照らした。

『可愛い女！』こんな言葉が心の中に響いた。彼はネルリから視線を反らす事が出來なかつた。彼はネルリの髪や、婀娜やかな肉體や、露はな襟足の一つ一つの動きにも、返答を求めるやうな難かしい表情にも歡喜を覺えた。

ネルリは默然と繪を見てゐた。自分を離れて製作が出來たか、自分が與へた時間と自由を有利に費したか――恰もそれを確めに來たやうな顏付である。

『これはいゝのね！』彼女は二度ばかり言つた。彼女の賞讃が何うして斯う嬉しいのか、ミハイロフにはそれが解らなかつた。

ネルリは大きな畫布の前に足を止めて、解し兼ねたやうに眉毛を動かしてゐた。それは洋燈の光りを受けて、愈々陰鬱な、愈々氣味の惡いものに見えた。

『これは何なの？』彼女は無遠慮に訊いた。

ミハイロフは答へなかつた。そして急に何事かを驚いた。

ネルリは暫く默然と見てゐたが、軈て惡夢を逐ふやうに頭を振つた。ミハイロフは此の些細な身振りによつて、ネルリが總てを理解したことを識つた。彼女はミハイロフが描かうとして、畫布に現はすことの出來なかつたものまでを理解したのだ。彼女の顏は悲しげになつた。

『いゝわね！』彼女は斯う短く言つて、暫くは默り込んでゐた。そして言ひ加へた。『だけれど怖いわ！』

ミハイロフは依然として頭上に洋燈を擧げたまゝ、自分の作品を見詰めてゐた。その繪はこれまで氣がつかなかつたもので自分を脅かす。暗い恐怖の力で惑き寄せようとする。彼は暫くの間ネルリの存在も忘れてゐた。

ネルリは足早に其處を退いた。ミハイロフは夢から覺めて、彼女の後に從つた。彼女はミハイロフの寢室になつてゐる掛布の後方へ行つて、怪訝な色を浮べながら、見覺えのある家具——寢臺や書籍の積まれた机を見まもつた。

ミハイロフは彼女に見られるのが悲しかつた。それも自分の爲めではなく、彼女の爲めに悲しかつたのである。嘗て彼女が身を委せた寢臺に、リーザやジェーネチカが今にも現れて來て、羞かしげもなく裸體になりさうだ。ミハイロフは嫌惡と羞恥と絶望の情に捉はれて、ネルリを此處から連れ出さうとした。けれども彼女は自分で出て來た。彼女の顏色は別に變つてゐなかつた。たゞ眉毛の間には痙攣の波が漂うてゐる。それは段々に下つて、引締つた脣の隅に消えて了つた。

ネルリは初めてミハイロフを眞面に見た。彼は宣告を待つてゐるやうな怖ろしい眼付の下で、羞恥と恐怖の情に小さくなつてゐた。

ネルリは唐突に微笑を洩らした。

その微笑は異樣なものだつた。それは、哀傷と思ひ出と愛撫と譴責と別離の微笑である。胸に惡寒を覺えながらも、ミハイロフが理解し兼ねたものの微笑である。

『いゝわ！』ネルリは不得要領に言つた。彼女は自分の胸に答へてゐるらしい。そして不意に男の頭を抱へて、額のあたりに接吻を與へた。

ミハイロフは身震ひした。彼は洋燈を落さないばかりにしながら、片方の腕でネルリの身體を抱へて了つた。

彼女は矢張り謎のやうな眼で、ちらりと男の顏を見て、額や脣や眼を續けざまに接吻した。

彼女の脣は干乾びてゐた。燃えてゐた。彼女の接吻を脣に受けた時、ミハイロフは彼女の濕つた前齒を冷やりと感じた。彼は眩暈を覺えた。

併し彼が正氣にかへるより先きに、ネルリは彼を突きのけて、憎惡を浮べたやうな眼を光らしてゐた。彼女は苦しさうに言つた。

『もうお仕舞ひ！』

彼女は自分の黒い帽子をとつて、亂れた髪に被り出した。

ミハイロフは洋燈を置いた。そして部屋の眞中に佇みながら、自分の足下で床が靜かに搖れてゐるのを識つた。彼はネルリが帽子や外套を著けた理由も解らずに、たゞ幸福な微笑を浮べてゐる。

『もう歸るのかい？』彼は狼狽して訊いた。

ネルリは周圍を見廻した。彼女は長い鋭い帽子の飾針を銜へてゐた。それは彼女の顏に惡意の表情を加へた。

『歸りますわ！』彼女はきつと結んだ脣の中で言つた。

彼女は飾針をとつて、鋭い針先きを帽子と髪に突き刺した。飾針は軋るやうな音を出した。

『それは不可ない……私は嬉しくつて堪らないんだ！　お前は何しに來たんだい？』ミハイロフは譯が解らずに、彼女の方へ近づいて行つた。彼の顏色は急に蒼くなつた。

ネルリは振り返つて腕を垂らした。此の時になつてミハイロフは、漸く彼女の眼の色を識つた。其處に浮んでゐるのは殘忍な復讐の情ばかりである。併し口もとには依然として苦痛の鋭い線が刻まれてゐる。彼もそれには氣がつかなかつた。

『何しにとは何です？』ネルリは不自然に驚いた。『お目に掛りに來たんですわ……私達は古いお友達ぢやありませんか……お友達以上の仲かも知れない！』

『ネルリ！』ミハイロフは、絶望的に叫んだ。彼は黒い冷たい物の中へ靈が沈んで行くやうな氣がした。『何故お前は私に接吻したんだ？』

ネルリは謎のやうに笑つてゐる。

『お別れに來たんですよ……今日は出掛けますから……』

『何處へ行くんだ？』ミハイロフは一人絶望的になつた。

『アルブーゾフの所へ……工場へです！』ネルリは鋭い聲で切れ〴〵に答へた。彼女の瞳に浮んだ復讐の情は愈々殘忍になつて、嚴と一文字に結んだ脣は愈々歪んで來た。

『アルブーゾフだ？』ミハイロフは繰り返した。

『さうですとも……それから新聞を貴方に聞かしたかつたんです……よくお聽きなさい、屹度初耳ですよ。』彼女は語勢を强めて徐ろに言つた。そして十分に快感を味ふためか、そのまゝ言葉を切つて了つた。

彼女の眼は最後の跳躍を試みようとする猛獸のやうに燃えてゐる。

『どんな新聞だい？　何うして初耳なんだい？』ミハイロフは疑はしさうに訊き返した。

ネルリは彼から眼を反らさずに、落著きはらつて判然と言つた。

『それは……貴方のリーザが……今日身投げをした事です！』

ミハイロフは後退りした。彼は霧に包まれたやうな氣がした。たゞミルクのやうな霧を透して、復讐するやうな黒い眼が、何處か遠くの方に光つてゐる。

ネルリは忽ち身を翻して、部屋から出て行つて了つた。

彼女は入口階段の上に足を止めて、何かに耳を傾けてゐたが、軈て兩手で頭を抱へ、階段を駈け降り、宅地を横切つて、遠く燈火の點々と光つてゐる暗い街の方へ走つて行つた。

二十二

アルブーゾフはネルリの部屋に待つてゐた。マリヤ・パーヴロヴナは此の家に住んでゐたのだ。此の家で死んだのである。

病女優が死んでから、撫子の花を胸に挿して、香水をぷん〳〵させた、故人の從弟に當る、快活な、輕薄な青年俳優がやつて來た。故人はネルリの事を彼に遺書して、彼女が此の家に殘る事を乞うたらしい。家の樣子を知らない青年俳優は非常にこれを喜んだ。そしてネルリに附き纏うた。ネルリは驚いた。彼は三日ばかり經つと、此處を發つて了つた。ネルリは

自分の部屋にたつた一人殘された。他の部屋々々はすつかり釘づけになつた。

歸屬物となつた此の家の界隈は、ネルリの部屋を物怖ろしくさせた。毎晩、荒廢した暗い花園に風が囁いて、古い家が濕つぽい闇に沈む時も、彼女の窓にだけは燈火が點つてゐて、通行人の胸に迷信的な不快な感情を喚起させずには置かなかつた。

アルブーゾフは片手を洋机の上に置いて、黒髪の垂れた額の廣い頭を俯向きにしたまゝ、洋机の傍に腰掛けてゐた。時々彼は血走つた黒い眼を上げて、死んだやうな屋内の靜寂に耳を傾けながら、野獸のやうに周圍を見廻してゐた。暫くすると、再び項垂れて、彼は身動きもせずに腰を据ゑた。たゞ膝から垂れた手の指先だけは、ほとんど眼にも見えぬほど動いてゐる。

洋机の上の蠟燭は朦朧と黄色く光つてゐた。黒い椅子や、抽斗や、白い夜具で蔽はれたネルリの小さな寢臺が薄闇の中に見える。總てが小さつぱりとしてゐる。きちんとしてゐる。總てが苦行者の嚴肅さに蔽はれてゐる。熱情の嵐や、失戀や、姙娠や、早產を經驗した若い美しい女が、此處に住んでゐる事を想はせるものは、抽斗の上に置かれた小さな鏡ばかりである……此の苦行者の嚴肅さと、尼寺にでもありさうな小さな寢臺と、堅さうな枕と、とりどりな夜具は、情慾の赤熱や、戀の破產や、胸中の苦惱を語つてゐるのかも知れない。

屋内の扉は釘付けになつて、椅子や洋机で塞がつてゐる。アルブーゾフは卽ち此の椅子に腰掛けてゐるのだ。重苦しい死の沈默は閉された扉の方から訪れて來る。扉の向うにはがら空きの部屋が見える。其處には誰にも用のないピアノや家具が置いてあつて、洋燈と鏡が今だに懸つてゐる。どれもこれも埃だらけで覆ひがしてあつた。其處は闇と空虛ばかりである。褥も枕もない鐵製の寢臺……生命と戀を熱望した不幸な女が、悶え苦しみながら氣息を引きとつた寢臺は、白い裸壁の近くの、がらんとした部屋隅に置き捨てられてあつた。

アルブーゾフは腰掛けたまゝ、耳を澄ましてゐた……異樣な響きが聞える。時には憚かるやうに軋る音がする。誰か爪先きで扉口の方へ歩いて來るやうだ。時には割れるやうな鋭い音がする。窓の外では風が低く囁いたり、忙しく鎧扉を打ちながら、雨が單調に呟いたりする。

アルブーゾフは全く酒氣がなかつた。顏も綺麗に洗はれてゐた。髮も梳られてゐた。帽子と外套は入口の椅子の上に置いてある。彼は眞赤な絹の襯衣を着てゐた。洋机の上の蠟燭や、項垂れた頭や、力なく下げた腕や、赤い襯衣は、翌朝の審問と刑の執行を氣遣うてゐるイワン雷帝時代の豪膽な盜賊を想ひ起させる。

時々彼は頭を振つて、自分を嘲るやうに苦笑ひした。彼は一つの事を聯絡して考へることが出來なかつた。遠火で炙られるやうな氣がしても、物を考へる事を怖れてゐた。

急に門の軋る音がした。入口階段に忙しい足音が聞える。アルブーゾフは忽ち顏を上げた。彼の眼は光つて來た。此の時アルブーゾフを見た人があつても、連夜の泥酔と亂行に荒んだ眼の不吉な怖ろしい表情ばかりは解らなかつたらう。

扉は開いて、ネルリが入つて來た。

『やつと歸つて來たね！』アルブーゾフは不氣味に笑ひながら言つた。

ネルリは默つて外套と帽子を脫いだ。そして部屋の眞中に立ち止つた。彼女はアルブーゾフに氣を止めてゐないのか、さもなければ彼の聲が聞えないのだらう。

『あゝ、片付いた！』彼女は獨白のやうに言つた。

それは自分の心に答へた言葉か、アルブーゾフを慰めた言葉か解らない。彼女の聲は同時に『もうお仕舞ひです。最後の絲も切れました。すつかり片が付いたんです！』とか、或は『片づきました。あんなに心配なさる事はなかつたんですよ！』とか言ひたさうである。

アルブーゾフは疑はしさうに彼女の顏を見てゐた。

『片が付いたのかい？』彼は脣を歪めながら訊いた。

ネルリは眉毛を顰めた。併し何とも答へなかつた。

『まア、いゝさ……ネルリ！　聽いてお呉れ！』アルブーゾフは言つた。『私は言ひたい事も口にしなかつた。何にも妨げはしなかつた……だが此處にたつて一人で坐つてゐる間、私は色々と考へて見た……聽いてお呉れ……どうも私には信じられない！』

ネルリは細い眉毛を動かしながら、默然と彼の顏を見た。

『私には信じられない！』アルブーゾフは繰り返して言つた。

『信じなければいゝぢやありませんか！』彼女は鋭い聲で答へた。

アルブーゾフは忽ち顏を上げた。血走つた眼のなかには、物狂ほしく光つてゐるものがある。

『お前は何うでもいゝのかい？　さうか……そんなら私の言ふ通りなんだね！』彼は力業をしたやうに重苦しく言つた。

ネルリは肩を縮めた。

『さうかも知れませんわ！』

『ネルリ！　冗談はよして呉れ！』アルブーゾフは物狂ほしく叫んだ。けれども直ぐに自分の胸を制へた。『お前だつて解つてゐる筈だ……お前が出て行く時、私は何とも言はなかつた……言ふのが羞しかつたからだ……だが今となつたら言ふよ。お前が何と言ふにしても、今まであの男を愛してゐた事だけは事實だ！』

『そんな事はありません！』ネルリは答へた。

『愛してゐるさ！　今まで通り愛してゐる。より以上に愛してゐるのかも知れない！』

『そんな事はありません！』ネルリは執拗く繰り返した。

アルブーゾフは嗄れ聲で笑ひ出した。

『自分の胸に訊いて見るがいゝ……自分で自分を說得しようとしてゐるんだ……それはむちやだよ！　悲劇を報告に行つたんぢやあるまい？　復讐の爲めぢやあるまい？　措くがいゝ！　お前は愛してゐるんだ！　こんな事を聞いた事があるよ。初めて身を委せた戀人は一生忘れられないつてね！　どんなに憎んでも、どんなに呪うても、假令殺さうとしてゐても、男に指先でちよつと招かれると、女は直ぐに跪くつてね……今といふ今、私は實例を見たよ！』

アルブーゾフは自分の胸を苦しめながら、嘲るやうに言つた。

ネルリは口を噤んでゐた。

『何うだつたい、悲壯な別離だつたらうね？』アルブーゾフは病的な微笑を浮べながら問うた。

ネルリは忽ち顔を上げた。

『そりや悲壯でしたわ！』彼女は復讐するやうに答へた。

アルブーゾフは眞蒼になつた。

『ネルリ！　私を嘲つてゐる事は分つてゐるよ。』干乾びた脣を痙攣的に舐りながら、彼は蔑むやうに笑はうとした。『お前は態とらしく言つてゐる積りだらうが、實際それは悲壯だつたんだ……分つてゐるさ！』

『分つてゐますか？』ネルリは瞬きながら訊いた。そして笑ひ出した。『そんならなほ都合がいゝ！』

アルブーゾフは氣息が詰つて來た。

『お別れに身を委せて來やしないかい？　最後の抱擁をね……』彼は自分の嘲弄に堪へる事が出來なかつた。

『無論ですわ！』ネルリは挑戰するやうに答へた。

アルブーゾフの顔には霧が掛つたやうだつた。ネルリは、彼が直ぐにも跳び掛つて來る事と思つた。また實際彼は跳び掛らないばかりの勢だつた。彼の頭腦は混亂した――アルブーゾフは彼女が故意に毒舌を吐いてゐる事も、自分の猜疑や嘲弄は徒らに彼女を激昂させるばかりで、自分すら此等の言葉には堪へ兼ねてゐる事も知つてゐた。併し實際ミハイロフに身を委せた事のある彼女の口から、假令買言葉にせよ、斯ういふ言葉を聞かされては、彼も愈々氣が狂つて來るのである。

『ネルリ！　私を苦しめないでお呉れ！』彼は唸るやうに言つた。『私は信じない……故意に言つてゐることは分つてゐる……　けれども私は聽いてゐられないんだ、聽いてゐられないんだ！』

ネルリは笑ひ出した。彼女は帽子を抽斗の上に投げ捨てゝ、男の方へ近づいて行つた。

『もうお止しなさい！』彼女はアルブーゾフの頭を抱へて、亂れた髪を優しく撫でながら、自分の胸に抱き締めてしまつた。『私が愛してゐるのは貴方です！　私の可愛い、可哀さうな……』

狂氣のやうな幸福は、アルブーゾフの喉を締めつけた。彼はネルリの小さな胸に寄り添うたまゝ動かなかつた。心臟の輕い鼓動が聞える。ネルリは彼の髪を撫でてゐた。

『私は苦しんだ……』彼は哀れつぽく呟いた。『何しに行つたんだい？』

彼の私語は再び嫉妬の音色を帶びて來た。ネルリは腕を上げて後退りした。アルブーゾフも頭を擡げながら、彼女の顔を疑はしさうに見た。

『まだ思ひ切れないんだらう……』
ネルリは不意に彼を突きのけた。そして腕を振つた。
『あゝ厭だ、辛い、つまらない！　私はつく〴〵厭ですよ！』彼女は惱ましさうに唸つた。
『ネルリ！　ネルリチカ！』アルブーゾフは吃驚して、後悔したやうに身體を延ばした。
けれどもネルリはもう後退りして、抽斗のところに立つてゐる。彼女の眉毛は嚴と動いてゐた。彼女の眼は暗かつた。
『ザーハル・マキシムヴィッチ！　お聽きなさい！』彼女は切れ〴〵な聲で言ひ出した。『何時まで私を苦しめる積りなんです？』
『私が？　お前を？　ネルリ！』アルブーゾフは譴責するやうに叫んだ。
『えゝ、貴方が、私を！』ネルリは彼の口調を眞似て言つた。『何を貴方は私から望むんです？　さうです、私は貴方を愛してゐました。そしてその戀は醒めました。戀が醒めて貴方を捨てたんでせう……今ではまた貴方を愛してゐます……それが何です？　ザーハル・マキシムヴィッチ！　人間は誰でも心の祕密を有つてゐますよ。それは自分にも氣がつきません。自分にも解りません！　私はあの人に會はなければならなかつたんです！　それは愛してゐない事を得心する爲めです！　貴方は私を何うお思ひになるんです？　どうせ淫婦でせうさ、

阿婆擦でせうさ……私は自分で自分が解りません……併しそれでいゝんです！　違ふ女になれつて、私に要求する權利がありますか？　貴方を欺くやうな事はしません。生れ變つたやうな樣子はしません！　何故私を苦しめるんです？』
『ネルリ！』
『何がネルリです！　片が付いたんだと言つたら、私を信用なさい！　それを證據立てる事が出來ますか？　信じられさうなもんぢやありませんか、私は貴方の所へ行きませんでした。寬恕を乞ひませんでした。私は申譯のない事をしました。そしてそれには十分に責められてゐます。けれども私には貴方の所へ謝りに行くまいとする誇りがあるんです。何故ならば、決して赦されるものでないことを知つてゐました。私だつて、跪づく位の事は出來たでせうさ！　併しそれが何になるんです？　貴方は何時になつても忘れやしません、忘れる事が出來ません！　憶えてゐるでせう？　何時かも被來つて、總てを赦す忘れるつて仰有いましたね！　そして暫くすると、此處で……此の床の上で……私の喉を締めましたね……憶えてゐるでせう？』
アルブーゾフは項垂れた。
『私はもうお仕舞ひだと思ひました……　死んでしまはうと思ひました……しかし貴方はま

た被來いました！　ザーハル・マキシムヴィッチ！　白狀なさい！　私の流産を知つたからこそ被來つたんでせう……さうでせう？　さもなければ被來りやしませんね！』

アルブーゾフは口を噤んでゐた。

ネルリは待つてゐた。

『それ御覽なさい！』ネルリは强ひて笑つた。『これほど判然した記憶に……堪へる事の出來ないのは、御自分でもよくお解りでせう……何が寬恕です？　何が愛です？』

『私は來たかも知れないよ！』

ネルリは素早く彼の顏を見た。

『來たかも知れない……さうかも知れませんわ……　それは私にも解つてゐます……併しそれは席を蹴立てゝ歸るための訪問ですね！』

『ネルリ！　私はお前を愛してゐる！』アルブーゾフは絕望的に遮つた。

ネルリは碎けないばかりに自分の指を握り締めた。

『分つてゐます、分つてゐますよ……矢張り私達は永遠に別れて了つた方がいゝんです！』

『ネルリ！』

『その方がいゝんです、その方がいゝんです。忘れるもんですか！　忘れられるもんですか！　私達は何時までも苦しめ合ふんです！』

『ネルリ！　私は忘れるよ！』アルブーゾフは憚るやうに呟いた。

『そんな事があるもんですか！　子供が……貴方は此の思ひ出に堪へられません……餘り痛手が深いものだから、私と和解したいんでせう！　いゝえ、貴方はつまらない事まで思ひ出します。私は接吻しませんでした、優しくして上げませんでした。私のする事、言ふ事に、貴方は……あの人にもこんな言葉を掛けたのだらうとか、こんな風に接吻したのだらうとか思ふに違ひないからです……眞實でせう？　さうでせう？　無論さうですさ！　昨夜私は急に貴方が戀しくなりました……寢臺の上に横はつてゐて、若し貴方が此處にゐて下すつたらと思ひました……』

ネルリは急に顏を赧らめた。彼女の顏は一入あどけなく、一入美しくなつた。アルブーゾフは忽ち起き上つて、嬉しさうな身振りをした。

『まア、お待ちなさい……まだ話す事があるんです！』ネルリは早口に言つた。『その晩私はこんな事を考へました。萬事は終つたんだ。みんな夢だ。何にもない。自分はあの人一人を愛してゐる。靈も肉もあの人の物になつた。あの人を勞はらう。あの人の胸に顏を埋めよう……』

ネルリの聲は樂器のやうに優しく響いた。彼女は、自分の小さな柔かい胸に腕を壓し當てさへした。アルブーゾフは感激したやうな眼を彼女からはなさずに聽いてゐた。彼はネルリを驚かすまいと思つて、身動きもしなかつた。

『私は急に胸を打たれるやうな氣がしました。胸を燃やせば燃やすほど、自分のして來た事が判然と浮んで來るんです……怖ろしくなるんです……道理でせう？』

『道理だ！』アルブーゾフは低い聲で言つて、そして立ち上つた。

ネルリの眼には絶望が閃いた。

『ネルリ！　お前の言ふ事は眞實かも知れない！』アルブーゾフは途方に暮れたやうに笑ひながら言つた。『お前は餘り露骨だよ！』彼は急に憎惡を含んだ聲で言ひ加へた。『こんな風に抱擁したのだらう、こんな風に愛撫したのだらうつて……それは餘り露骨だよ！　そんなら私達は何うなるんだい？　綺麗に別れて了つて、もう永遠に會はないのかい？』

『さうです！』ネルリは力なく答へた。

アルブーゾフは暫く口を噤んでゐた。

『で、若し私に……それが出來なかつたら？』彼は微かな聲で訊いた。

『出來ますよ！　たゞそんな氣がするんです！』ネルリは遮つた。

アルブーゾフは再び默り込んで了つた。額の白い彼の澁面には、絶望的な片意地の色が現はれた。陰影が複雜な考へのやうに走つた。それは風に追はれた黑雲が額の蔭に集つたやうである。

『その事はもう言つたでせう。』ネルリは愈々力の拔けた聲で言ひ加へた。『まだ、私が貴方の物でないから、そんな氣がするんですよ……』

『ネルリ！』アルブーゾフは斧の峰で嚇された牡牛のやうに頭を振つた。

『私が身を委せさへすれば、貴方には直ぐとその可能が解るんですさ！』ネルリは言葉を續けた。『何と仰有つても、何うお思ひになるにしても、貴方の求めてゐるのは要するにあれだけなんです！』彼女は痛みと憎惡を含んだ聲で、ヒステリカルに言つた。

アルブーゾフも直ぐには答へなかつた。先刻の陰影は彼の面を走つてゐる。

『ネルリ！　聽いてお呉れ！』彼は徐ろに言つた。『お前の言ふのが眞實かも知れない……私には忘れられまい、忘れる事は出來ないだらう！　考へもしようさ！　思ひ出しもしようさ！　そりや分りきつてゐる！　私は自分の心を殘らずお前に差し出した。併し安くそれを見積つてゐるんぢやないよ。ネルリ！　私は傲慢だ！　商人の息子は此處いらさ！　他には何にも才能がない……あの男が私のやうにお前を愛してゐたのなら、あの男にしても、お前

を捨てたのが矢張り過失で苦しんでゐるのなら、そりや私だつて忘れようさ！　さうなれば私達は平等だ！　私は自分の心を殘りなくお前に差し出す、自分の全生活でお前といふものを買ふ、あの男も矢張り……併しさうぢやないんだ！　私は堪へる事が出來ない。私はお前の足もとに自分を殘りなく投げ出したんだ！　私から見ればお前は一つの聖物なのに、あの男はお前を一時の慰み物にして、不用な雜巾か何かのやうに捨てゝ了つたんぢやないか！　どんなに私より役がいゝだらう！　私達三人が偶然に出會つたら、あの男は笑ひこそすまいが……笑ふかも知れない……心の中では「莫迦な奴だ！　俺が慰み物にして捨てた女に全生涯を捧げてゐる！」と思ふだらうよ！　私は此の考へに堪へられない！　そんな時になつたら、私はあの男を殺す、お前を殺す、そして自殺して了ふ……』

アルブーゾフは頭を抱へて、堪へ難い痛みに身體を搖ぶつた。ネルリは俯向きながら聽いてゐた。

アルブーゾフは不意に帽子を掴んで、扉口の方へ行つた。そして立ち止つた。

『ネルリ！　これだけは憶えてゐるがいゝよ！』彼は再び嚇すやうな口調になつた。「私はお前を愛してゐた。今も愛してゐる。何時までも愛してゐる。私は忘れる事が出來ない。併しお前はあの男を愛してゐるんだ、愛してゐるんだ！　分つてゐるさ！　そればかりはお前も私を欺けないさ！　私の言つてゐる事は譯が解らないだらう！　もうあの男の事は忘れたのだと思つても、私の手は横に動く……信じられるもんか！』彼は叫んだ。『何しに行つたんだい？　お別れにかい？　ほんたうの事を言つてお呉れ！　私も子供ぢやない！　別れに行つたんぢやあるまい！　最後に會ひに行つたんだらう！　絶望か何うかを確かめに行つたんだらう！　あの男は思ひ直したかい？　燒木杭にならうとは言はなかつたかい？　よすがいゝ！　嘘はよすがいゝ！　自分でもよく解つてゐるだらう！　他の事を考へてゐたかも知れないが、心の中ではさう思つてゐたんだ！　それでいゝさ！　一度だけほんたうの事を言つて見ろ！　お前はあの男に別離の接吻をしたらう？』

アルブーゾフの聲は杜絶えて、そのまゝ消えた。彼は返事を待つてゐた。

ネルリは哀願するやうな眼を上げて、脣を動かした。そして蒼白い細い腕を胸にあてた。彼女は跪かうとして、跪き得ない者のやうに、泣きくづれた。アルブーゾフは悲しげに頭を振つた。

『そんなら……左樣なら！　もう來まい！　少くともあの男が……あの男が生きてゐる間は來ないよ！　左樣なら！』

彼は力まかせに扉を蹴とばして、暗闇の中に飛んで行つた。扉は壁にあたつた。そして家

中に響くばかりの音を立てゝ閉つた。

ネルリは彼が再び戻つて來る事を願ふやうに、閉された扉をぢつと見詰めて、暫くは身動きもせずに立つてゐた。軈て彼女の頸は垂れて來た。涙は悲しみに歪んだ蒼白い顏に流れた。胸に壓し當てた腕も何時の間にか垂れ下つて了つた。

二十三

街は震駭した。騎兵少射クラウゼを葬つたその翌日、會計官ルイスコフは縊死を遂げた。彼は會計長の譴責に反抗した爲め役所を罷めさせられたのである。更にその翌日には、實業家ツレグロフの娘リーザが溺死した噂と、貧しい青物商人が郊外で鐵砲自殺を遂げた報知とが傳はつた。

一發の銃聲が眠れる街の靜寂を突然に破つた事は、今までにも例が無いではなかつた。駈けつけて來た人達は、取るにも足らぬ人間の生活が終つた事を識つた。併し自殺者に就いては考へようともしなかつた。疑ふ者もなければ、信じる者とても無ささうな噂が、場末の町の隅々に擴がつて行つた。彼等は八方から自殺者の屍の方へやつて來て、物好きさうに死人の顏を覗いた。石のやうな假面の下には祕密らしいものが隱れてゐる。彼等は此の人間の最後を豫感した者のないのを不思議に思つた。そして直ぐに忘れて了つた。生活は以前のまゝに淺い河床を流れて行つた。たゞ墓石が墓地に一つ殖えて、誰にとつても用のない、誰にとつても興味のない他の人間が、その空席を占領するばかりの事である。

併し街に燃え上つて、有らゆる階級を襲うた自殺の傳染は、全市の生活を動搖せしめた。風説や流言には果しがなかつた。全市が沸騰した。そして街を支配してゐる暗い動搖の中にも、此度ばかりは單純な好奇心以外のものがあつた。

郊外の青物商人の自殺が話題に上る事は極めて稀だつた。それとても、大抵は市場の中に限られてゐた。人の話によると、彼はひどい酒飲みで、泥醉した彼の顏には死の影が漂うてゐたさうだ。前の晩彼が酒屋で何か大聲で怒鳴つたり、拳で我と我が胸を毆つたり、誰かを呪つたりしてゐたのは事實である。併し、一人として此の泥醉した狂人に注意を向ける者はなかつた。何故なれば泥醉(どんよい)れた勞働者の間にはあり勝ちな事なのだから。

ルイスコフの自殺は有らゆる人々を呆然とさせて了つた。意外に頑强な彼の反抗は、その事が既に變災を語つてゐたので、會計長達も深くは彼を責めなかつた。併しこれほどの勇氣と、これほど悲劇的な最後を、會計書記に期待してゐた者は一人もなかつた。元來自殺は人間に一種の重みを加へるものである。誰しも、自殺者は運命の指によつて定められた特殊の

人間であるが如くに思つてゐた。然るに顏も髮も藥のやうに艶氣のない平凡な下級官吏が、此の役割を勤めるに至つたのだ。これは一つの冒瀆である。街中の人々は前後の事情から考へて、ルイスコフの死と騎兵少尉クラウゼの自殺に聯絡をつけた。彼等は自殺の傳染に就いて論じた。莊嚴な葬儀や公衆の同情は、他の感傷的な人間に同じ道程を躊ましめるものであると論じた。一種の流行病であると喋り立てる者もあつた。更に十八人の者が遠からず自殺するといふ、極めて莫迦らしい風聞も傳はつた。彼等は氣遣はしげに技師ナウーモフの名を口にしてゐた。

誰一人として確かな口を利く者はなかつた。騎兵少尉クラウゼやルイスコフは、ナウーモフに共鳴したとしても、彼の思想が郊外の八百屋やリーザ・ツレグロワに影響を及ぼす理由はない。併し彼に關する噂は絶え間がなかつた。彼等は警察の事さへ思ひ浮べた。

署長も捨て措かれなくなつて、實際ナウーモフの處へ駈けつけて行つた。併し技師は依然として工場にゐた。そして程なく彼が何處かへ姿を隱したといふ風聞も擴がつた。正體なく泥酔したアルブーゾフが、町役所でたつた一人署長に面會した。彼はぢつと署長の言葉を聽いて、力なく言つた。

『莫迦な！　勝手にしやがれ！』

街は愈々動搖を增した。そして或る不安な期待に充たされてゐた。大多數の人は口でこそその莫迦げた豫言を嘲笑してゐるものの、胸の內部は矢張り騷ぎ立つたのである。

取分けて動搖したのは若い連中だつた。中學校や女學校の上級生は一團になつて、頻りに自殺論を戰はしてゐた。意外なのは、彼等の間に數名のナウーモフ主義者が現れたことである。何うしてナウーモフの思想が彼等の間に傳はつたのか——全く解らなかつた。

娘達は花を携へて、騎兵少尉クラウゼとリーザ・ツレグロワの墓參りに行つた。併し哀れなるルイスコフの夢は實現されなかつた。葬式の時も會葬者は母親一人きりだつた。そのうへ葬儀は墓地の外れの下水の近くに行はれて、花輪や喇叭の響きが無かつたばかりか、僧侶さへ姿を見せなかつたのである。大學生のチーシュは墓參に立ち寄つた。併し二分間ばかり呆然と突立つてゐると、肩を縮めて、可笑しくも悲しくもなささうに行つて了つた。

中學校の校長も捨て措かれなくなつて、朝の祈禱の前に、教員や僧侶の前で、全校の生徒に訓戒を與へた。彼は自殺は小心から起つた罪深い行爲であると言つて、國家や皇帝や神に對する此の罪惡を戒めた。生徒は熱心に聽いてゐた。併し此の訓戒に動かされる者はなかつた。たゞ生徒の保證人達は此の訓戒があつてから、双物や短銃を隱すやうになつた。

彼等の狼狽には訝かしい處があつた。彼等は、生の執着が無意義である事を心の底では知

りながらも、數世紀を費した壯大な建築物が崩潰して、人類が續々屍となつて行くのを怖れてゐるやうである。

リーザ・ツレグロワの噂は街に絶えなかつた。彼等は好奇心に氣息々詰らしながら彼女の事を話し合つてゐた。それとは氣づかずも、彼女の屍を鞭うつてゐた。心から彼女を憐れんだ者も、實際無いではなかつた。併し事件が彼等の胸に與へた刺戟は、憐憫や憤激以上のものであつた。

有らゆる人が血を沸かした。胸を騒がした。近所隣りを駈け廻つて、驚かしたり、驚かされたりした。不安は募つた。街は恰も奇病に襲はれたやうである。一人として其の本性を知る者がない。豫防法を知る者がない。

二十四

ネルリが最後にミハイロフを訪問した日の黄昏、老醫師アルノリヂイは自分の家で寂しく茶を飲んでゐた。

洋燈(ランプ)はサマワールの光つた横腹と、ドクトルの太い腕ばかりを照してゐた。部屋は薄闇の中に沈んでゐた。窓には鎧扉も窓掛も見えない。暗青色の冷たい黄昏は、陰鬱に窓を見詰めて、獨身者の部屋に、一層不愉快な、一層取亂した色を加へてゐる。

ドクトルは櫻の濃いジェリイを、小さな匙で無意識に掻きまぜてゐた。彼はジェリイが紅玉(ルビイ)の滴(したり)のやうに動くのを見ながら、何かひとり考へてゐた。

彼は茶を飲んだり、眼に止つた物を見詰めたり、無意識に悲しい考へを喚び起したりして一晩中寂しく此處に坐つてゐた。思ひは草原の黒雲のやうに、そろり〳〵と這つて來た。彼は自分でも一々それに氣がつかなかつた。

マリヤ・パーヴロヴナの死後、彼は急に老耄(おいぼ)れて了つた。髪は眞白になつた。脣は弛(たる)んだ。手は眼にも見えるほど顫へて來た。服裝も何處となくだらしがない。

老年になつて、彼の胸に暫く燃えた明るい火も、もう永遠に消え失せて了つた。彼は路傍で風のために搖れてゐる枯木のやうに、鬱々として目的のない餘生を送つてゐるのだ。

『先生！　戀しい先生！　先生は私をお忘れにならないでせうね？』と遠くから尋ねるやうな眼をした、長い病の間明るく澄んでゐた透明な顔が、時々彼の眼前に搖めいて、悲しい微笑を洩らすやうな事があつても、彼はたゞ身震ひして、一刻も早く死の昏迷へ去りたげに、眼を瞬くのであつた。

彼の胸には希望も異議も絶望もなかつた。『彼女が死ななかつたら』といふ幻想すら、彼の

頭腦には浮んで來なかつた。彼は既に自分の陰鬱な孤獨生活に慣れてしまつて、蛭が血を吸ふやうに自分の胸を締めつける苦痛の快感さへ覺えてゐるのだらう。頭腦が惱ましくなると、彼は物を考へる事も出來ない。悲しい思ひ出になると、記憶の絲を辿る事も出來ない。併し彼は苛立ちもしなかつた。

『人間にそんな自由は與へられてゐない！』惱ましさうにこんな事を考へると、彼の心は直ぐに柔らいで了ふ。

『何うでもよい！』

總ては斯ういふ言葉の中で、魂を霧が包むやうに漠然と消えて了つた。

燃え上つた災禍は、彼を驚かせもしなかつたし、戰かせもしなかつた。事變に對する彼の態度は、恰もそれを期待してゐた如くである。たゞ他人が餘り多く考へぬ青物商人の自殺は、彼の胸に生々とした考へを喚び起した。それとても自殺そのものではなくて、當日彼が耳にした一つの言葉なのである。

『泥酔漢ださうだ！』彼は激しい憤怒を覺えた。『泥酔漢？　人生がそれほど結構なものなら、彼は何うして泥酔漢になつたのだ……人類自身すら、眞實の生活は現世になくて、何處だか知らぬが、來世といふ處にあると考へたではないか！　彼には自分の坐すべき席を見出せなかつたのではあるまいか？　何故だ？　それを望まなかつたのであらうか？　それは訝しい！　自分の位置を人生に見出すまいとする人があらうか？　彼は見出せなかつたのだ！　さうだ……見出せなかつたに違ひない！　貴方がたには泥酔漢の青物商人にどんな煩悶があつたか解るまい？　貴方がたは、自分達は滿足であるのに、彼一人はそれを不滿に思つたのだと言つて了ふ！　彼は偉大なる賢人になる事を、トルストイやナポレオン以上に願つたかも知れない。併し彼の運命は天分のない哀れな小さな人間だつたのだ。勿論才能や天分は誰にでも與へられるものでない。その代りには、自分の哀れな境遇に滿足して、社會の幸福な人々を遠くから拜むために、其處で身を藻掻いてゐる義務もあるまい。自分が哀れな境遇に居るのに、彼等が幸福であるのを喜ぶ……餘りに多くの犧牲を人間に拂はせるといふものだ。泥酔漢……なるほど！』

ドクトルは腹立たしげに匙を上げて、ジェリイがとろ〳〵皿に滴れるのを、長いあひだ見まもつてゐた。

『さうだ！』ジェリイが一滴滴れた時、彼は聲高に斯う言つた。そして匙を置いた。

『此の不必要な、誰にとつても興味のない、自分達すら現在の生活に對しては、指導者や造物主に反抗するが如くに蔑視してゐる人生を、大なる幸福か、貴重品か、我々が死ぬまで警

護すべき聖物の如く思はせようとしてゐる！』

『さうだ！』彼はもう一度聲高に繰り返して、サマワールの蔭にある壜の方へ、輕く痙攣した太い腕を差し延べた。

此の時扉を遠しく叩いた者がある。ドクトル・アルノリヂイは手を下して振り返つた。

『誰です？　お入んなさい！』彼は徐ろに言つた。

扉は開いた。そして閾の上にミハイロフの姿が現れた。

『あゝ……』ドクトルは低い聲で言つて、何故か重々しく立ち上り出した。

ミハイロフは入つて來た。そして外套や帽子をつけたまゝ、平生通り挨拶もせずに腰を下ろした。ドクトル・アルノリヂイは賢しい眼で、ぢつと彼の顏を見詰めた。そしてゆつたりと自分の席に腰を落した。

ミハイロフは身體を屈めて、身動きもせずに、眼前の床を見詰めながら、かなり長いあひだ默然と坐つてゐた。ドクトル・アルノリヂイはぢつと彼を見詰めてゐた。

ミハイロフは急に身動きして、美しい顏を上げた。彼の眼はドクトルの視線と出會つた。彼は片方の眼を顰めながら微笑を洩らした。此の微笑には破滅的な所があつた。自分の運命を自覺してゐる病人は、同情を乞ふともなく、絶望を言譯するともなしに、よくこんな微

笑を浮べるものである。

『何を言はうとしたんです？』肥大なドクトルは嗄れ聲で言つた。『お茶ですか？』

ミハイロフは何か言はうとしてゐたのであるが、此の平凡な思ひ掛けない質問は、彼を全く混亂させて了つた。彼は手を振つただけだつた。

『さうですか！』ドクトル・アルノリヂイは無愛想に言つた。『何か用事ですか？』

ミハイロフは惱ましさうに身體を搖ぶつた。そして漸く身體を支へると、彼は視線を落して了つた。彼は幾度か物を言はうとしたが、たゞ徒らに口を開けたり閉ぢたりするばかりだつた。彼の頭腦に浮んだのは、恐らくそれ等の言葉ではないらしい。

ドクトルは彼が氣の毒になつた。彼は立ち上つて、元氣をつけるやうに、ミハイロフの肩を叩いてやらうとした。けれどもミハイロフは厭はしさうに側を向いて了つた。ドクトル、アルノリヂイは腕を引いて、脣を嚙みしめながら腰を下ろした。

ミハイロフは身動きもせずに、床を見詰めてゐた。ドクトルは氣遣はしげに、少しづつ身體を動かした。遂に彼は呟いた。

『實際何うしたんです！　さうまで氣を落さないでもいゝぢやありませんか！』

ミハイロフは口を噤んでゐた。

『勿論それは怖ろしい事だ！　併しやつて了つた事は仕方がない……私に言はせれば、さう貴方ばかりが悪い譯ぢやありませんもの。』

『貴方はさう思ひますか？』ミハイロフは低い聲で訊いた。

ドクトルは眼を反向けて、何とも答へなかつた。

ミハイロフは急に顏を上げて、物好きさうな、嘲弄するやうな、敵意を有つやうな――一種異樣な眼で彼の顏を見詰めた。そして唐突に笑ひ轉げた。

『ドクトル！　私が自分を惡人か殺人者のやうに思つて、貴方のところへ懺悔をして、我と我が胸を自分の拳で打ちに來たんだと、貴方は眞面目にさう考へてゐるんですか？　安心なさい！　決してそんな事ではない！』

ミハイロフの脣は妙に躍つた。ドクトルは彼の顏を探るやうに見た。

『私は何にも懺悔しない！　自分を惡人とも思はない！　貴方の……貴方にもさう思つて貰ひたくない！』

ミハイロフは急に立ち上つて、帽子を脫ぐと、それを處かまはずに投げ捨てた。彼は全身を震はした。彼の顏は白墨のやうに白かつた。そして脣には泡が流れて來た。彼は氣息を喘ませた。ドクトルは立ち上つて、暫くは呆然と呆れ返つてゐた。併し彼は直ぐに萬事を察した。そして眞面目になつた。

『落著いて！　落著いて！』彼は醫者らしい口調で言つた。

ミハイロフは顏を引緊めて、眼を斜めにしながら、彼の顏を見てゐた。彼は此の時何となく間が惡かつた。

『まア、腰を掛けて……落著きなさい！』靜かな聲ではあるが、ドクトルは命令するやうに繰り返した。そしてミハイロフの肩を掴んで、無理に掛けさせて了つた。

ミハイロフは直ぐに溫順しくなつた。彼は怖ろしさうに老醫師の顏を見上げた。

『ドクトル！』譴責せぬ事を願ふやうに、彼は低い聲で呟いた。『私も苦しみましたよ！』

『さうですか……何でもないです！　直ぐ忘れますよ！』ドクトルは見もしなければ、聽かうともせずに言つた。『それより茶でも入れませう……貴方は先づ落著いて、氣をしつかり持たなければ不可ない！　そんな風では不可ませんよ！』

彼は丁寧にコップを洗つて、老賄人のやうに肩の處に掛けた布巾でそれを拭いた。そして茶を注いで、ジェリイの皿と一緒にミハイロフの方へやると、再び平生の席に腰を下した。

ミハイロフは光つた眼で、彼の動作を追うてゐた。彼はコップを手にしたが、直ぐまた以前の處に置いて了つた。

『ドクトル！　貴方は彼女を見たんですか？』彼は低い聲でやうやく斯う訊いた。彼の顏は歪んだ。

ドクトルは默つてゐた。彼は布巾を肩から取つて、丁寧にそれを疊み出した。ミハイロフも口を噤んで、催眠術でも掛けられたやうに、彼の顏を見詰めてゐた。

彼は時々眼のやり場に困つた。彼は頭腦に湧いて來る考へを集中する事が出來ないのだ。何を言つていゝか、それさへ考へがつかないらしい。

『ドクトル！　序ですが……』彼は可笑しいほど事務的な口調で尋ねた。『彼女は……直ぐ沈みましたか？』

ドクトルは喫驚したやうに彼の顏を見た。併しミハイロフはもう、自分の愚かな質問を忘れて、何事かを思ひ出さうとするやうに、額の汗を拭うてゐた。恐らく彼は何にも訊く積りではなかつたのだらう。

ドクトルは、愚かな質問の後で或る狂人が矢張りこんな手眞似をした事を思ひ出した。彼は頭を振つた。

『ドクトル！　彼女の死は寧ろ喜ぶべき事ですよ！』ミハイロフは再び口を開いた。『とうから私はそれを考へてゐた……即ち、斯うではない……まるで頭腦が狂つてゐるやうだ！

何うも思ふやうに言へない！』

『茶をお飲みなさいな。』肥大なドクトルは、落著きはらつて言つた。そしてまたコップを彼の方へやつた。

ミハイロフは素直に兩手で受けた。併し氣にも止めないのか、ふたゝびそれを洋机のうへに置いた。

『ドクトル！　本當に氣が狂つてゐると思ひますか？』ミハイロフは急に落著のある聲で訊いた。『いや、私は眞面目に言つてゐる！　リーザの死は實際最良の手段だつたのです！』

ドクトルは默然と彼の顏を見詰めてゐた。

『何だつて私の顏をさう見るんです？』ミハイロフは少しむつとして再び昂奮して了つた。『私はほんたうの事を言つてゐる……ちつとも彼女を可哀さうとは思はない！』彼は憎々しく言ひはなつた。『事實私は……それは何うでもいゝ！　問題が違ふ。何にも怖ろしいことはない！　まア、彼女が更に四十年も生き存らへて、惡魔になり聖靈になり嫁づいたとしたら、百姓共を治療するために醫學を勉强したり、子供を產んだりしたとしたら……其處に何の意義がある！　何の興味がある！　ドクトル！　それは莫迦げてゐるだけです！　若し怖るべき事があるのなら、それは何にも怖るべき事がないといふその事です！　憐れむべき事

のないといふのも怖るべき事だ！　倦怠と凡庸の他には何にもあるまい！　またあり得る筈がない！　彼女は死んだ……若し人類が悉く不死であつて、彼女一人が死んだのなら、それは恐怖も憐憫も起りませうさ……　併し我々はみんな死ぬんです！　彼女の死が先きになつて、我々の死が後になつたといふだけの事だ！　彼女は我々より千倍も幸福ですよ！』ドクトルが口論の相手ででもあるやうに、ミハイロフは聲を荒らげて叫んだ。

ドクトル・アルノリヂイは脣を嚙み締めながら、默然と聽いてゐた。大きな皺だらけな顏を見ただけでは、彼がこれをどう思つてゐるのだか解らない。

ミハイロフは立ち上つて、部屋の中を歩き出した。

『少くとも彼女は昂奮した。自分を生贄と思つて、水に跳び込むのに快感さへ覺えたでせう。何故運命は彼女を私と結びつけたんだらう？　夫とか父とか永遠の戀とか……彼女には必要なものがある。私が存在してゐないやうには見せられなかつたのだらうか？　併しそれは何の爲めです？』

ドクトルは答へなかつた。

『粗暴と言はれようが、破廉恥と言はれようが、何と思はれてもいゝ！　私がそんな人間である以上、何うしたらいゝんです？　何の名によつて私といふものを改造します？　私には

解らない！　誰かが私を斯ういふ人間に造つたのです。若し其處に過失があつたのなら、私はその人の過失に手を加へたくない！　他人の愚作を完成させるために、自分を苦しめる必要がありますか？　私は好ましくないと言ふだけだ！　私は有らゆる完成を拒絶する。現存のまゝでゐる事を希望する。どんな恰好でもいゝ！』

ドクトルは彼の方を見た。そしてまた默り込んで了つた。

『私は貴方がたの戀がわからない。また解りたいとも思はない。私には戀といふものがない！　私の求めてゐるのは女です！　女ばかりです！　彼等が何人溺れようとも、首を縊らうとも、私は……』

ミハイロフは餘りの緊張に氣息を詰らした。彼は言葉をきつて、暫く口を噤んでゐた。

ドクトル・アルノリヂイは苦しさうに吐息を洩らした。そして椅子に腰掛けたまゝ、幾らか身體を動かした。

『ドクトル！』ミハイロフは再び口を開いた。彼の聲はもう落著いてゐた。『ほんたうは儀悔に來たんです！　結局……實際を言へば怖ろしいんです！　氣味が惡いんです！　自分にも解らない！　私はリーザが可哀さうなんです……彼女の死を耳にした時、私の頭腦はぐらぐらした。今言つた事は事實ですが、さう思ふと同時に、また他の事を感じるんです。斯う

言ひながらも、彼女は生きてゐないとか、もう會ふ事は出來ないとか、有らゆる人に侮辱されながら、たつた一人で死んだんだとかいふことを思ひ出して、私の胸はせまつて來ます！ 私は堪へられない！ 彼女はあんな若い無邪氣な少女です。そして心から戀をしてゐました……私は生涯彼女を忘れない。何かでこんな文章を讀んだ事があります―― 憐れむべき時に憐れまずして、既に時の遲きを覺るより怖ろしきはなし。私は何だか不氣味な惡夢でも見てゐるやうな氣がする……しかし事實だ！ 明らさまな事實だ！ 私は一人でゐられなかつた！ 怖ろしくなつた！ それで貴方のところへ來たんです……慰めて貰ひに……』ミハイロフは諷刺るやうに言ひ加へた。

『ドクトル！ リーザの死を誰から聞いたと思ひます？』彼は唐突に訊いた。

ドクトル・テルノリヂイは訝かしげに彼の顏を見た。

『ネルリですよ！ 彼奴は此の新聞を報告するために、態々やつて來たんです。「新聞」と言ひましたつけ。ドクトル！ 私に復讐を加へたんですね！ 立派な復讐だ！ ドクトル！ 彼奴は狂女ですよ！ 尤も我々はみんな狂人だ！ 我々の心は混亂してゐる！ 貴方の處へ來る道々、私は絶えずクラウゼの事を考へてゐましたよ……何だつてクラウゼの事などを考へたのだらう？ リーザの事もネルリの事も考へないで……貴方とクラウゼを思ひ出した。

併し後ではクラウゼの事ばかり頭腦に浮んで來るんです！』

ドクトルは顏を上げて、訝かしさうに見た。

ミハイロフは不自然に笑つた。

『ドクトル！ 心配する事はない！ 自殺しやしません！』彼は恰もドクトルの眼光に答へるやうに言つた。『私のやうな人間が、自殺などをするもんですか。ほんたうを言へば、ネルリが出て行つた時、私は一思ひに自殺けて、有らゆる羈絆から脱れようと思つた……連發短銃を掴みさへしました。併し次の瞬間には連發短銃を投げ捨てゝ、自分の部屋を跳び出しました……若し部屋から跳び出なかつたら、ほんたうに自殺つたかも知れませんね。私は危く死から脱れた！ 何うしよう！ これは怯懦ではない！ 自殺するには、矢張り或る斷定に到達しなければならない。そして私には判斷がつかなかつた。要するに死すべきか死すべからざるかが解らなかつたんです！ クラウゼはそれを知つてゐた……リーザも知つてゐた……彼女は戀をした。戀は彼女を欺いた。だから死にたくなつたんです。極めて明瞭だ！ 生命を斷つためには、强い感情も必要でせう。併し私の胸には穢れたものがある。ドクトル！ 私からこんな話を聞くのは意外でせう？』

ドクトルは肩を縮めた。

『いや、何うして……』彼は不得要領に言つた。

『こんな事を考へた時もありますよ……人間は生存してゐる。併し周圍を見廻したら、怖ろしくなりはすまいか。若し人間が自分の生活を眞面目に凝視したら、徒らに過ぎ去つた時間や、忘れられた感情や、衰へた力や、自分のやつて來た有らゆる痴愚から、恐怖に襲はれるべきでせう。私も自分の一生を振り返つて見ました……前にも振り返つた事はあります。併し總てが集中されたかと思ふと、直ぐにまた混亂して了ふんです……振り返るのも今度が最後でせう……』

ミハイロフは休みなしに言つた。彼は言葉や考へに迷つて、胸をさらけ出しながら、發作的に言つてゐるらしい。

『ドクトル！　私も昔からこんな男だつたんぢやありません。嘗ては遥つた眼で物事を見てゐました。私は藝術も人道も戀愛も――有らゆるものを信じてゐた。餘程前の事です。ドクトル！　私の一生には一つの挫折があつたんです。美術學校時代ですから、まだ十九の時でせう……醫者は私に肺病の宣告を與へました。私は二三ケ月したら死ぬ事と信じてゐた……私は驚かなかつた。皮肉なほど落著きはらつてゐた。たゞ總てに興味がなくなりましたね。寫生を描き上げなければならない時でも、試驗が終れば死んで了ふのなら、莫迦らしい話だと思ふんです。伊太利旅行が計畫された時も、私は行かなかつた……私は何のために旅行するんだと考へました。羅馬を見たら、苦しまずに死ねるのか？　斯うして私は或る娘を追ひ廻した。そして捨てた。彼女が今自分を愛してゐるのはいゝが、此の愛が何時までも續くだらうか？　死んで了ふのだから何うでもいゝ！　私は始めて生を熟考しました。そして漸く解つた。ヘラクレスより强壯な人でも、要するに人間は私のやうな病人なんだ！　誰だか言つた事がある。最も怖るべき病は「生」である。生は十人が十人まで人間を殺して了ふ。肺病や癩病や黑死病（ペスト）なら癒（なほ）る事もありませうさ。併し生から助かつた人間はない。勿論陳腐な言葉ですが、我々はこれを眞面目に考へた事がありません……幾度か繰り返しながら、冗談ばかりのもののやうに忘れてしまふんです。私は遠からず自分が死ぬ事を識つた。と、此の言葉も私にとつては、もう冗談ではありませんでしたね。元來私の終生の事業は美術でした。私は先づ、何よりも美術に疑問を起しました。クラームスキイが死の前日に描いたといふ未完成の肖像畫を見たことがあります。此の肖像畫は、幾晩か私を眠らせなかつた……よく眞暗な處に寢轉んで、思ひに沈みました……此の寫生は完成中で、あれは確か完成したが、あの方はまだ手をつけてない……實際、私は繪を描いたり、畫室へ行つたりしたが、それは單なる道樂で、自分の天職を果した譯ではありません。私は畫家が繪を持ち歩いた

り、時に變色しないといふ繪具で彩色したりするのが滑稽だつた！　不愉快だつた！　私はレオナルド・ダ・ヴィンチの煩悶を書物で讀んだ事があつた。彼は「最後の晩餐」の變色に氣がついた時、百年後には自分の作品が消滅して了ふことを識つたんです。此の時レオナルドはまだ五十歳にならないんですよ！　私は不思議で堪らなかつた！　彼等は狂人ではあるまいか？　繪畫よりは自分自身の方が餘程先きに消滅するんぢやありまんか！　滑稽だ！　人間自身が死後二十年にして腐敗し盡すのは何でもないのに、人間の描いた繪畫が二世紀しか存在しないのは怖ろしい事なんですか！　莫迦な！　ルヴラン美術館の名畫紛失當時の事を今でも憶えてゐます。大變な騒ぎだつた。新聞は騒ぎ立てる、議會は問題にする、悲しみの餘り發狂した人間が出る……　私は矢張り可笑しいだけだつた。繪畫や書籍や彫刻をすつかり盗んだ者があつたら何うだらう？　美術品が「永久」のものだつたら、人間はどんな憂き目に會ひます？　袋を持つた莫迦のやうに、幾ら拵へても幾ら拵へても、不意にガランだ！　跡には何にも殘らない！　これが永久の美術品ですよ……重大なのは……　氣のつかぬほど少しづつではあつても、時が繪畫から繪畫、建物から建物、文化から文化、大陸から大陸、遊星から遊星と――有らゆるものを奪つて行く事です！』

ミハイロフは片方の眼を顰めながら微笑つた。

『此の略取こそ最も私を戦慄せしめたものです。當時私はまだ感傷的な少年でした。そして普通の子供のやうに、義理を自分の生活から引離す事は出來ませんでした。總てが判然と自分の胸に現れて、私は自殺を思ひ立つた程、虚無と幻滅とを感じました。併し私はまだ若かつた、强かつた、生の本能があつた……私は自殺を思ひ断つて、生の慰安を生活の中に求めるやうになりました。』

ミハイロフは物思はしげに暫く立つてゐた。彼の顔は落著いてゐたが、悲愁の色は愈々增して來た。激しい衝動は靜まつて、寂しい哀傷と變つたらしい。

『さうです！』彼はぐつたりと洋机に腰を下ろして、再び言葉をつゞけた。『私は歡樂を求めるやうになつた。歡樂ばかりは絶對的なものだ。それを女に求めたのは勿論のことです。要するに情慾の快感ほど本能的なものはありますまい。』

ドクトル・アルノリヂイは項垂れたまゝ聽いてゐた。

『最初私は戀を求めた……眞實の戀です、永遠の戀です……私は面白い見方をした。「永遠の戀」といふ言葉は幾らか滑稽に聞える。誰も彼もこれを認めないと言つて、一笑に附して了ふ。併し日を定めて戀をすると言へる人はあるまい……言つたにしても、日限が短く思はれる。戀の終る日がないやうな印象が矢張り殘つてゐる。戀人同志で幾ら約束したつて、一

人が冷たくなれば、一人は欺かれたやうな氣持になつてしまふ。貴方はこれに氣がつきましたか？』

ドクトルは懶げに點頭いた。

『斯うなんです……　私も矢張り此の言葉を冷笑してゐました。けれども實際は永遠の戀を求めてゐたんです。假令永遠でないにしても、眞面目な戀を求めてゐました。永遠の戀でなければ、何だつて同じ事ぢやありませんか！　要するに感情の力とか嚴肅とか言ふのは時で量るべきものです。三日もすれば消えて了つて、全く嚴肅なものではなくなる。一時的の感情に驅られて火の中へでも跳び込まないばかりの事があつても、翌日になれば自分ながら可笑しくなります。併し私はそれを言ふのではない……　私は心から戀を信じてゐました。そしてそれを見出したやうに思はれた時、私はどんなに幸福だつたらう！　今でも思ひ出す毎に、私の胸は迫つて來ます。私達はお互に理解し合つてゐました。もう此の上は何にも望む所がないと思つたほど自分達が幸福である事を自覺してゐました。それまで長い間、二人はその事以外には、何にも考へたり話したりしなかつたのです……我々の會合は、何時も私が突進して、彼女が防禦する事になつて了ひます。これが唯一の目的になつた。絶えず私の頭腦から去らない。私は聖物を冒瀆してゐるやうな氣がした。自分を侮蔑さへした。併し

何とも仕樣がありません。寛いだ談話も、二人の幻想も、藝術も後廻しになつて了つた。こんな事があつたのを憶えてゐます……　朝早く私は海岸通りに出た。空の清らかに晴れ渡つた靜かな朝でした。海は廣々として、朝の幸福に顫へたやうな透明な星が光つてゐました。呼吸は樂だつた。丁度空氣ではなくて、黎明の光が胸の内部に流れ込んで來るやうだ。私は生きてゐる歡喜に聲を揚げようとした。これ程の幸福を私に與へて呉れた戀人に對しては、彼女の足下に跪いて、着物の裾に接吻しようとした程、感謝の感動的な愛を覺えたのです。私は自分の愛情が、黎明の光りのやうに周圍に溢れてゐるやうな氣がした。戀人は蒼白い黎明の星の光りで織られた女のやうに思はれる……私の全身は汗でぐつしよりだつた……餘りの昂奮に足は顫へてゐた……　併しその時は何にも氣がつきません……たゞ幸福でした。そして何が幸福なのか、それは考へませんでした。これがたゞ肉體上の輕快に過ぎないと思ふのは、餘りに怖ろしい事でした。』

ドクトルは微かに頭を動かしながら聽いてゐた。清らかな朝の思ひ出が、眼前に浮んでゐるのか、たゞ老衰のために頭が顫へてゐるのかは解らない。

『程なく二人は一緒になりました。そして一年後には別れて了ひました。それも警同志のやうになつて別れたんです！　朝の幸福の如きは、二度と繰返されぬ瞬間である事が分りま

した。愛撫も家常茶飯事か、退屈の氣散じ位になつて了ひました。毎日繰返される事柄を重重しくするために、何時も庭に出て、有らゆる自然を呼ぶ譯にもゆきません。情熱も退屈なものになつて、其處にはもう感激がない。胸底には何時も鋭い哀傷が潜んでゐた……勿論私達はお互に愛し憐れんでゐました。歡喜や悲哀を頒ち合つて來ました。併し二人はもう友達で戀人の仲ではないんです。ですから美しい女を見ると、何故か情慾の祭日を自分から斷つたやうに悲しくなります。彼女も矢張りさうだつたんでせう……怒りつぽくなりました。嫉妬深くなりました。我々は退屈だつた。お互に氣まづい思ひをしてゐた。言ひ合つたり、苦しめ合つたりばかりしてゐた。氣の晴れるのは、第三者が一緒の時だけです。で、私達は到頭別れて了ひました……苦しい別離でした……初めの中は夜半に眠を覺ますと、彼女はもうゐないんだとか、他の人達と何處か遠くにゐるんだとか、自分はもう彼女の生活に關係がないんだとか思つて、水のやうな怖ろしさを覺えましたね。私は何だか譯が解らなかつた……若しこれほど大きな感情が自分の生活から消えて了ふのなら、消えないものは何なのだ、何が重要なのだ、何が眞實なのだ？　併し半年ばかり經つと、彼女がなくとも今迄通りの生活が送れる事や、夜も安々と眠れる事や、女狂ひの出來る事を知りました……まるで彼女とは何の關係もなかつたやうだ……　間もなく彼女の事は全然忘れて了ひました。私は迅速な移動や經驗の刺戟を求めながら、女から女へと移つて行つた。幾年か私はこんな生活を送つて、自分の求めてゐるものを搜し出したやうに思つた。併しそれは僞りでした。私は矢張り堪へ難い哀傷や、虚無の感が湧いて來るのを識つた。私はたゞ退屈でした。女に接近するのに感激がない、自由にするのに歡喜がない、見捨てるのに胸騷ぎがない……新しい女も最初一ケ月間ぐらゐは私を惹きつけましたが、それが一週間となり、三日となり、終ひには自由にする瞬間までのものとなつて了ひました……もう突進する希望も忍耐もない。躊躇や抵抗は私を苛立たせた……優しい處女に出來るだけ鐵面皮しく「ねえ……何ですよ……いゝぢやありませんか！」などと言ふ時に覺える嫌惡の情ばかりは他人に傳へる事が出來ません。私には微細な點まで分つてゐる。何う始まるか、そして何う終るか、先きの先きまで分つてゐる。十人が十人の女から、私は同じ言葉を聞いて來た。同じ痴態を見て來た……そして倦怠と哀傷と嫌惡の他には何にも殘りません。私は胸を空虚にしては、氣持を……」

ミハイロフは再び立ち上つて、部屋の中を歩き出した。

「ドクトル！　戀の物語は人間の愚かな頭腦で拵へたものです。二人の戀人が結婚するまでの事を美しく書いてゐる。併しその後は何うなるんです？　フ゜リモンとペフキダ、アファナーシイ・イワーノヴィッチとプリヘリヤ・イワーノヴナ――ナターシャ・ラストーワヤが綠色の著

物を黄色に變へただけだ！　放縱な情慾の快感は複雜になればなるほど、遊廓の汚れと冷えに浸みて來る。』

ミハイロフはドクトルの傍に近づいた。そして底光りのする眼で、彼の顏を見詰めながら言つた。

『ドクトル！　若し信じる事が出來ないなら、何うしても生きてゐられないのなら、何も生きてゐるには當りますまい！　情慾も矢張り物語です。快感で心を充たす事は出來ない。ナウーモフのやうに狂人じみた思想を信じるか、さもなければクラウゼのやうに總てを拒絶するんですね。燐寸の事を言つたのを覺えてゐますか？　妙な男だつた！　私には悧巧なんだか莫迦なんだか解らない！』

ミハイロフは急に言葉を切つて了つた。彼は突然悲痛の衝動に襲はれた。

『ドクトル！　生きてゐるのは何のためでせう？』

『私は知らない……』

『では、貴方は何のために生きてゐるんです？』ミハイロフは憎惡を帶びた聲で訊いた。

『私ですか？』ドクトルは喫驚したやうに訊き返した。『私はたゞ疲れたんです……』

『えゝ？』

『疲れたんです！』ドクトル・アルノリヂイは繰り返した。皺だらけな老人の大きな頭には、實際、胸の奥までも浸み透つた激しい疲勞の聲が聞えるらしい。ミハイロフは直ぐにそれを了解した。一度轉んだらもう起き上れない程、休息といふ事を考へずに、先きへ先きへと歩いて行つたら、人間も此の程度まで疲勞するだらう。

ミハイロフは光つた眼で、表情らしいものの無い皺だらけな顏から、何物かを探らうとするやうに、ドクトルを見詰めてゐた。

『此處に……』彼は斯う言つたまゝ、言葉を切つて了つた。

此の時サマワールは急に音を立てゝ、白い湯氣を吹いた。そしてまた靜まつた。

『ドクトル！』ミハイロフは再び言つた。恰も心の底に耳を傾けてゐるやうである。『貴方は疲れた……それは私にも解つてゐる。併し私は疲れてゐないと思ふんですか！　私は何もかも引き裂かれるやうで、胸の中は絕えず顫へてゐます。全世界を引掴んで、覆してやりたいやうな氣もするし、それと同時に生きてゐられないやうな氣にもなります。ドクトル！　嘘ではありません！　足の下には地面がなくて、行先きには道のないやうな氣がします。何を昨日しようが、何を明日しようが構はない。私は生きてゐられない。併し死ぬ事も出來ません。毎日私は自分に斯う言ふ――　十分だ、死んでも失ふ物がない、悲しむには當らない

……併しこれと同時に、貴方に會ふのも、此の椅子や太陽を見るのも今日が最後かと思ふと、私は怖ろしさに眼を閉ざして、死の存在を忘れようとする程、悲痛の情に捉はれるんです。ドクトル！　私は誰も憐れまない。リ！ザが死なうと、クラウゼが自殺しようと、數千人の兵卒が戰死しようと、昨日絞殺された者があらうと――私は構はない！　併し自分の眼の前で齒痛に惱んでゐる者があれば、私も矢張り一緒に身を悶えるんです。あゝ愚かな社會主義者がどんなに美しいだらう！　彼等は自分達のプログラムを信じて、二十二世紀には萬人のスープに鷄肉が入るから、生活を續けなければならないと確信してゐます。自分の憎惡を信じてゐるナウーモフが美しい。私の胸には何もありません！　空虛なんです！　何でもかでも何うして人間には信じられるのだか解らない。ドクトル！　私は斯う思ひますよ……』

『何うです？』ドクトル・アルノリヂイは寢言でも言ふやうに問うた。

『私に言はせれば、信じてゐる者はないんです！　神も、惡魔も人道も、正義と美の理想も……何にも信じてはゐないんです。みんな死を前にした恐怖の所產です。愚かなる怯懦です！　生は單に興味のないものですもの、さもなければ眞理や美が三日たりとも人間を迷はす譯はない。或る者は生活の革新に頭腦を惱ます、或る者は社會のために生きてゐようとする、また或る者は生の讃美歌を口にする……眞黑な深淵を前にした恐怖の所爲です。黑天鵞絨の上では普通の硝子玉も金剛石と見えるやうに、何等の興味もない、實際は極めて莫迦らしい太陽も、我々の眼を奪ふやうな光りと美の源泉に見えるんです。私だつて他の連中と同じやうに……矢張り臆病者です。何うして自分を欺く事が出來るんだらう？』

誰だか入口階段を駈け上つて來て、割れるやうに扉を叩いた。ミハイロフは溜息を吐いて、言葉を切つた。ドクトル・アルノリヂイは顏を上げた。

『誰です？』ミハイロフは叫んだ。

扉は壁に當つた。全身泥だらけになつた兵卒が、眞蒼な顏をして部屋に跳び込んで來た。

『先生！　急いで……大變であります！　大尉殿が自殺を……』

『誰が？』ミハイロフは叫んだ。そして直ぐにツレーネフの從卒である事を識つた。

『ツレーネフが？　自殺した？　何でやつた？』

『剃刀で！』兵卒は狂人のやうに答へた。

ミハイロフは凄い眼で彼の方を見た。ドクトル・アルノリヂイは急いで外套を擴げた。

二十五

將校となつて、妻帶してから此方、幾百度となくやつて來たことを、ツレーネフ大尉は今

日も繰り返したのである。早くから床を離れた。冷えぐ〳〵した食堂で、たつた一人茶を飲んだ。そして軍服に著更へると、先づ將校會議室へ行つて、其處から直ぐに騎兵中隊へ出掛けた。將校會議室で何よりも先きに彼を驚かしたのは、ルイスコフの自殺の報に接したことであつた。

彼は大胯に足を開いたまゝ、廣場の眞中に突立つて、卷煙草を燻しながら、厩の匂ひのする軍馬を、兵卒が引張つて行くのを見たり、軍曹を怒鳴りつけたり、御用商人と話したり、また時々は不安に似たものを感じたりしてゐた。

ルイスコフの死は彼を驚かさなかつた。實際の話、彼は教員や官吏を初め、軍服を著ける光榮を有たない有らゆる階級の人間を侮蔑してゐた。彼から見れば、ルイスコフの縊死は當然の事である。若しルイスコフのやうな境遇にゐたら、自分とても恐らく縊死を斷行するだらう。ツレーネフは將校社會の愉快な滿腹な粗暴な生活に慣れて、軍職の優越なる事を疑はなかつた。ルイスコフのやうに書類や會計を取扱ふ運命の人間が、何うして生きてゐられるのだか、彼は何時も不審に堪へなかつたのである。

けれども、クラウゼの自殺は全く別問題である。彼の死は雷鳴の如くにツレーネフを脅かした。併し彼は哲學に親しみのない單純な騎兵將校なので、クラウゼの自殺から何かの解決を得た譯ではなかつた。騎兵少尉の怖ろしい最後によつて喚び起された恐怖の情が、彼の胸を去つてからも、ツレネーフはたゞ良友を憐れんだだけで、クラウゼはアブノーマルな人間であると主張する人達に全く同意見であつた。彼は騎兵少尉の異狀に注目して、事件の容易ならざる事を知つた最初の人は自分であると、さも滿足さうに話してさへゐた。

彼にとつては何處までも不可解であるが、矢張り他の人達と等しく、クラウゼとルイスコフとの自殺の間に直感した或る疑ひのない聯絡は、不愉快な感情を彼の胸に起させるのであつた。ツレーネフは自殺が傳染的なものであるといふ話を思ひ出して、突然不可解な戦慄に襲はれた。彼は妻と言ひ爭つた時、幾度か自分の額を射貫かうとした事を思ひ出した。そして斯うした瞬間も繰り返さるべきものだといふ考へは、或る不愉快な感觸を伴うて、彼の心の内部に閃くのである。彼は地面に立つてゐるのを不安定に思つた。これはツレーネフが軍馬の點檢を中止し、勝手に御用商人と交渉する事を軍曹に命じて、さつさと家に歸つて行つたほど不快なものであつた。

歸途、彼は陰鬱な騎兵大尉に呼び止められた。倶樂部でクラウゼの慘劇があつた夜、自分も自殺に就いては屢々考へたと言つた、例の騎兵將校である。ツレーネフはルイスコフの事を自分から言ひ出して置きながらも、何故か此の會見が不快に思はれてならなかつた。

『さうですな。』大尉は沈んだ聲で言つた。『人間は、生が不安定である事を疑つてゐませんぬ筈はないと誰も言つてゐますが……それには私も異存がありません。一言で言へば、その……總てを破滅させるには、些細な打擊で十分ですさ。クラウゼがナウーモフに感染れて死時ピストルが偶然眼に止つたんですよ……快活な人間は自殺を物とも思ひませんさ。』

ツレーネフは馬を進めた。偶然ピストルが眼に止つたといふ一言は、病的と思はれるほど彼の頭腦を支配して、道々腦髓の內部に旋動してゐた。何となく不安定な感觸や、自身を怖れる不可解な心は、愈々これがために激しくなつた。

食事の時彼はルイスコフの事を妻に話した。併し妻はもう知つてゐると見えて、會計官の死には全く無頓著だつた。そして談話は何となく彈まなかつた。食事が終ると、ツレーネフは暫く微睡するために、不愉快な胸を抱いて横になつた。

彼は餘程經つてから眼を覺ました。胸は落著いて、身體はすつかり恢復してゐた。彼は寢疲れのした五體の心地よさを沁々と感じた。

彼は矢張り寢臺の上に横はつて、食堂の話聲や茶器の音に耳を傾けてゐた。細い日光の帶は密閉した扉の透間から流れ込んで、暗い溫かい寢室に一つの慰安を與へる。

ツレーネフは起き上りたくなかつた。彼は寢臺の柔かさを五體の筋肉に感じながら、全身を延ばして、大きな欠伸をした。食堂の笑聲は彼を驚かした。彼は思ひきつて床を離れた。着物を着更へた。冷水で顏を洗つた。髮を梳つた。そして洗面と睡眠に幾らか赤味のさした顏をして、オデコロンを全身に匂はせながら、食堂の中に入つて行つた。

妻はサマワールのところに腰掛けてゐた。そして素肌の腕を上げながら、銀皿に載つた彼の大きなコップに濃い茶を注いでゐた。彼女は寢室の水音で、彼が眼覺めた事を知つたのだらう。洋机の向うの端には着飾つた美しい婦人が坐つて、何か聲高に話してゐた。第五中隊長の妻である。

ツレーネフは評判の浮氣者で通つた此の女に附き纏うてゐた。それ故に彼女の前では、何處までも元氣にして、快活な將校らしく見せかけたかつた。で、茶器を持つたまゝ態と上げてゐる妻の露はな肘に接吻した時、ツレーネフは自分の髯が客の手に觸れるやうにして、平生の席に腰を下した。彼は愉快だつた。そして自分の好み通りな濃い熱い茶の入つたコップを、滿足さうに引きよせた。

『貴方ー　知つてゝ？』妻は生々した聲で訊いた。

『何を？』

『リーザ・ツレグロワといふ娘を知つてゐるでせう？』

『むう、知つてゐる……』ツレーネフは茶を飲みながら、狼狽へたやうに言つた。彼の眼前には、灰色の無邪氣な眼をした、金髪の美しい少女の姿が現れて來た。

『身投げをしたんですよ！』彼を驚かさうとする希望に喉をつまらしながら、妻は早口に言つた。

ツレーネフは疑はしさうに二人の女を見た。

二人ながら生々した顏をしてゐる。彼等は此の報知が如何なる結果を彼の面に齎らすか、一つもそれを見逃すまいとするやうに、ぢつと彼の口もとを見詰めてゐる。

ツレーネフは思はずコップを置いた。

『そんな筈はない……何時の事なんだい？』彼は機械的に訊いた。

『今日ですよ……貴方が寢て被在つた時でせう！』

『それから郊外で誰だか鐵砲自殺をしたさうですよ。』矢張り生々した口調で、客が早口に言つた。

ツレーネフは肩を縮めた。

『何ていふ事だらう……併し事實なんだな……あの男は……あの畫家は知つてゐるのかしら？』彼は不意にミハイロフの事を思ひ出した。

『知つてるでせうさ……街中の人が知つてるんですもの……あの娘は姙娠してゐたんですつて！』

ツレーネフの眼前には再び金髪の美しい顏が閃いた。

『可哀さうにね！』彼は言つた。

『何が可哀さうなんですよ？』妻は肩をすくめながら、蔑むやうに遮つた。『何うなるか位の事は分りさうなもんぢやありませんか！』

『だつて！』

『何うしてみんなミハイロフといふ人に欺されるんでせうね。私には解らない！』客は言つた。『私は大嫌ひ……あんな自惚の強い美男子は大嫌ひですわ！』

ツレーネフは、二年ばかり前に聯隊の野遊があつた時、彼女がほろ酔ひになつて、ミハイロフに森の中で身を任せた話を思ひ出した。彼は幾らか周章てた。

『でも兎に角あの娘は可哀さうですよ……死ぬより他には仕樣がなかつたんだ……ルイスコフの自殺なら解つてゐる……あの男は食ふに困つたんです……クラウゼは思想のために自殺したんです。併しあの娘は何うです？　まだ若い可愛い娘だつたのに！』

妻の顏には不愉快な陰影が光つた。

『さうでせうともさ！』彼女は皮肉に言つた。『男つていふものは厭に美人に同情するんですね！』

假令リーザがもう死んだにしても、彼女は夫が他の女を美人と思つてゐるのが嫉けるのだ。ツレーネフは眉毛を顰めた。

『男といふものはとは何だい？　誰だつて人間として可哀さうぢやないか！』

『ほんたうにね！』喉まで出て來てゐる皮肉な言葉を呑み込んで、彼女はそら〳〵しく同意した。

客は狡るさうに彼の顏を見た。彼女はツレーネフとロマンスを作つて見たかつた。で、始終彼が妻を怖れてゐる事を調戯つてゐた。

ツレーネフは胸を煮やした。

『いや、ほんたうに可哀さうだといふんだよ！』彼は不滿げに言つた。

『だから私もさう言つてるぢやありませんか！』妻は愈々嘲弄するやうに言つた。

ツレーネフは幾らか顏を赧らめた。彼は話を反らさうとした。

『怖ろしい事だ！　まるで流行病ですね！　新聞では自殺の事ばかり書いてゐる。何とか手段を講じなければなりませんな！』

『御存知でせう？』客が元氣よく遮つた。『ナウーモフが自殺倶樂部をつくつたので、まだ自殺者が十八人出るんですつて……さうなれば事が終るんですとさ……　ナウーモフつてどんな人です？』

『何ういふ人物かと言ふんですか？　それともどんな男かといふんですか？』ツレーネフはちよつと冗談を言ふやうな口調になつて訊いた。

女は美しい頭を振つて、絲で縊られたやうにむつちりとした頸を見せながら、聲高に笑ひ轉げた。

『では、どんな男ですの？』

『何うといふ事もありませんが……　兎に角悧巧な男です！』ツレーネフは意味ありげな顏をしながら言つた。

『私あの人と屹度ロマンスを作つて見せますわ。』女は笑ひ轉げた。『自殺倶樂部！　面白いわね！　屹度怖（ストラーシュヌイ）い人なんでせう？』

『貴方は熱情的（ストラーストスイ）な男かつて訊きたいんでせう？』ツレーネフは、二つの意味を掛けて調戯つた。

女は狡るさうに彼を指先で嚇した。そして脣を眼らました。

ツレーネフは不圖、妻の前で際どいことを言つてゐるのに氣がついた。彼は眞面目な顏になつた。

『併し冗談は措いて……ナウーモフが重大な役割を勤めてゐるのは事實です……自殺倶樂部は勿論根據のない話ですが……併しクラウゼに及ぼした影響は……』

『だつて貴方も自殺倶樂部の一員ださうですよ。』客は笑ひ出した。

『莫迦な！』

『この人はそれより飲酒倶樂部の一員なんですよ！』妻が言つた。彼女は客の嬌態や夫の惡巫山戯が氣に喰はなかつた。

ツレーネフはむつとした。併し彼は笑つて了ひたかつた。

『何故あの連中と飲んぢや不可ないんだい？』

『結構な御連中ですわね！』妻は皮肉に言つた。

『いや、何故だよ？　興味ある人達ばかりだ……アルブーゾフは自然兒だし、ミハイロフは天才肌の男だし、チーシュは大學生だし、ナウーモフは……兎に角あの連中と一緒にゐると面白い！』

『さうですか！』妻は腕を振つた。『貴方は十杯も重ねれば、誰と飲んだつて……面白くなるんでせう！　併し私に言はせれば、あのナウーモフは無賴漢ですよ。ほんたうにそれつきりの人間です！』

『何うして無賴漢なんだい？』

『何故つて、あんな御說教をするんなら、他人を殺すより先きに、自分が死にさうなもんぢやありませんか！』

ツレーネフは當惑した。彼もさう考へてゐたのである。けれども矢張り口論を止めなかつた。

『カーチャ！　お前も變な女だね！　人間の頭腦に一つの思想が湧いたら……』

『私はさう思つてゐるんです！　別に何うの斯うのと言ふ事はありませんよ！　卑怯ですわ！　クラウゼとかいふ人は自殺して了つたのに、理窟は兎に角、御當人は生きてゐるんぢやありませんか！　あの人と相識でなくつて殘念ね！　さもなけりや眼の前で卑怯者つて言つてやるんだけれど！』

『變な事を言ふね！　人間は自殺しなければ不可ないつて、あの男は言つてゐるのかい？　それは銘々のする事だ！　あの男はたゞ漠然と人生は無意義であると言ふんだよ！　私もその點では全く同意見だ！』

『先からさう思つてゐるんですか？』何故かは自分にも分らないが、彼女は愈々腹を立てゝ嘲弄するやうに訊いた。

『始終さう思つてゐたのさー　考へて見れば、同意せざるを得ない……自分の生活を顧みる必要がある。實際どんなだ？　教練だの作業だの兵卒だのと……毎日々々同じことばかりだー』

『だつて、兵隊許りぢやないでせう！』客は笑ひ出した。彼女は愈々夫婦喧嘩になりさうな言葉を、滿足さうに聽いてゐた。『貴方には奥さんもお子さんもお有りぢやありませんか！』

『妻が何だー　子供が何だー』ツレーネフは喧嘩腰になつて遮つた。併し彼は妻子なしの生活を想像する事も出來ないのである。『妻子ばかりで生活は充實されるものでない！』

『さうでせうともさー』妻は憎さげに立ち上つた。

ツレーネフは我にかへつた。

『私は字義通りの事を言つてゐるのではないよ……元來……人間は死ぬために生きてゐる……若しさうなら、生は極めて無意義なものだー』

『何にも生きてゐるには當りませんよー』妻は堪らなさうに言つた。

彼女は夫の一言々々に激昂した。自分は全生涯を夫に捧げて、たゞの一度も不平を口にした事がない。それなのに夫は何うだ！

『カーチャー』ツレーネフは、當惑したやうに低い聲で言つた。『さうむきになつちゃ不可ないよー』

『貴方こそお止しなさいなー』

『怒つたのかい？』ツレーネフは強ひて微笑を洩らした。

『貴方の事をですか？』妻は口の中で言つた。そして憎々しげに夫の顏を見た。

客は愈々平生の夫婦喧嘩になつた事を識つた。彼女は歸り支度をし初めた。

『貴方も怖ろしい事を仰有るのね。』彼女はツレーネフに挨拶しながら言つた。『あたし、貴方が怖くなつたわ！』

『では、私とのロマンスも成立しますかね？』ツレーネフは後の喧嘩が不安なので、出來るだけ落著きはらつて、今まで通り冗談を言つてゐた。

女は思はず妻の方を見た。彼女は指先でツレーネフを窘めながら、我にかへつたやうに笑ひ出した。けれどもツレーネフは妻の顏色が眞蒼なのに氣がついた。彼女は客の眼光を了解したのだ。

客が前室で外套を着て了ふまで、二人の女は冗談を言ひ合つたり、下着や模樣の事を話し

たりしてゐた。併しツレーネフは何にも耳に入らなかつた。自分の面を掠めた妻の復讐するやうな眼光は、既に宣戰が布告されて、如何としてもそれの避け難い事を語つてゐる。

『またか！』彼は惱ましさうに斯う思つた。『何だつてこんな事を言つて了つたんだらう？あゝ、何時になつたら終る事か！』

彼は何氣ない風を裝はうとして、頻りに妻の着道樂を調戯つた。併し妻は氣にも掛けないやうな顏をして、氣樂さうに客と喋つてゐる。ツレーネフは客の嘲るやうな眼付を見た。そして自分といふ者を、堪へ難いほど不幸な侮辱せられた人間のやうに考へた。

扉が閉まると、妻を滿足させる爲め、彼は故意に客の惡口を言つて、再び妻と言葉を交はさうとした。けれども妻は素知らぬ顏をして、食堂の方へ行つて了つた。そして書物を手に取つて、洋机の傍に腰を下した。ツレーネフは妻の前に進み出ようとした。と、丁度その時小間使が入つて來て食器を片づけ初めた。ツレーネフは全身の神經が顫へるのを感じながら、部屋の中を前後に歩き出した。小間使の前では言譯も出來ない。彼はそれが苦しかつた。

『今日はぐつすり寢たよ！』彼は矢張り口論を避けようとして、日常の平凡な言葉にそれを紛らしながら言つた。『カーチャ！　お前は何處へも出なかつたのかい？』

妻は返事もしなければ、書物から眼をはなしもしない。そしてツレーネフの方からは、鼻先と髪しか見えぬやうに、兩手で頰杖をついてゐる。小間使は彼の顏を覗いた。ツレーネフは紫色になつて、口髭を捻りながら、部屋の中を歩き廻つてゐた。小間使は何時まで經つても用をしてゐる。匙を一つ一つ拭く。コップを杯洗の中に轉がして、順々にそれを透して見る。ツレーネフは彼女を毆り殺してやりたかつた。彼女は漸く食器を戸棚の中に入れ、麵麭の粉を洋机掛から落すと、椅子の位置を直して、部屋から出て行つて了つた。

妻は顏を上げなかつた。

小間使が部屋にゐた間はツレーネフも、彼女の存在が、妻に近づいて無雜作に言譯するのを妨げてゐるやうに思つてゐた。併し彼女が出て行つて了つて、不自然なほど固くなつた妻の姿勢や、俯向いた顏や、洋机掛の上に執拗く肘をついてゐる薔薇色の露はな腕を見ると、ツレーネフは急に氣力が衰へて、身體がぐつたりと疲れてゐる事を識つた。彼は妻の傍へ近づく代りに、矢張り默然と部屋の中を歩き續けてゐた。

『カーチャ！　お聽き！』彼は心の中で妻に聲を掛けた。それは心の底から力强く迸り出た聲である。權利の自覺と品位に充ちた聲である。『お前には解らないのかい？　詰らない事から始まつたんぢやないか。みんな行きがかりぢやないか。私があんな事を言つたのも、罪はお前にあるんだよ。お前が嫉妬深くて、私がお前を怖がつてゐる事を隱すためには、私だ

つてあの位の事は言はなければならない。』

『いや……』ツレーネフは自分の心の中で自分の聲を遮つた。『嫉妬の事は何うとも、あの女は怒つて了ふよ！　頼むのはこれだけだ！　もう止してお呉れ！　私はこんな莫迦げた芝居に堪へられない！　私を苦しめないでお呉れ！　お前は何時か私がほんたうに自殺すればいゝと思つてゐるのかい？　ナウーモフに共鳴すると言ふのも此處なんだ！　お前に苦しめられてゐると、時々額を射貫きたくなるよ！　もう止めてお呉れ！　私はお前を愛してゐるんぢやないか！』

妻は顔も上げずに讀んでゐる。時々はほんたうに讀み耽つてゐて、彼の存在を忘れてゐるやうにも思はれる。併し彼女に近づく事は出來ない。ツレーネフは彼女が口論を始めようとしてゐる事や、腹の中をさらけ出さうとしてゐる事や、急には和解のならぬ事や、再び腰を低くして、惡戯をやつた子供のやうに寛恕を乞はねばならぬ事を識つた。けれども自尊心は胸の内に沸き立つてゐる。

『何うして自分は妻を腫物のやうに思はなければならないのだらう？　ちつとでも妻の愛撫に接すると、何うして自分は有らゆる侮辱を忘れて了ふのだらう？　妻はさん〳〵自分と口論して、今では素知らぬ顔に書物を讀んでゐる。彼女は自分の苦悶を見ずにはゐられないのだらうか？　最良の手段は彼女に注意を拂はないでゐる事だ！　彼女の氣紛れ心に何等の意義も加へないでゐる事だ！』

ツレーネフは既に幾度となくこれを考へた。必ず此の言葉を守らう、妻のやる通り自分も素知らぬ顔をしてゐて、愈々彼女を苛立たせてやらうと誓つた。併し彼の胸は彼女の愛撫と融け合つて、一時的の怒りなどは續けられなくなる。

彼は口を利かうとしたが、辛くも唾液を呑み込んで、悶えたり、血を沸かしたり、妻を憎く思つたり、堪らなく戀しく思つたりしながら、部屋の中を歩き續けてゐた。彼は無意識に卷煙草を出して喫ひ始めた。

刺戟性な煙草の一服は彼を幾らか落著かせた。彼は深く溜息を吐いて考へた。

『何でもない！　初めての事ぢやなし！』

『煙草は止して下さい……　私は頭痛がするんですから！』妻は憎惡を帶びた聲で突然に言つた。ツレーネフは思はず身震ひをした。

ツレーネフはむつとした。彼は一日煙草を喫つてゐたが、妻はよくそれを堪へてゐたのである。それが喧嘩になると、もう煙草は止して下さい、私は頭痛がしますだ！　嘘も休み休みにしろ！　彼女は頭痛などしてゐやしない。たゞ彼を侮辱して、自分の威力を示すために、

意地悪く言つてゐるのだ。

彼の胸にもちつとは妻を慰めたい希望があつた。彼は卷煙草を投げ捨てた。併し自尊心と激昂はそれ以上に起つた。

『止して呉れ！　頭痛なんかしやしないんだ……怪しいもんだ！　私は煙草を喫ひたい！　何だつてそんな事を言ふんだ？』

彼女は返事もせずにページを捲つた。

ツレーネフは頭腦の内部が煮えくり返るやうな氣がした。

『何だつて澁面をしてゐるんだ？』彼は自分にも思ひがけない事を訊いた。

妻は憎々しく彼の方を見た。そしてまた書物に眼を落した。ツレーネフはもう喫ひたくもなかつたのであるが、意地になつて卷煙草をはなさなかつた。

突然彼女は荒々しく立ち上つて、書物を引掴んだ。そして彼の方へは眼も呉れず、寢室の中に入つて了つた。

ツレーネフは部屋の眞中に突立つてゐた。全身の血汐は沸つて來た。もうほんたうの夫婦喧嘩である。原因は何だ？　自分が彼女を理解しないのか？　それとも彼女が自分を理解しないのか？　彼は機械的に卷煙草を投げ捨てた。そして一思ひにさうしなかつたのを悔んだ。併し悔みながらも、矢張り此の屈辱に胸を煮やしたのである。

寢室の扉は閉ざされてゐた。

『いや、始末をつけなければならない！　彼女の處へ行つて、眞直ぐに言はう……』

ツレーネフは素早く寢室の方へ行つて、扉を推した。扉には鍵が掛つてゐるらしい。彼は頬打ちを喰はされたやうな氣がした。彼女は夫が續いて來る事を確信して、故意に新しい侮辱の準備をして置いたのだ。

彼の眼は眩んで來た。ツレーネフは狂人のやうに部屋の中を蹌踉き廻つた。

『何の事だ！　何の事だ！』彼は腕を振り廻しながら呟いた。

幾度繰り返された事だらう！　幾度彼は子供のやうに閉め出された事だらう！　彼は物狂ほしく跳んで行つて、扉を搖ぶつた。妻は返事もしない。

『カーチャ！　お開け！　莫迦な眞似をするんぢやない！　お開け！　さもないと私は……お開けと言つたら！』ツレーネフは堪へられなくなつて、召使に聞かれるのも構はず、大聲で叫んだ。そして力まかせに扉を蹴飛ばした。

錠前の音がした。妻は鍵を廻した。併し扉を開けようとはしなかつた。これも新たなる侮辱である。ツレーネフは扉を推し開けた。彼は我を忘れて、部屋の中に入つて行つた。

妻は化粧臺の傍に立つて、餘所々々しい眼で彼の方を冷やかに見てゐた。

『何か御用で御座いますか？』彼女は訊いた。

『御座いますか？　何だつて扉を閉めたんだ？　何ういふ譯なんだよ？　全體何を怒つてゐるんだ！　酷い事をするなア！』

妻は冷やかに顏を反向けた。彼女は書物を掴んで、それを化粧臺の隅に置いた。

『言つてお呉れ……　全體何うしてもらひたいんだ？』ツレーネフは泣き出しさうな聲で言つた。

彼女は振り向きもせずに肩を縮めた。

ツレーネフは圓々とした柔かい肩や、華美な髮飾を見た。そして彼女の總てが、力まかせに張り倒してやりたいほど、憎々しいものに思はれた。

『言つてお呉れ！　私は賴むよ！　何うして私が……莫迦らしい……何だつて默つてゐるんだ！』ツレーネフは唸り聲をあげて、自分の頭を抱へた。

『全體何うして貰ひたいんです！』彼女は同じやうな事を憎々しげに言つた。

此の愚かしい質問の質問は、恰かもツレーネフの頭腦を煮えくり返させるやうなものである。一分間ばかり、彼は痙攣的に氣息を吸つて、見開いた眼で彼女の顏を見詰めてゐた。彼女は落著き拂つて、再び書物を讀み出した。

唐突にツレーネフは彼女の手から書物を奪つた。彼女は喫驚して後退りした。彼女の顏は眞蒼になつた。彼女の顏には哀れつぽい、苦しさうな、言ふに言はれぬ表情が閃いた。けれども彼の顏を一目見ると、彼女は忽ち强くなつて、恐怖の色は見る〳〵中に蔑むやうな憎惡の表情と變つた。

『亂暴な……返して下さい！』彼女は冷やかに言つた。

ツレーネフは書物を胸に抱へて、愚かしく眼を見廻した。彼の恰好は滑稽でもあつたし、哀れげでもあつた。そして自分にもそれが分つた。併しそれを制する事は出來ない。

『莫迦！』彼女は口の中で呟いた。そして作り笑ひをしながら、扉口の方へ行つた。

常からツレーネフの怖れてゐる事が起つたのは此の時である。此の無慈悲な態度や冷笑は、ツレーネフが閲え苦しんで、彼女が正氣にかへる事を心から祈つてゐた時、彼の自覺を狂氣の如くにさせて了つた。

彼は矢張り書物を引掴んだまゝ、氣息を喘ませ、全身を震はして、彼女を扉口の處まで行かせた。けれども彼女が無頓著にハンドルを掴んだ時――　彼女は召使のゐる子供部屋に行つて（召使のゐる處では彼も大聲で喚けない）自分は一人苦しまなければならない事を識つ

た時、ツレーネフは忽ち書物を投げ出して、彼女の跡を追うた。彼は妻を抱擁したかつた。抱擁の力で心を柔らげるために、彼女を力まかせに抱き締めたかつた。彼は急に絶望と惡夢のやうな快感とを覺えて、殆んど無意識に彼女の背中を毆りつけた。

『あッ！』彼女は斯う叫んで、虚空を掴みながら倒れた。

濁つた霧のやうなものがツレーネフの腦髓から飛び散つた。

『何を爲出來したのだらう？』恐怖や絶望とともに、ツレーネフの頭腦にはこんな考へが浮んだ。

彼は眞蒼な妻の顏を見た。彼女の顏は全く變つてゐた。眼は痛みの爲めに圓くなつてゐる。口腔は眞黑な怖ろしい腔となつてゐる。

『殺して了つた！』

『カーチャ！　カーチャ！　赦してお呉れ！　赦して！』彼は愛と羞恥と憐憫と絶望の堪へ難い衝動を覺えて、倒れた妻の身體を抱きかゝへながら泣き出した。

突然彼女は全身を猫のやうに屈めた。彼女の顏色は人間とも思はれなかつた。眼は圓くなつた。暗くなつた。唾液が口から流れ出た。彼女は默然と夫の眼を見詰めた。そして夫の髮に獅嚙みついて、哀れつぽい金切聲をあげながら、身を藻掻いたり、掻きむしつたり、嚙みついたりした。

ツレーネフは、自分が發狂したのではあるまいかと思つた。彼は此度こそ取返しのつかぬ事を爲出來したのに氣がついた。萬事が永遠に終つたのを識つた。

或る不快な感情が彼の胸を捉へた。彼は今朝もこれを感じた。併しそれも今といふ今は惡夢のやうなものである。

彼は程なく自分の手の近くに、偶然剃刀を見るであらうと思つた。そして其の剃刀を化粧臺の上に見出した。

甲走つた聲がまだ聞える。彼は苦しい心地よい復讐の念に捉はれてしまつた。そして妻の突き出した腕や、見開いた眼を見ながら、彼は剃刀を掴んで、物狂ほしく自分の喉を掻きむしつた。

『これでもか……これでもか！』こんな考へが彼の頭腦に浮んだ。そしてこれが取返しのつかない事である事や、これが取りもなほさず死である事を判然と意識した。

『カーチェチカ！　私は……カーチェチカ！』彼は斯う叫んだ積りだつたが、實際は唸り聲をあげて、ぐつたりと床に倒れただけだつた。玩具や小箱や香水壜は化粧臺から轉げ落ちた。

何うして椅子の足が自分の眼の前にあるのか――　彼にはもう解らなかつた。彼は起き上

らうとして、痙攣的に椅子を引掴んだ。血に噎せ返つた。傷口を抑へようとしてゐる妻の眼を怖ろしさうに見た。

彼の眼は忽ち暗黄色の闇に襲はれて了つた。

『カーチェチカー』彼は死の國から絶望的に叫んだ。併しもう生きた人間に聞える聲ではなかつた。

二十六

雨が降つてゐるのか、風が吹いてゐるのか、途中で誰に出會つたのか――家へ歸つて行く時、ミハイロフは少しも氣がつかなかつた。彼が雜然と意識したのは、濕氣と、暗闇と、耳もとの騒音と、何處か遠くに煌く燈火ばかりであつた。彼は周圍の有らゆるものが災禍に破壞されながらも、ひとり耳を聾し、半ば意識を失つて、呆然と生き殘つた人間のやうである。夜はまだ明け切らないが、四邊はもう暗闇といふ程でもなく、崩壞し破壞された物が、惡夢の如く幻影的に見える黎明の靜かな街で、怖ろしい震駭を經驗した人間の顏色のやうに、總ての物が何處となく蒼褪めてゐる。これは恐怖である。眼を開きながら見た幻影のやうに蒼白い恐怖である。

彼はドクトル・アルノリディの宿から駈け出して來た。恐らく非常な速度で駈けて來たのだらう。駈け通しに駈けて來たのかも知れない。彼は激く氣息を喘ませてゐた。そして心臟が槌で打たれるやうに鼓動してゐるのを感じた。

我が家の入口階段まで來ると、彼は幾らか正氣にかへつた。そして愕然と足を止めた。鎧扉の透間が朦朧と明るい。誰か來てゐるらしい。

最初の考へはネルリだつた。それはミハイロフが蹌踉いて、思はず階段の上に足を止めたほど激しいものだつた。彼は暫く頭腦を集中して、彼女が自分の胸に戻つて來た事を喜んでゐるのか、驚いてゐるのか、自分の心を確かめようとした。併しミハイロフの心は自分で自分が解らないほど亂れてゐる。彼は扉を開けるのが怖ろしかつた。ネルリが自分の部屋で自殺するために戻つて來たのではあるまいかといふ極めて愚かしい考へも、漠然と彼の頭腦を掠めて行つた。彼はネルリの屍でも見たら、屹度自分は發狂するに違ひないと思つた。彼は本能的な恐怖を起して、唐突に物狂ほしく扉を開けた。そして部屋の中へ入つて行つた。

だだつ廣い畫室の内部は、殆んど闇に等しかつた。大きな畫布の後方だけは、僅かに明るい。豆洋燈の傍に腰掛けてゐる人の影は、天井に屈折して、ぢつと壁に映つてゐる。

扉の開く音を聞くと、影法師は搖れ動いたが、そのまゝまた動かなくなつた。其處に坐つ

てゐる人は顔を振り向けただけで、立ち上りはしなかつたのだらう。

何故かミハイロフは爪先きで歩くやうにしながら、こつそりと部屋を横切つて、畫布の後方の明るい部屋隅を覗いた。其處には額縁からはみ出た繪や、卷いた畫布や、埃だらけな幕張や、様々な塵屑が散らかつてゐる。其處には腰掛が置いてあつて、捜し物をする時の他には點けた事のない臺所用の豆洋燈が載つてゐる。

ほやの煤けた洋燈が燃えてゐた。そして其の傍の腰掛には、眞赤な襯衣を著た蓬髪の男が、黒い血走つた眼でミハイロフを流眄に見てゐた。

『アルブーゾフ！』ミハイロフは理由もなく全身を震はしながら叫んだ。

アルブーゾフは返事もしなければ、身動きさへもしない。彼は妙に底光りのする眼で、見張るやうに彼の顔を見てゐる。

ミハイロフは急に口を噤んだ。數分間二人はお互に顔を見合してゐた。併しかうした沈默のうちに、平生の友情の假面は浮んで來た。ミハイロフはアルブーゾフの訪問がたゞならぬ事であつて、彼の胸には怖ろしい心が潜んでゐる事を識つた。

此の晩――暗い部屋の方へ扉を開いて、闕の上に立つてゐる自分の姿を見出した時、怖ろしい形相をしたアルブーゾフの思ひがけない出現は、ミハイロフには最後の衝撃のやうに思

はれた。それから後は怖ろしい惡夢の力に壓せられてゐるやうな氣持だつた。彼は自分の行爲を判然と自覺してゐなかつた。

暫くはそれがアルブーゾフではないやうにも思はれた。彼は幻影を追はうとして、無意識に眼を擦つた。

アルブーゾフは身動きもしないで、洋燈の傍の低い腰掛に坐つたまゝ、彼を流眄に見てゐた。窮屈さうに縮まつた彼の姿勢には、何となく野獸のやうなところがある。若し此の時ミハイロフに何か考へる事が出來たとしたら、彼はアルブーゾフが自分を殺しに來たのだと思つたらう。併しそれは纏まつた考へではない。此の考への漠然たる感觸が彼の頭腦に閃いたまでの事である。ミハイロフは寂しく微笑を浮べながら唐突に訊いた。

『先刻から此處にゐたのかい？』

アルブーゾフは答へなかつた。そして前のやうに彼の顔を見てゐた。

ミハイロフは歩を進めた。そして有毒な爬蟲類と出會つた人間のやうに、恐怖が盲目的な狂怒となつて行くのを感じた。

『何か用があるのか？』彼は叫んだ。

若しアルブーゾフが此の時も口を噤んでゐたら、ミハイロフは彼に躍り掛つて、喚いたり

毆つたりしたらう。或は發狂したかも知れない。けれどもアルブーゾフは返事をした。
『何でもない……たゞ來たんだ。君の顏を見に來たんだ！』彼は姿勢を變へずに、憎惡に充ちた毒々しい冷笑を浮べながら言つた。
『何故だ？　何のためだ？』ミハイロフは矢張り拳を固めて、顫へながら訊いた。
『それが……　僕の物好きさ！』アルブーゾフは不得要領に答へた。そして黑い口髭の下から白い齒を光らした。
『出て行つて呉れ！』ミハイロフは新たに狂怒の發作を覺えて、腕を振り上げた。
彼は忽ちアルブーゾフの來訪の理由を知つた。彼はリーザが溺死したから來たのだ。自分を嘲笑しに來たのだ。
『何だよ、何だよ！』アルブーゾフは威嚇するやうに言つた。併し立ち上りはしなかつた。
ミハイロフは力なく腕を垂れた。
アルブーゾフは再び齒を光らした。
『それもいゝだらう！　だが僕と話すのに拳骨はよくないよ！　それより掛け給へ！　談話があるんだから掛け給へ！』彼はかう叫んで、身體を痙攣させた。
此の叫聲のために、ミハイロフの暗い心には、何物かが目覺めたやうだつた。彼は後退りして、眉毛を顰めた。そして蒼褪めた美しい顏を上げながら、蔑むやうに笑つた。
『騒ぐ事はない！　何の談話をするんだ？　歸つた方がいゝ！　その方がよつぽど愼重だ！』
『愼重だつて？』アルブーゾフは憎々しく身體を屈めながら訊き返した。『冗談ぢやない！　今さら愼重かよ！　それに君は何時から愼重になつたんだ？　以前なら愼重もよからうが、今となつちや晩いよ！　歸るものか！　やるんなら、何でもやるがいゝ！』彼は憎々しく言ひ終へて、身體を擴げるやうな事さへした。その結果は泥醉した空威張の商人らしく、急に粗暴な横柄な人間となつた。『僕は誰かとうちとけて話したい……何だか沁々話した事がないやうだね！　我々は友達ぢやないか……友達だらう？』
ミハイロフは蔑むやうに肩を縮めた。
アルブーゾフは默然と返事を待つてゐた。彼の顏色は見る〳〵うちに蒼褪めて來た。
『僕の愼重ぶりは幾度かお目に掛けたらう……　僕は何時も遠慮してゐた……君だつて一度くらゐはいゝぢやないか……君が誰でも彼でも追ひ出す柄かよ？　お互に罪深い身の上だからなア！』
彼は粗暴に嘲弄した。自分でもそれに氣がついたらしいが、却つてそれが爲めに愈々物狂ほしくなるばかりである。

『君は喧嘩に來たのか？』ミハイロフは胸を惡くして、蔑むやうに言つた。『何だつてさう喧嘩腰になるんだ？　商人氣質が餘り露骨だぜ！　君は今にも摑み掛りさうだ！』

『僕ぢやあるまい！　摑み掛らうとしてゐるのは君の方だ！』アルブーゾフは言つた。『僕はかういふ人間だもの、商人氣質が何だと言ふんだ？　僕は商人の息子さ！　それつきりの人間だ！　その積りでゐて貰はうよ！』

ミハイロフは憎々しくアルブーゾフの澁面を見た。アルブーゾフは、胸の中をさらけ出すやうに、態とらしく碎けて來た。そして不自然なほど吃つた聲で話してゐた。

『何うでもいゝ！』ミハイロフは斯う言ひながら椅子を摑んで、アルブーゾフと向合ひに腰を下した。『何でも言ふがいゝ、僕は聽いてゐる……全體何うしようといふんだ？』

『まア、それは暫く言ふまい！』アルブーゾフは狡るさうに笑つた。『僕は自分の事も君の事も言ひたくないんだ！』

『何うでもいゝ！』ミハイロフは肩を縮めながら繰り返した。

アルブーゾフは暫く彼の眼をぢつと見詰めてゐた。

『僕は訊きたい事があるんだ！』彼は徐ろに口を開いた。『君は知つてゐるのかい……君の……ツレグロワと言つたつけかなア……溺死したんだよ！』

『ツレーネフは剃刀自殺を遂げた！』突然ミハイロフは彼の言葉を耳にせぬやうに言つた。

アルブーゾフは愕然と顏を上げた。

『何だつて？』

『ツレーネフが剃刀自殺をやつたんだ！』ミハイロフは懶げに繰り返した。

『またか！』アルブーゾフはひどく狼狽したやうに言つた。そして舌打ちをした。『何うしたと言ふんだらう？　まるで傳染病だなア！　併し何うでもいゝ！　自殺したものは自殺したものだ……莫迦がひとり少なくなつただけの事さ——大した悲劇でもあるまい！　まだ人間は澤山殘つてゐる！　あんな男に構つちやゐられない！　それは何うでもいゝが、問題は君の女が溺死した事なんだ！　君は知つてゐるのか？』

ミハイロフは眞蒼になつた。

『何うしようと言ふんだ？　君は何のために……』

アルブーゾフは快活に笑つた。

『たぶん知つてゐるんだらう！　それでいゝ……何の爲めとは何のことだい？　僕が來たのは……』

『僕を苦しめる爲めにか？』ミハイロフは叱責するやうに訊いた。けれども、彼の聲には力

がなかつた。

アルブーゾフの眼は激しく光つて來た。

『苦しめに？　苦しめないで何うする？　どんなに僕が苦しんだか、君には分つてゐるか？』不意に顏を近づけて、燃えるやうな憎惡に充ちた眼を彼からはなさずに、アルブーゾフは低い聲で言ひ加へた。

ミハイロフは答へなかつた。

『さうかい。君の知つた事ぢやないのかい？　他人の痛みは痛くもないかい？　一部の人達はさう考へてゐるんだが、僕は實際呆れるね……他人は自分に對して善良で憐れみ深くなければ不可ないが、自分自身は……そんな事があるものか！　莫迦も休み休みにしろ！　今となつたら幾らでも惱むがいゝ！　僕は見てゐてやる！　併し君は遊戯的に一生を送る氣だつたのかい？　面白可笑しく暮す氣だつたのかい？　相手は花だとでも思つたのか？　何故君は默つてゐるんだ？』

『何にも言ふ事がないからさ！』

『何にもない？　ちつとはあるだらう！　相手が生きた人間だとは思はなかつたのかい？　幾らか君も解りかけて來たやうだ！　僕はカルマックの言葉を聞いた事があるよ。幸福の花を血で洗ふ事は出來ないつてね……君はやつたんだ……花は散つて了つた、さうだらう？』

ミハイロフは默つてゐた。

『僕が何を言はうとしてゐるんだかわかるかい？』アルブーゾフは、心から愉快さうに言つた。『君を見てゐると、何うも樣子が面白くないね……君が戰慄するのも無理はない……君もげつそり瘠せたなア……葬式には行く積りかい？　これこそ見物だらうなア！』彼は不意打ちを喰はすやうに言ひ加へた。

ミハイロフは立ち上つた。

『何を言ふんだ！』彼は響きのある高い聲で叫んだ。

アルブーゾフは暗い歡喜を覺えて、彼の顏を見た。

『見たまへ！　全身が蒼褪めてゐる！』彼は獨白するやうに言つた。『よくない、よくない、何うも樣子が面白くない！　併しまア掛けてゐ給へ！』

彼は立ち上りもせずに、自分の腕を延ばして、ミハイロフを椅子に掛けさせた。

『僕は君が氣の毒でならない。僕は心から言つてゐるんだよ。君がたゞでない事は分つてゐるさ！　併しセリョージャ！　僕は君を愛してゐたよ！』彼は病的な悲しみを覺えて、不意に言葉をきつて了つた。

ミハイロフは身震ひした。

『ザーハル！　聽いて吳れ！』彼は胸を騷がして、怖ろしく急きながら、早口に言つた。『僕は君に對して罪を犯したとは思はない！　ひとりでにさうなつて了つたんだ！　僕もあの時は苦しんだよ！』

彼は祈るやうに腕を差し延べた。

アルブーゾフは項垂れたまゝ、ぢつと彼の言葉を聽いてゐた。

『あの時君は旅へ出た。ネルリは一人になつた……僕に來て吳れと言ふ……君も行つてやつて吳れと言つた……誓つてそんな心ではなかつたんだ！　けれども或る晩、思ひ掛けない事で、あんな事になつてしまつた……まるで霧にでも襲はれたやうだつた！　魔がさしたんだ！　どんなに僕は後悔したらう！　斯うならないで濟むなら、どんな高價なものでも手ばなしたらうよ！　ネルリと間もなく別れたのもこれが爲めだ！　二人の間には何時も君といふものが横はつてゐた！　僕はそれが厭だつた！』

『風に煽られたのか！』アルブーゾフは溫順しく點頭きながら、甲高いテノールで遮つた。

突然彼の顏は絶望的な憎惡に歪んだ。ミハイロフは思はず後退りした。

『何だつて默つて了つたんだ？　先きを話して吳れ給へ！　なか〳〵面白い！』アルブーゾフは心地よげに言葉を續けた。彼の聲には嘲弄が含まれてゐた。『先きを話し給へ！　そんな氣ぢやなかつた、厭だつた、ひとりでにさうなつて了つた、僕が賴んだ……それで其の先きは？　君も酷い男だ！　惡人だ！』彼は物狂ほしく叫んだ。『僕から見れば、君を殺すのは、虱を潰すのも同じだが、君は……』アルブーゾフは喘ぎながら嗄れ聲で言つた。『君はまだ憐れみを乞うてゐる……赦しを乞うてゐる！　未練な！』

ミハイロフは、彼の惡口にも威嚇にも注意を拂はなかつた。たゞ差し延べた腕は力なく垂れて、顏には哀傷の色が浮んで來た。

アルブーゾフは我に返つた。

『聽き給へ！　知らなかつたとは嘘だ！　君は心あつてやつたんだ！　僕が賴んだからこそやつたんだ……僕が君の友達だつたからさ！　君は何うしても深入りしないではゐられない程、今迄に放埒な眞似をやつて來たんだ！　例へば此處に友達の許嫁がある……友達は自分を信じて、彼女を自分に託した……女は友達を愛してゐて、自分の方は振り向かうともしない……併し自分は彼女が何うして自分の方を振り向かないのかお前達に見せてやる。アルブーゾフといふ下らぬ商人の息子も幸福を欲してゐる。自分は何だ？　才能がある、聰明だ、美男子ではないか！　すべては自分の物となるべきだ。お前達は喰餘しで澤山だ！　何を愚

圖々々してゐるんだ？　併し僕は欲したよ。一度ならず二度も三度も欲したよ。氣も心も憔悴した彼女を見た時、君は定めし愉快だつたらう！　彼女を裸體にした時だつて、君は彼女の事も僕の事も考へやしないんだ。彼奴は莫迦だが、愛や信仰や崇拜は何處かにある。自分は彼奴の愛も信仰も奪つてやるんだ。君は恐らく此の位の考へで狂暴になつたんだらう！』

『ザーハル！　そんな事はない！　それは違ふ！』ミハイロフは絶望的に叫んだ。

『默つてゐ給へ！　それに違ひないんだ！　長い間見てゐたお蔭で、今では君の心が判然と分る！　全體君は何ういふ人間だ！　君は我々凡人と違つて、非凡に生れて來た！　才能がある！　美貌がある！　優しい心がある！　非凡人さ！　獸は牝一匹だが、人間は有らゆる女を要すると言つたのは誰だ？　君だつたね！　無論君は自分の事を他の人間とは比較にならないと思つてゐるんだらうさ！　自分と比較すれば取るにも足らぬものだ位に思つてゐるんだらうさ！　自分のやうな人間には總てが意のまゝになる氣なんだ！　全世界は自分の歡樂の爲めに造られた……勝手にしろ！　君のために血の涙を流してゐる人間のある事などは考へても見ないだらう！　一度君に弄まれたら、其の幸福の代償として、女達は當然苦痛を嘗めなければなるまいさ！　非凡人だ！　嘘をつけ！　他の人間と變りがあるものか！　君も矢張り惱まされたらう！　人の胸を傷けて置きながら、罰をうけずに居られるものか！

よく憶えて置くがいゝ！　併し此頃では君も解つて來たらう！』

ミハイロフは顫へた脣を動かしながら、默然と彼の方へ腕を差し延べた。アルブーゾフは荒々しくそれを突きのけた。

『ザーハル！』

『何がザーハルだ？　もう晩い！　君は僕の心を傷けた、穢した、唾を吐きかけた。今となつてザーハルもあるもんか！』

『ザーハル！』

『今となつて君は憐憫を乞ふ積りなのか？　苦しいのか？　堪へられないのか？　もう晩いと言ふんだ！』

アルブーゾフはミハイロフの顏を見詰めてゐた。そして急に口を噤んで了つた。ミハイロフの顏には人間とも思はれぬ苦痛の色が浮んでゐる。

數分間はひつそりとしてゐた。アルブーゾフはミハイロフを涙眼に見てゐた。彼の顏には眼から脣にかけて、痙攣らしいものが走つてゐる。彼の心の内部では何物かが苦しい爭鬪を續けてゐるのだらう。

『赦して呉れ！』ミハイロフはかう言つて、彼の腕を掴んだ。

アルブーゾフは身震ひして振りはなした。

ミハイロフは項垂れて了つた。

『これだ……』アルブーゾフは憐れむともなく、復讐するともなく、不得要領に言つた。『こんな事だらうと思つた！』

ミハイロフは愈々低く項垂れた。

『聽き給へ！』アルブーゾフは再び口を開いた。『君に……或る檢事の話をしてやらう……』

彼は全く夢中だつた。そして何の爲めに話してゐるのだか別に考へもしなかつた。

『聽き給へ……僕がまだ子供だつた時分に、我々の街に檢事補がゐた……僕は夢のやうに其の男を憶えてゐるよ……身長の低い、紙のやうに干乾びた顏をした……一言でいへば檢事らしい男だつた。僕等は檢事々々と言つてゐたよ。此の男だつて矢張り役所にも行くし、酒も飲むし、骨牌も戲るし、道樂も時々はやつた……後になつて親父がよく僕に話した！　教養のある、田舍の人間とは比較にならぬほど本を讀んでゐる、自分一人を信じて、他の人間を輕蔑する程度に聰明な男だつた……此の男には妙な態度があつて、その爲めに怖れてゐた譯でも、愛してゐた譯でもないが、兎に角みんなが此の男を尊敬してゐた。此の男の前で人の噂をすると、何かいゝ事を言つたり、何かした事を褒めたりするやうな場合でも、何時も定つて一言か二言口を出すだけだ……言つて了へば、笑ひもしないで、其の話から遠ざかつて了ふ……別に惡口を言ふ譯でもないんだが、此の男が一言口を入れると、褒めるべき事も何だかけちがついて、何となく厭氣がさして來るんだ……こんな風に勝手な事をやつてゐたが、これは傲慢のためだとか、人を見下さうとしてゐるのだとかいふ事に氣のついた者はなかつた。此の檢事には妙な癖があつた。一年に一度か二度、或はもつと少なかつたかも知れないが、不意に縛めを解かれたやうになつて、痛飲する、泥醉する、鏡を破るやら、ボーイの顏に芥子を塗るやら、大變な亂暴をやるんだ。こんな暴れかたをするものだから、二月ばかりの間といふものは、大抵な人が此の男から遠ざかつて了ふ……けれどもまた冷靜な、端正な、几帳面な人間になつて、なに喰はぬ顏で骨牌など戲つてゐるんだ……だから誰だつて酒の事は忘れて、昔の通り此の檢事を尊敬するやうになる……併し彼の冷笑は愈々憎々しくなるね。俺は最後の釦まで外づして、穢ならしい物をお前達の掌に載せた。けれどもお前達は氣にもかけないで、喰つて了つた……まア、こんな面をしてゐるんだ！　かういふ亂暴を働く時の話なんだが、此の男は賣笑婦の中から溫順しい女を捜し出すのが好きだつた……相應な家に生れながら、貧のために身を墮したやうな女だ……近頃袖を引きに出たばかりで、まだ羞かしがつてゐて、そのくせ急には足を洗ふ氣でもないやうな女なんだ……こんな女を

見ると、色々な事を優しく訊いて、すつかり同情して、勞つてやつて、何もかも信じて、同情の餘り涙まで流す……そして正道に救ひ出してやらうと言ふ……彼を救主か神様のやうに拜まうとするほど女を感動させて置いて、此處で初めて正體を現はすんだ……僕の親父も言つてゐたが、此の男は顔まで變るんだぜ！　顆顆の毛が垂れたり寢たり、脣が歪んだり、小さな齒が出たり……檢事ぢやない！　まるで臭猫だ！　何もかも同情で持込む……明日にも新生活が始まりさうだ……何から何まで世話を見てやらう。何でも好きにしてやらう。だが何うなるにしても今日だけは最後に……かう優しく出られては、幾ら唐突でも、涙の出るやうな談話の後でも、これが物の順序だらう位には思ふさ……此の大恩人に心から感謝する爲めだもの、或は大滿足かも知れない……其處で部屋へ連れ出すんだが、十五分もすると、女は泣くやら、悲鳴をあげるやら、救助を呼ぶやら……大變な騒ぎだ！　あの男がどんな事をするんだかは知らないが、なんでも人の話によると、極端に酷い眞似をやるんださうだ……さん〳〵な目に會つて、傷だらけになつた女を、それから慰み物にする……けれども其處は手に入つたもので、女はもう氣が變になつて、人を怖れて、這ひ上る事も出來ないどん底に落ちて了ふんだ……檢事は萬事が思ひのまゝになつて、聖者の聖物を凌辱したんだもの、胸も清々して、大滿足なんだ！　一人の女などは其の後で首を縊つて了つたよ。無論その事件は揉み消されて了つたが、檢事の奴は……』

『何だつて僕にそんな話をするんだ？』ミハイロフは惱ましさうに訊いた。

『別に理由はないさ！』アルブーゾフは物思はしげに言つた。『たぶん……いや、分らない……何故だか檢事の事が記憶に浮んで來たんだ……此處に腰掛けてから、僕はずつとあの男の事ばかり考へてゐた。或は……まア、待ち給へ、先きを話さう。女が首を縊つた時分の事ぢやない、それからずつと後だが、流石の檢事も退屈になつた……酒もすつかりやめて了つて、暫くは亂暴を働いたやうな噂もなかつた。其後はさうした生活を送つてゐたが、突然ある令嬢に求婚して、拒絶された……親達は幾らか問題にしたんだが、當人がきつぱり斷つたんだから仕方がないさ！　檢事は愈々沈鬱になつて、始終考へ込んでばかりゐたが、程なく十六になる孤兒を養女に貰つた。財産も讓つて、可愛がつてゐるうちに……逃げられて了つた！　其後の事だが、檢事は昔凌辱した女の一人に會つて、その女に求婚した……初めは承諾してゐたが、後には男を莫迦にして、人の前で頬を毆つたり、突き飛ばしたりする……檢事は友達といふものを求めるやうになつた。莫迦に愛想がよくなつて、誰のことでも褒めた。誰でも彼でも家に招いた。併し一人として出掛けて行く者はない。みんな遠ざかつて了ふ……檢事は惱み迷つた……そして何かの調査の時、例の修道院の傍を通つた……彼處に

あるだらう……あの荒廢した修道院ときたら、白堊の岩を掘つた洞窟こそあるが、無恰好な聖像も聖寶もありやしない……何を考へたんだか、何を感じたんだか知らないが、先生馬を止めると、院主のところへ行つて、何か話して來た。街へ歸ると、直ぐに退職して、事務を引渡すなり、僧侶になつて了つた……そして何でも一足跳びに苦行者となつたさうだ……それから洞窟の一番奥に庵を鑿つて、十七年といふものは默行したまゝ、外へ出なかつた……鎖帷子を著て、聖餅ばかり喰つて、到頭一言も口を利かずに死んだ。尤も死ぬ前に院主を呼んで、他の處へ移して呉れるようにと頼んださうだがね……自分の庵から、曲りくねつた洞窟を通つて、棺を外へ出すのは大變だと思つたんだらう。』

アルブーゾフは口を噤んで了つた。

ミハイロフは彼の顏を見てゐた。胸は愈々惱ましくなるばかりである。

『君は何を言ふ積りなんだ？』彼は神經質に訊いた。

アルブーゾフは蒼白い顏を彼の方へ向けた。彼の顏には深い物思ひの陰影が落ちてゐる。彼は何の爲めにこんな話を始めたのだか、自分でも忘れて了つたらしい。そして悲しげに眼を据ゑてゐた。

『近頃僕は其の修道院に寄つて見た。』彼はミハイロフの問ひには耳を傾けずに言葉を續けた。『洞窟にも入つた。坊主に金をやつて、暫く一人でゐさせて貰つた。そして三時間ばかり洞窟の庵に坐つてゐた…… 岩を眞直ぐに鑿つた小さな庵で、黑い大きな聖像がある、蠟燭が燃えてゐる……窓はなかつた。小さな風拔窓があるが、それだつて何にも見えやしない……死のやうな靜けさで、頭の上は何千貫といふ山だ……氣息が苦しい。誰もゐない處にたつた一人坐つてゐるんだから、最初の半時間は蠟燭を見たりなんかして氣を紛らしたよ……聽て退屈になつた、氣持が惡くなつた……併し坐つてゐて、其處を去らうとはしなかつた……と、此の靜寂が自分を吸收し始めた。心は深く沈む……生命は何處かへ去り、記憶は霞んで……何にも要らない。何にも考へない。たゞ眼前には蠟燭が燃えて、聖像の面が搖めいてゐるばかりだ。僕は無我になつたやうな氣がした…… 十七年間地下に坐つてゐられた譯だと思つたね……靈は單獨に生きて、自分の世界を造るんだもの。以前に重大だ、必要だ、苦痛だと思つた事も、故意にさうして了つたのだとしか思はれなくなつた……何等の用もない戯れだ！ 僕は判然と意識した……生命は人間が歩いたり話したりする事にあるのではない。靈そのものにあるのだ。自分の或る一點にあるのだ。自分で自分を充實させてゐる一點にあるのだ……坊主が來た時、僕は出て行きたくなかつた！ だが明るい處へ出て、太陽を見ると、僕は何だか變な氣がしたね。現實ではなくて、なぐり描きにした模樣畫だ……聲も顏

も――有らゆるものが模様畫だ！　太陽も繪のやうに艶がない……僕はそれから野獸のやうに酒を飲み出したんだ！』アルブーゾフは不意に言葉をきつて、再び默り込んだ。

ミハイロフはぢつと彼の顏を見詰めてゐた。

『庵の事が頭腦を去らないんだ！』アルブーゾフは低い聲で、再び物思はしげに言葉を續けた。『酒も飲んだ、破廉恥な眞似もやつた、戀もした、憎惡もした。けれども僕の眼前には矢張り庵があるんだ！　總ては彩色した幻燈に過ぎない！　眞實のものは地下にあるんだ！生活の觸れない心の奥底の一點にあるんだ！　ゼリョージャ！　僕は苦行をする積りだよ！』アルブーゾフは急にかう言ひ加へた。彼の顏色は幾らか曇つた。

ミハイロフは身を震はした。

『セリョージャ！　今君を嚇したり怒鳴りつけたりした事は氣にかけないで呉れ給へ！』アルブーゾフは悲しげに言つた。『あれは悲しみの餘りだ……　僕は苦しくなつた！　セリョージャ！　今日はネルリともきつぱり別れて來たよ！』

ミハイロフは顏を上げた。

『でも……今日は君と一緒に工場へ行くんだつて言つてたぜ！』

アルブーゾフは手を振つた。

『いや、行くもんか……もう行くもんか！』

ミハイロフは暫く口を噤んだまゝ、憐れむやうに、悲しむやうに彼の顏を見てゐた。

『君は……』彼は低い聲で憚るやうに訊いた。『忘れる事が出來ないのかい？　赦してやる事が出來ないのかい？』

アルブーゾフは額の廣い重苦しい頭を悲しげに振つた。

『聖書などを讀めば、寛恕も美しいものさ！　併し實際……赦すといふことは、價値を認めない事だ！』

ミハイロフは默つてゐた。彼の顏には內部の鋭い惱みと悲しみの皺が浮んで來た。

『ザーハル！　それは酷い！　こんな事を言へた義理ぢやないけれど、それはネルリが惡いんぢやない！　みんな僕が惡かつたんだ……彼女は魔がさしたんだよ！』

アルブーゾフは冷笑した。

『君の心が解らない。』ミハイロフは惱ましさうに言葉を續けた。『君は、人妻を戀する事が出來るだらう……未亡人を戀する事が……』

『未亡人だ！』アルブーゾフは繰り返した。そして頭腦に浮んだ或る一事を隱すやうに、突然顏を反向けて了つた。

『何うしたんだ？』ミハイロフは吃驚して訊ねた。彼は惡夢のやうな考へに脅かされた。
彼は眞蒼になつた。額には冷汗が流れて來る。
『ザーハルー』彼はアルブーゾフの腕に縋りながら叫んだ。
アルブーゾフは答へなかつた。
『そんなら君は……ほんたうか？』ミハイロフは低い聲で不得要領に問うた。
アルブーゾフは口を噤んだまゝ、涙眄に見てゐた。
ミハイロフも默つて了つた。
部屋の中は森然としてゐた。雨も風もやんだのだらう。戸外では物音一つしない。洋燈は朦朧と點つて、二つの大きな影法師は、眞黑な頭を動かしながら、ぢつと壁に映つてゐる。
もう夜も更けた。夜の靜寂は壁を透して、室内へ流れ込む。
『すつかり君に話さう！』アルブーゾフは突然聲高に言つた。彼は顏を上げなかつた。『たぶん君と話すのもこれが最後だらう。だから今といふ今は何でも言ふ！　僕は君を殺す積りだつた……アヴグーストフといふ軍人を殺さなかつたら、僕はほんたうに君を殺したかも知れない……彼奴は君を救つたんだ！　人間一人殺すのは容易でない事が分つたよ！　彼奴の姿が眼の前にちらついてゐる！　苦しい！　胸がむしやくしやする！　今日、君の處へ來たのも、此の目的の爲めだ……併し駄目だ！　やれない！　君のゐなかつた時は、やれさうな氣がした……雜作なささうだつた。近づいて行つて、いきなり引掴んでやらう……胸が騷ぐ、血が燃える……けれども君を見ると、矢張り駄目だ！　腕を振り上げる事も出來ない！
僕は殺す事も出來なければ、赦して了ふ事も出來ないんだ！　胸がむしやくしやするのは此だ處よ！』
アルブーゾフは軛の中で藻掻く牡牛のやうに首を振り動かした。
『併しそれ程までに……』ミハイロフは口を開いた。
『何がそれ程までだ？　僕は中途半端な事が嫌ひな人間だよ！　悲觀したなら、苦行者になるさ！　憎いなら殺して了ふさ！　愛してゐるなら、死ぬまで愛するさ！　僕が悲しいのは、憎むと同時に、君を愛してゐる事なんだ！　何うしてこんな事になつたんだか分らない！
單に愛してゐるだけなら、とうに赦したらうさ！　單に憎んでゐるだけだつたら、犬のやうに殺して了つたらうさ！』
『だがもう濟んだ事ぢやないか！』ミハイロフは力なく呟いた。
『濟んだ事だつて？　何が濟んだんだ？　ネルリはずつと君を愛してゐたんだよ！』
『ザーハルー！　何を言ふんだ！』

『ほんたうの事を言つてゐる！』アルブーゾフは執拗く頭を振つた。
『ネルリは君を愛してゐるんだ！　君をさ！　何時も君一人を愛してゐた……僕と關係のあつた時でも……』
『よして呉れ！　聽きたくもない！』
ミハイロフは心ならずも口を噤んだ。
『僕を君より莫迦な人間だと思ふのか？』アルブーゾフは暗い聲で、嘲弄するやうに言つた。『僕だつて愛してゐる事は知つてゐるさ！　併し其處に何があるかも知つてゐる！』
『何がとは何だ？』
『さうさ……女には或る祕密がある。』
『どんな祕密だ？』
『女は初めて身を委せた男を永久に忘れる事が出來ない！　見捨てゝも、他の男を愛しても、憎惡を有つてゐても、忘れるやうな事は決してない！　指先でちよつと招けば、何もかも忘れて、戻つて來る……それは分りきつてゐる……初めての時は總てを犧牲にしたんだもの、全生涯を獻げたんだもの……羞恥も恐怖も純潔も此處で失つたんだ！　二度目にはもうこれを感じない！　精神的にも肉體的にもこれを經驗しない！　自然は人間に何時も同じ感觸を與へる。併し同じ感觸は二度とあるものでない！　あるにはあつても、感觸らしいものは無くて、たゞ不快なものばかりだ！　若しネルリをそんなに愛してゐなかつたのなら、こんな事を考へ出しはしなかつたらうよ……君が考へなかつたやうにさ！　僕は全生涯を獻げてゐるんだ……抱擁してゐる時でさへ、ネルリは二人を比較してゐるなと思つたら、僕が何うして生きてゐられる！』
『君は氣が變だなア！』
『君ほど變でもあるまい！　これは事實だよ！　人間はこれに氣がついてゐる！　併し口に出さないんだ、自分で自分を欺いてゐるんだ、忘れようと努めてゐるんだ！　さもなければ到底生きてはゐられない！』
アルブーゾフは暫く口を噤んでゐた。
『何と言つたらいゝだらう……僕はねえ……神を信じない、とうから祈禱を止めてゐる。併し……滑稽だが……僕は毎晩君が死んで了ふか、さもなければ不意に殺されて了ふようにと思つてゐるんだ。神様！　他の人間はどん〳〵死にます！　何故あの男は死なないのです？　神様！　何うぞ彼奴を殺して下さい！　僕は涙を流して祈つた……滑稽だ！　自分でも滑稽なことは知つてゐる。僕は誰にもこれを話さなかつたよ。併し今となつたらもう何うでも

いゝ！』

『今となつたら何うでもいゝ？　何故そんな事を言ふんだ？』ミハイロフは唐突に訊いた。

アルブーゾフは嘲るやうに彼の顏を見た。恰も彼の鈍感に驚いたやうである。

『斯ういふ譯なんだ！』彼は荒々しく答へて、そのまゝ顏を反向けて了つた。

『君は先刻僕を殺せないつて言つたね！』

『僕には殺せない！』彼は低い聲で答へた。

ミハイロフはぢつと彼の顏を見詰めてゐた。

『君は……　君は自殺する氣なんだな？』彼は愕然として叫んだ。　そして血液といふ血液が心臟から流れ出て了つたやうな氣がした。

アルブーゾフは何とも答へなかつた。

『さうだらう？　ほんたうのことを言つて呉れ！』ミハイロフはかう叫んで、彼の肩を搖ぶつた。

アルブーゾフは徐ろに彼の方を向いた。

『何うでもいゝ！』彼は聞えるか聞えないくらゐに言つた。

ミハイロフは彼をはなして、二三歩後へ退いた。

『ザーハル！　それはなるまい！　君は氣が何うかしてゐる！　何の爲めだ？　そんな事をして何になる？』

『そんなら何うすればいゝんだ？』アルブーゾフは皮肉に問うた。

ミハイロフは呆然と彼の顏を見てゐた。

『それは何うとも……ネルリが自殺して了つたら何うする？』アルブーゾフは病的に顏を歪めながら、低い聲で言ひ加へた。

『ネルリだ？　ネルリが何うして自殺する？』

アルブーゾフは肩を縮めた。

『そんなら君は何う思つてゐたんだ？』アルブーゾフは不氣味に笑つた。『彼女は何うする……ダンスでも踊るのか？　その位なら自殺するさ！　或はもう死んでゐるかも知れない！女が一人や二人死んだつて、君は騷ぐやうな事もあるまい！』

『ザーハル！』ミハイロフはかう叫んだが、急に言葉が出なくなつて了つた。

彼は氣がをかしくなつた。時々は夢の中の出來事のやうな氣もした。アルブーゾフの論言は怪しく響いて、重々しい頭は彼の眼前で惡夢のやうに搖れてゐる。有らゆるものが胸の中に亂れる……ネルリ、アルブーゾフ、リーザ、クラウゼ……ツレーネフの從卒が記憶か

ら浮んで來る……アルブーゾフは自分の死を欲してゐる！　彼奴は狂人だ！　彼奴は自分を死の方へ突き落す爲めにやつて來たのだ。

マスクワ旅館の人氣ない一室で經驗した事のある不斷の怖ろしい哀傷が、突然ミハイロフの胸を襲うた。彼は心の絲が縺れてゐて、端緒の見えないやうな氣がした。全く彼を一思ひに殺さうとするやうなものだ。總ては終るだらう。明日といふ日はあるまい。明日といふ日！　今日はネルリが來た。ドクトル・アルノリヂイの家へ行つた。それから從卒が駈けつけて來た。今はアルブーゾフが此處に腰掛けてゐる……併し明日になつたら、もう何にもない。ネルリもゐまい。アルブーゾフもゐまい。リーザも……リーザ！　彼は今までリーザの事を殆んど考へなかつた。彼は始終記憶を追うてゐた。考へまいとして、他の人間から人間へと彷徨うてゐた。まだ總てを了解しないやうな氣がする。併し明日となつて、白い冷靜な晝の光りに浸つたら、何もかも判明するだらう。恐怖は眼前に立ち上るだらう……リーザ！『併し作品は？』不圖彼は繪の事を思ひ出した。鋭い哀傷が彼の胸を締めつけた。彼は漸く自分の作品が未完成であつた事に氣がついたらしい。

明日になれば人々がやつて來る。自分の作品を運び出す。畫室はがら空となる。次の展覽會には自分の作品が見えない……たゞ大理石の墓より冷たい『白鳥の湖』が、何處かの博物

館に殘つてゐるだけだ……何うでもいゝではないか！　何がそんなに悲しいのだ？　何うして自分を憐れむ人は無いのだらう？　アルブーゾフは何の爲めに檢事の事などを話したのだらう？　あの檢事だつて死ぬ時には誰の事も思はなかつたらう！　併しあの男は總ての人を憎み、總ての人を蔑んでゐたといふではないか！　自分は何うだ？　自分は憎みもしなければ、蔑みもしない。また自分以外の者は愛してもゐない。幸福の花を他人の血で洗ふことは……自分はそれを欲してゐるのか？　リーザ！　リーザ！

『君は何を考へてゐるんだ？』アルブーゾフの聲が微かに聞えた。恰も、何處か遠くの方から言つてゐるやうだ。

『え？』ミハイロフは無意識に訊き返した。そして初めて見るやうに、彼の顏をしげ〳〵と見詰めてゐた。

此の人間は死を欲してゐる……死を欲してゐる人間の顏の怪しさ……誰の死だ？　自分の死ではないか！　莫迦な奴だ！　それともネルリの死だらうか？　彼は赦す事も忘れる事も出來ない……その權利は有つてゐる。併し何の爲めにあゝ殘酷なんだ？　彼は自分を哀れとは思はないのだらうか？　また何を憐れむのだ？

アルブーゾフは顏を上げて、狼狽したやうにミハイロフの顏を見た。心の內部を見徹すや

うな濁つた眼で、彼の憔悴れ歪んだ蒼白い顔を見てゐた。
『セルゲイ！』彼は聲高に言つて、ミハイロフの腕をとつた。
ミハイロフは暫く解し兼ねたやうに、ぼんやりとアルブーゾフを見てゐた。
『セルゲイ！』アルブーゾフは氣味惡さうに繰り返して呼んだ。
ミハイロフは全身を彼の方へ向けて、急に哀願するやうな微笑を洩らした。
『君が今日やつて來たのは何うも變だなア！』彼は他人のやうな聲で呟いた。
『何が變だ？』
『知つてゐるらしい……』
『何を知つてゐるらしいんだ？　君は何を言つてゐるんだ？』
『なアにさ……』ミハイロフは懶げに腕を振つた。『何でもない……あとで話さう！』
『あとは何だい？　君は酔つてゐるのか？』アルブーゾフは不安げに叫んだ。
彼の黑い大きな影法師は天井に搖めいてゐた。
『いや……今日僕は新規に繪を描き始めたんだ。』ミハイロフは急に元氣づいて、早口に言ひ出した。『何なら見せようか？』
『もう僕は見たよ。』アルブーゾフは沈んだ聲で答へた。『僕は繪どころぢやない。』

『見たか？』ミハイロフは力の拔けた聲で訊き返した。そして、途方に暮れたやうに額を擦つた。『僕は一日製作してゐた……』
『よくそんな時間があつたもんだ！』アルブーゾフは憎々しく遮つた。『君は繪を描いてゐるのが相應なところだつたらう！』
ミハイロフは頭を抱へた。
『何うしたんだ？』アルブーゾフは腹立たしくなつた。『何處か痛むのかい？』
『いや、痛みはしない……たゞ……君は檢事の事を面白く話したよ……』
『君は氣が狂つたのか？　それとも僕を嘲弄してゐるのか？』アルブーゾフは憎々しく言ひ放つた。彼は不可解な恐怖に胸が締めつけられて來たのを意識した。
『さうかも知れない！　僕が今日自殺しさうになつた事を知つてゐるか？　連發短銃（ピストル）を握つた……危く自殺するところだつた！』
『知つてゐるとも！』アルブーゾフはかう言つて、神經質に笑つた。
殆んど機械的な怖ろしい考へが、突然アルブーゾフの黑い血走つた眼に閃いた。彼はずるさうに顏を顰めながら言つた。
『いや、措いて呉れ！　君のやうな人間が何で自殺などするものか！　措いて呉れ！　君は

好き勝手な一生を送るんだ！　なんで君が！』

急にミハイロフは彼の眼をぢつと正面から見詰めた。

『ザーハル！　僕が自殺したら、君は定めし喜ぶだらうなア！』彼は徐ろに言ひ終へた。

『莫迦なことを！』アルブーゾフは不明瞭に遮つて立ち上つた。『君は氣が狂つたな！』

『聽いて呉れ！』ミハイロフは彼の方へ顔を突き出しながら言つた。

アルブーゾフは彼の異様な眼を一瞥して後退りした。

『よせと言つたら！』

『いけない……聽いて呉れ！』ミハイロフは矢張り不得要領に繰り返して、彼の方へ段々と延び出て來た。

アルブーゾフは恐怖に捉はれた。

『何だ？』彼は眞蒼になつて言つた。

ミハイロフは立ち上つた。彼の顔は粘り氣のある綠色のものに蔽はれてゐた。脣は顫えてきた。

『聽いて呉れ！』彼は言葉を見出し得ぬやうに、三度繰り返して言つた。

アルブーゾフは思はず一歩退いた。

『セルゲイ！』彼は響きのある高い聲で唐突に叫んだ。

ミハイロフが何か言はうとして、言ひ得ないでゐる事は明かである。脣は愈々激しく顫へた。髪の亂れた蒼白い顔は歪んだ。

『セルゲイ！　よさないか……僕は歸るよ！』アルブーゾフは怖ろしさうに呟いた。けれども彼はミハイロフから眼を放さなかつた。

『君は……君はたぶん……ほんたうに僕を……』

『しつかりして呉れ！　君は何うしたと言ふんだ！』アルブーゾフはかう叫んで、緊乎と彼の肩を掴んだ。

併しミハイロフは物狂ほしく振り拂つた。

『歸れ！』彼は荒々しく叫んだ。『歸れと言つたら！　さもないと殺すぞ！　君は故意に來たんだ……僕が……君は僕が……いゝとも、いゝとも……いゝとも！』

彼は全身を震はした。彼の姿は怖ろしくもあつたし、哀れげでもあつた。アルブーゾフは彼の方を見てゐた。突然ミハイロフは畫室の奥へづか〳〵歩いて行つた。何かを床の上へ投げ出した。小聲で呟きながら、ぶる〳〵顫へる手で、忙しげに洋机の抽斗を搔き廻した。

『いゝとも、いゝとも……何うでもしろ！』彼はしまりのない聲で獨言をいつた。

アルブーゾフは、身動きもせずに彼の方を見てゐた。彼はミハイロフが發狂したと思つてゐた。彼は萬事を急に理解した。これは怖ろしいヒステリイの發作である。若し自分が引き止めなければ、ミハイロフは直ぐにも自分の眼前で短銃自殺を遂げて了ふ。騎兵少尉クラウゼの血塗れな顏が現はれて來る。彼は本能的な恐怖と不可解な嫌惡に捉はれてしまつた。アルブーゾフは躍り掛つて、手近の布巾でミハイロフを狂人のやうに縛めてやらうとした。併しそれと同時に或る無意識的な、そのくせ極めて判然とした考へが彼を制してゐる。

ミハイロフは手當り次第の物を床へ投げ出して、矢張り熱病患者のやうに呟きながら、しきりに洋机の中を搔き廻してゐた。

『いゝとも……いゝとも！』

アルブーゾフは彼の捜してゐる連發短銃が、洋机の上の穢れた繪具皿の下に横はつてゐるのを知つた。まだそれを奪ひ取るだけの時はあらう。併しアルブーゾフは一足も動く事が出來なかつた。

『自分は何うしたらいゝ？ 早くしろ！ 早くしろ！』彼の頭腦にはこんな考へが閃いた。

けれども、彼は直ぐ樣不可解な考へに捉はれてしまふ。恰も全身が痲痺したやうである。心は見開いた狂人のやうな眼に集中されてゐる。其の眼は、穢れた繪具皿の下の小さな光つた物を凝視してゐた。

彼はミハイロフが抽斗を引き出して、床の上に叩きつけたのを見た。それと同時に繪具皿が倒れて、連發短銃は其の銃口を現はした。

まだミハイロフを突きのけるだけの時はある。

『セルゲイ！』アルブーゾフは甲高い聲で叫んだが、急に振り返ると、扉に胸を叩きつけて、部屋の外へ跳び出して了つた。

彼は判然と意識してゐた。そして自分の意識してゐる事と、自分の逃走の意義とを信じる事が出來なかつた。ミハイロフは追ひかけるやうに叫んだらしかつた。捕へられた兎のやうに訴へるやうな聲で叫んだらしかつた。併しアルブーゾフは足も止めずに、入口階段の方へ駈けて行つた。

彼は寒氣と光りに捉はれた。もう朝である。太陽はまだ昇らないが、四邊にはもう透明な光りが射してゐる。斷れ〳〵な夜の雲は地平線の上で一塊に融け合つて、その上には雲一つない、洗はれたやうに明るい美しい空が高まつてゐる。樹木の下こそまだしつとりと冷たいが、花園の外れにある白楊の頂きはもう薔薇色に燃えてゐた。金色の疎らな葉が思ひがけない暖氣と光りに顫へてゐる。

併しアルブーゾフには何にも見えなかつた。何にも解らなかつた。彼は狂人の如く眼を見開き、眞蒼な怖ろしい顏をして、若し自分を追うて來る人の聲でも耳にしたら、其の時こそ發狂するに違ひないと思ひながら、無我夢中に街を走つて行つた。

二十七

黃昏だつた。ネルリは寂しく自分の部屋に腰掛けてゐた。

彼女はもうミハイロフの死を知つてゐた。彼はリーザ・ツレグロワの死に亂心して、短銃自殺を遂げたのだ。其の事は現場に居合はしたアルブーゾフが、朝早く警察に訴へて出たさうである。

彼女は此の報知に驚かなかつた。ネルリは恰もこれを期待してゐたやうである。事件に對する彼女の態度は訝かしいほど冷靜なものだつた。彼女はたゞ何物かが急に胸から消えて、自分は全く空虛になつてしまつたやうな氣がした。

ネルリは葬式にも行かなかつた。けれども街中の人が墓地に集つた事や、大變な花だつた事や、淸らかに晴れた秋の日だつた事や、彼の墓が剃刀自殺を遂げたツレーネフや騎兵少尉クラウゼの墓から餘り遠くない事は人傳に知つた。

何故か此の晴れた日や、散り殘つた黃葉や、秋のうすら寒さや、煌々した溫みのない太陽が、彼女の胸に浮んで來た。頑な彼女の心の奥はこれが爲めに一入暗くなつて、彼女がとうから考へてゐた怖ろしい決心は愈々動かし難いものとなつて了つた。

彼女はこれを全く冷靜に考へてゐた。死の事を思つても怖ろしくはなかつた。たゞ意志の力で自覺のまゝ生から脫れようとするやうに、細い眉毛は愈々執念く縮んで來た。

ネルリは總てを冷靜に判斷した。彼女の手には連發短銃が無かつた。綠色の水底は何故か好ましくなかつた。彼女は毒藥自殺を決心した。そして長たらしい苦悶の醜態なしに死ねる劇藥を手に入れる事ばかり考へてゐた。彼女には此の決心が簡單な、そして避け難い事のやうに思はれた。彼女は少しもこれを疑はなかつた。ネルリはドクトル・アルノリヂイに手紙を書いて、二人きりで會へる時間の指定を乞うた。ドクトルは患家を廻るので忙しいから、今晩の十時に寄つて呉れといふ返事をよこした。ネルリは老醫師の藥棚の埃だらけな壜や壺の間に、劇藥の壜が置かれてある事を知つてゐた。そして放心した老醫師が氣のつかぬ間に、その壜を盜み取るのは容易い事と思つてゐた。

もう八時である。ネルリは靜かに指定された時間の來るのを待つてゐた。

彼女は洋机掛に肘をついたまゝ、身動きもせずに腰掛けてゐた。そして眼の黑い 眉毛の

びく〳〵動く蒼白い顔の顎に、掌を當てゝゐた。彼女はげつそり痩せた。きつと結んだ脣には、濕氣が無かつた。眼は威嚇するやうに動かない。ネルリは何にも考へてはゐなかつた。たゞ思ひ出の蒼白い斷片が彼女の眼前に閃いては、跡方もなく消えて行くばかりである。彼女は殘り惜しくもなかつた。怖ろしくも悲しくもなかつた。胸の中は全く空虛で眞暗である。アルブーゾフの事を思ひ出すと、彼女の眉毛は一入縮んだが、眼付ばかりは相變らず强かつた。彼女は萬事がもう永遠に終つた事と思つて、追憶に耽らうとはしなかつた。

けれども入口階段に重々しい足音が聞えた時、彼女は戰慄して、眞蒼になつて、洋机から蹌踉いて了つた。恰も彼の訪問を、とうから知つてゐて、そればかりを氣遣つてゐたやうである。

アルブーゾフは入つて來た。そしてネルリの方も見ないで、扉口の處に止つた。

近頃彼の樣子は怖ろしく變つてきた。淺黑い美しい顏は憔悴れて、病床から起きたばかりの人間のやうに黃色かつた。燃えるやうな黑い眼は、疑深く周圍を見廻すやうに鋭い處がある。彼は久しく剃刀を當てぬと見えて、黑い小さな髯が憔悴れた顏を蔽うてゐる。

『また來たよ……待つてはゐなかつたかい？』彼は不明瞭な嗄れ聲で言つた。併し帽子を脫つただけで、近づいて來ようとはしなかつた。彼は兩腕を垂れ、眞黑な蓬髮の頭を俯向けたまゝ立つてゐた。

ネルリは洋机を背後にして、兩腕でそれに凭れかゝつてゐた。そして一分間ばかりは默然と彼の方を見てゐた。

彼女は此の時感じた事を自分でも說明出來なかつた。彼のやつて來たのが不思議で堪らない。彼女は怖ろしい、殆んど狂氣のやうな歡喜に捉はれて了つた。併し同じ瞬間に自分の決心が鈍つた事には氣がつかなかつた。そしてドクトル・アルノリヂイを訪問する時間が遲れはすまいかと思つて、柱時計を覗きさへした。これは死刑を宣告された人が、もう永遠に會へない愛人と最後の會見を許された時に經驗する感情である。

彼女は熱病患者のやうな男の眼や、見なれぬ髯や、憔悴れ果てた、限りなく愛しい顏を、長いあひだ貪るやうに見詰めてゐた。そして同じ瞬間に、內部の神祕的な力で、此の二三日に男が經驗した事を悉く了解した。彼とミハイロフの間に起つた事件は痛いほど判然として來た。彼女は絕望的な憐憫に身震ひした。

『ゾーリャー　ゾーリャー』彼女は悲しげに叫んで、男を迎へるやうに二三歩進み出た。そして腕を差し延べた。

アルブーゾフは喫驚したやうに彼女の顏を見て、其の眼が涙と愛と憐れみに溢れてゐるの

を知つた。彼は帽子を投げ捨てゝ、自分の腕に倒れかゝつて來たネルリをしつかりと抱き締めて了つた。

『ゾーリャー』彼女は低く呟いて、しなやかな細い腕で痙攣的に男の頸を抱へながら、肩のあたりに顏を隱して了つた。

不圖彼女は男の逞ましい腕が自分を抱き上げてゐるのに氣がついた。

嫉妬、憎惡、絶望、怖ろしい夜の惡夢、耳もとに執拗く響いてゐる兎のやうな叫聲——アルブーゾフが經驗して來た有らゆるものは、忽ちにして消えた。歡喜と情慾と愛情の中に融解してしまつた。彼は子供でもあやすやうにネルリを抱いて歩いた。胸や腕や膝に接吻した。そして狂人のやうにそれを繰り返した。

『ネルリチカ……私のネルリチカ！』

ネルリは身長が殆んど彼より高い位だつた。彼はネルリを腕に支へてゐにくかつた。その恰好はかなり滑稽なものだつたが、アルブーゾフはそれにも氣がつかない。

『私のものになつて下すつたんですか？　ほんたうに私の……可哀さうな、私の可愛い……』ネルリは彼の耳もとで囁いた。そして男の顏に、燃えるやうな氣息をかけた。髮と膚の匂ひをかぐと、アルブーゾフは幸福の餘り發狂したやうに、愈々かたく彼女を抱き締めたの

欠

『いや、ほんたうに行かなければならない！』アルブーゾフは遮つた。彼は愈々深淵に落ちていつた。

恐らく此度は、彼の聲にも哀傷や嫌惡や苦惱が判然と響いたのだらう。ネルリは死んだ蛇のやうに男の肩から垂れた腕を徐ろにはなした。驚愕と狼狽の色を浮べた彼女の黑い眼は、彼の魂を眞面に見詰めた。

アルブーゾフは此の眼光の重みに項垂れて了つた。頭腦の中には霧のやうなものがあつた。耳は鳴つた。そして其の耳鳴りのうちに、ふたゝび兎のやうな叫聲が遠く聞えるやうに思はれる。

『ゾーリャ！』自分の頭腦を掠めた考へに驚いたやうに、ネルリは低い聲で不明瞭に言つた。

彼は彼女の視線を避けて、惱ましさうに蹌踉いた。

『いや、ほんたうだよ……行かなければ困るんだから！』

彼女は何事かを喜んでゐるやうだつた。彼女の顏は暫く明るくなつた。

『可愛い……もう行つてもよう御座んす……行つて被往い！』

『いや、ほんたうなんだよ……都合が惡いんだから……私はその……そのうちまた來るよ！』彼は呟いた。此の思はず口を滑らした最後の言葉のために、彼の胸にあつた有らゆる

欠

ものは消えて了つた。

『もうお仕舞ひだ！』彼の頭腦にはこんな聲が響いた。アルブーゾフは、足下の床が何處か下の方へ下つて行くやうな氣がした。

『何です……そのうち？』ネルリは一歩々々退きながら、狼狽したやうに訊き返した。

顏全體と思はれるやうな彼女の大きな眼は、怖ろしさうに彼の顏を見詰めてゐた。彼の心を愈々深く見透してゐる事は明かである。

アルブーゾフは絶望のあまり、ほとんど聲をあげないばかりにして、無我夢中に立ちあがつた。

『何うしたと言ふんだ？　私はほんたうに行かなければ不可ないんだ……變な女だなア！』彼は思はず心にも無いことを言つてしまつた。突然、彼の聲は泥醉した行商人のやうに荒々しくなつた。

實際これは最後の幕だつた。ネルリは直感に光つた眼を愈々凄く見開いて、自分の頭を抱きかゝへた。そして枕に顏を埋めて了つた。

アルブーゾフは彼女の方へ跳んで行かうとして、行くことが出來なかつた。彼は暫く愚かしい微笑を浮べながら、彼女の傍で足踏みしてゐた。彼は自分でも自分の醜い澁面を意識して、愚かしく腕を振つた。

彼は周圍を見廻して、片方の眼を顰めながら笑つた。そして急に扉外へ跳び出して行つた。

二十九

星は出てゐたが、眞暗な夜だつた。空では不可思議な明るい模樣の中に撒き散らされた無數の星群が煌々と閃いてゐるが、地上の有らゆるものは眞黑で、密集した一つの塊の中に融け合つてゐた。

アルブーゾフは漸く自分の三頭馬車を見出した。

長いあひだ待ち草臥れてゐた馭者は、馭者臺から降りて、卷煙草を喫つてゐた。それは暗闇の中に光つて、彼の鼻と、赤い髭と、厚い脣を照らしてゐる。

アルブーゾフは馬車の方へ近づいた。

『誰方です？　ザーハル・マキシムヴィッチ、貴方ですか？』馭者は跳び上つて、卷煙草を投げ捨てながら訊いた。『お乘りになりますか？』

アルブーゾフは返事もせずに、彼の傍を通つて、素早く馬車に跳び乘ると、ぶる〳〵其處

で身震ひをした。彼は平生のやうに、今夜も帽子を忘れて來た。そして少しもそれには氣がつかなかつた。

馭者も幾らか驚いたが、問を發すべき場合でないと思つたのか、ゆつたりと馭者臺に昇つて手綱をとつた。そして馬に鞭を加へた。鈴は騒がしく闇の中に鳴つた。

アルブーゾフは默つてゐた。

『ザーハル・マキシムヴィッチ！　何處へやります？』馭者は自分の席から振り返つて訊いた。

返事はなかつた。アルブーゾフの黑い姿は馬車の隅に朦朧としてゐる。

『何處へやります？』馭者は喫驚して繰り返した。

『何處でも勝手な方へやれ！』アルブーゾフは物狂ほしく叫んだ。

馭者は此の狂人じみた叫聲に身震ひした。彼は手綱を落さぬばかりにして、狼狽へながら馬を鞭うつた。

アルブーゾフは轉げさうになつた。土砂が彼の顏に當つた。周圍では何か音を立てたり、唸つたりしてゐるものがある。家屋や垣根や樹木が飛んで行く。

街角の處で苦しい唸り聲をあげた者がある。馬車は激しく搖れた。併し馬はもう止まる事が出來なかつた。死人のやうに蒼褪めた馭者は、帽子も飛ばして了つて、アルブーゾフの

方へ轉げ落ちぬばかりに、空しく延びきつた手綱を手繰らうとしたが、闇の中では何うにも勝手が分らない。彼はたゞ道路の眞中に三頭馬車を止めることと、柱に衝突せぬことばかりを考へてゐた。

アルブーゾフは何にも識らなかつた。彼は身體を屈め、眼を閉ざしながら、座を構へて、前後左右に搖られる事や、風が彼の氣息を詰らし、物狂ほしく頭髪を搖らうとしてゐるのは意識してゐたものの、矢張り無我の狀態から醒める事は出來なかつた。

たゞ赤裸々の事實として、一つの怖ろしい考へばかりは判然としてゐた。或る一點へ向つての不可解な唯一の熱望は、彼の全生涯と共に突然たわいもなく破壞して、落下してしまつたのだ。

兎のやうな叫聲は彼の耳もとで間斷なしに訴へる。眼の前では、ネルリの絶望的な眼が次第次第に擴がつて、眞黑な地面や天空に煌めく星群の模樣とともに、物騒がしい闇の夜を閉ざして行く。

彼は何が起つたのだか解らなかつた。ネルリは今時分自殺してゐるだらう、自分は自分を破滅させると同時に、ネルリをも破滅させて了つた、そして自分は彼女とミハイロフの最後の重みに堪へられない——彼の知つてゐたのはそれ位のものであつた。

彼は闇の中で、頭髪を搖り、眼を眩まし、氣息を詰らせる烈風と等しく、本能的な恐怖の情にも捉はれてゐた。

彼は馬を止め、馬車から往來に降り、路傍へ退いて、一思ひに頭を射貫かうかとも思つた。併し彼はそれをし果す事が出來なかつた。そしてそれと同時に、今まで通り生き殘つて、自分は何時までも性格を破産したアルブーソフでありたいと思ふ事も出來なかつた。

『止めろ！』彼は鋭い聲で叫んだ。

三頭馬車はもう郊外へ來てゐた。そして合目といふ合目をばり〳〵鳴らしながら、夜と闇をめがけて、大通りを全速力に走つて行つた。

恐らく、彼の叫聲は異常なものだつただらう。それまで一分間ばかり馬を止める事も出來ないで、半ば意識を失つたやうになつてゐた馭者は、馬が棒立ちに止つたほど、出所も分らぬ力で手綱を引き締めた。アルブーソフは馭者臺の上に投げ出された。馭者は馬の後方に投げ落された。

鈴はまだ依然として鳴つてゐた。挽革に繋れた馬が暗闇の中で鼻嵐を吹いてゐる。

『右へ曲るんだ……修道院へ！』アルブーソフは絶望的に叫んだ。

手を血塗れにし、脣を引き裂かれた馭者は、馬の後方から漸く起き上つて、馭者臺に上る

足場を見出した。彼は恐怖に我を忘れて、再び全速力に馬を走らした。

『正氣で決心したんだらうか！』口にこそ出さぬが、彼はアルブーソフの事を怖ろしさうに考へてゐた。

滑らかな暗い曠原は見る〳〵うちに過ぎて行く。畔道が微かに閃く。風は耳もとで單調に鳴る。有らゆるものが巨人の輪のやうに後方へ去る。煌めく星ばかりは永遠の模樣のやうに、一つ處で身動きもせずに光つてゐた。

三十

雨は絶間ない急流のやうに降つてゐた。雨に濡れた見窄らしい街は、濕つぽく濁つた秋の光りの中に、蒼白く融けながら、朦朧と浮んでゐる。

濕つた黄葉の飛び散つた公園は、がらんとしてうすら寒かつた。道路には水溜りが光つてゐる。板の朽ち壞れた歩道に添うて、濁つた水が物狂ほしく流れてゐる。曠原は雨の向ッに沈んで、その後方には何物も存在してゐないやうに思はれる。街は何故か此の世界にたゞひとり殘されて、最後の悲しい日を送つてゐるのだらう。

チーシュは外套の襟を立てゝ、雨水を上靴ではねかしながら、大通りを歩いて行つた。彼

の光つた顔は蒼褪めて、悲しい涙を流したやうに濡れてゐた。彼の小さな姿は濁つた雨の掛布の中に寂しく見えてゐた。四邊はがらんとしてゐる。生を有するものは悉く姿を隱してゐるのに、彼はひとり忙しさうに歩いてゐるのだ。彼は今日ほど痛切に自分の孤獨を感じた事はなかつた。

『黑雲が走る……』小さな大學生は無意識にこんな事を考へた。『雨が降つてゐる……何百萬年たつたところで、矢張り雲が動いたり、雨が降つたりするのだらう……上靴を修繕しなければ不可ない……早く此處から逃げなければ不可ない……愚圖々々してゐると自分も此處で絶體絶命になつて了ふ！　或はもう行き詰つてゐるのかも知れない！　畜生！　此處の生活は何んだ！　ペテルブルグに行きたいなア……今時分は劇場や大學が……矢張り雨が降つてゐるだらうか？』

彼は長い寒いニェフスキイ大通りや、看板や、濡れた馭者や、雨に光つた敷石や、立ち連つた家屋を思ひ出した。ニェヴァの濁流はゆるやかに流れる。小舟がゆく。要塞の尖閣が霧の中に見える。要塞の中には他の生活を夢想した人々が監禁されてゐる……彼等は小さな監房の中を歩き廻つたり、小さな窓の外を覗いたりして、泣き出しさうな空を鐵柵ごしに見てゐる事だらう。此の陰鬱な街の、濡れた花園や屋根の上にあるやうな灰色の空を見詰めてゐる事だらう。

『畜生！　厭になつて了ふ！　上靴は修繕しなければならないし……錢さへあれば何時でもする……さうでもしなければ大變だ！　肺炎に罹つて了ふ！　併しそれもいゝさ！　泥濘や黑雲や雨も見なければ、上靴の事を考へないでゐられるなら、一思ひに死んで了ひたい！生は流れてゆく……要するに同じ事ぢやないか！　俱樂部に寄つてみよう！』

るかも知れない……太陽も海もあるものか！

チーシュは街角を曲り、廣場の泥濘を通つて、泥足で踏み荒された俱樂部の入口階段を昇つて行つた。門衛には誰もゐなかつた。けれども帽子掛にはドクトル・アルノリヂイの見なれた帽子が懸つてゐる。これを見た時チーシュは嬉しいと同時に悲しかつた。併し自分一人きりなのよりはいゝ。彼は幾度となく來たのであるが、何時も此處はがらんとして、退屈な老人の帽子ばかりが懸つてゐた。

窓硝子は曇つてゐた。そして雨水が斜めに忙しく流れてゐた。廣間には綠色の骨牌札が開かれてあるが、濕つぽい光りの中ではそれさへも濡れてゐるやうに思はれる。

ドクトル・アルノリヂイは酒場に腰掛けてゐた。彼の前には火酒の壜が置いてあつて、耳の後方には、ナプキンのはじが猪の耳のやうに動いてゐる。彼の顏はぐつたりと胸に垂れ

て、濁つた眼は如何にも陰鬱である。彼の前にはまだ匙をつけないスープの皿が冷たくなつてゐた。

『ドクトル！　今日は！』小さな大學生は言つた。そして幾度これを口にしたことだらうと思つた。

ドクトル・アルノリヂイは嗄れ聲で何か呟いた。そして火酒の方に眼くばせをした。

『貰ひませう……魂まで濕つて了ひましたよ！』チーシュは氣難かしさうに顔を顰めて、待ちきれぬやうに杯をとり上げた。そしてドクトル・アルノリヂイの輕く顫へる太い腕の下で、白い液體が硝子の杯に溢れて來るのを見てゐた。

『實に、不愉快な天氣ですね！』小さな大學生は言つた。そしてドクトルとプロジットすると、一息にそれを飲み干して、心から不快さうに顔を顰めた。

『さうですなア！』ドクトル・アルノリヂイは嗄れ聲で言つた。

『退屈ですね！』

ドクトルは默つてゐた。

『ドクトル！　貴方には實に驚きますね……貴方は係累もないし、生活上の不自由もないんだから……』チーシュはもうドクトルに話した事のあるのを思ひ出して言葉を切つた。

ドクトル・アルノリヂイは片方の眼を顰めたやうだつた。しかし何にも口に出しはしなかつた。

チーシュは溜息を吐いて、執拗く降り續く雨の掛布の中に搖めいてゐる消防署の廣い宅地を見はじめた。柱の上の半鐘は濕つぽく光つて、撚れた綱は縊死者を、たつた今外したやうに下つてゐる。チーシュは顔を反向けて了つた。彼は何故か墓地や墓石や雨に濡れた黃葉を思ひ出した……今頃は屹度雨に憔悴してゐる事だらう。

『實に此處は不快だ！』彼は獨白を言つた。

肥大なドクトルにも此度は彼の氣持が通じたらしい。

『さう、不快ですなア……』彼は言つた。

『何から何まで莫迦げてゐる！』チーシュは無意識に火酒を注ぎながら、言葉を續けた。『ドクトル！　何う思ひます？　ミハイロフが自殺しようとしてゐた事を、アルブーゾフは知つてゐたんでせうか？』

ドクトルは直ぐには答へなかつた。

『知つてゐたでせう。』彼は力なく言つて、自分の杯を手にとつた。

『何うしたと言ふんでせう？　友達ぢやありませんか……嫉妬なんですかね？』

『分りませんなア！』
『今アルブーゾフは何處にゐるんです？』
『知りませんなア！』
『あの……何と言つたかなア……さう、さうネルリ……自殺りかけたさうですね……』
『聞きませんなア！』ドクトル・アルノリヂイは遮つた。
二人は杯を干した。
チーシュは何か訊いて見たかつた。ミハイロフの事も話したかつたし、自分の哀傷に就いても話して見たかつた。彼は事件の迷宮に入つたので途方に暮れた。そして霧にでも包まれてゐるやうな氣がした。併し平生の言葉を繰り返したくはない。幾ら獻欲しても反抗しても、死んだ人間を救ふことは出來ない。幾度考へても要するに無意義である。舌は急に廻らなくなつたやうだ。
『何うです！　飲みませんか？』チーシュは無意識に訊いた。
火酒は壜の中にもう殘つてゐなかつた。ドクトル・アルノリヂイは物思はしげに酒壜を振つて、明りに透して見たが、軈てそれを側に置いて、酒場の方へ共濟組合員のやうな手眞似をした。

『さう……』彼は新規の酒を注ぎながら言つた。
『さうとは何です？』小さな大學生は問うた。
ドクトル・アルノリヂイは說明しなかつた。
小さな大學生は激しい哀傷に捉はれた。彼は何事にも昂奮する事が出來ないのを感じた。幾ら熱しても、騷いでも、爭つても、すべては灰色の空しい沈默に過ぎないのだ。
『ドクトル！　貴方と二人きりになりましたね。』彼は杯に酒を注いで、それを自分の前に置きながら言つた。『此處にみんなが集つたのも餘程前のやうな氣がしますね……酒を飲んだり、騷いだり、昂奮したり、口論したり……ナウーモフは哲學を振り廻すし……エヴゲニヤ・サモイロヴナ……ミハイロフと……それからクラウゼ……ツレーネフも氣の毒な……思ひがけませんでしたね……あの呪はれた女が惡いんだ！』
『女が惡い譯でもありますまい！』ドクトル・アルノリヂイは唐突に言つた。
チーシュは反駁しようとした。けれども何故か機會を逸して了つた。
『森然として來ましたね！　まるで風に吹き浚はれたやうだ！　ドクトル！　貴方は孤獨を怖れませんか？』
『いゝえ……』ドクトル・アルノリヂイは彼に杯を進めながら平然と答へた。

チーシュは無意識に杯をとつて、それを口に近づけた。
『貴方は何う思ひます？』彼は空になつた杯を洋机の上に置いて、身體を屈めながら言葉を續けた。『要するに此度の事件の罪はナウーモフにあるんですか？　それとも偶然の出來事なんですか？』
『そんな事が分るもんですか！』ドクトル・アルノリヂイは冷やかに答へた。
『併し貴方は何う思ふんです？』
『私は何うも思ひません。』
チーシュは頰の弛んだ彼の憔悴れた顏を見て、老俳優のやうに髭を落した脣が微かに顫へてゐるのを識つた。彼の胸は何物かに痛々しく抉られたらしい。
『ドクトル！　貴方はほんたうに變ですね！』
『私は何時もかうです。』
『貴方は誰よりもあの狂技師の哲學に同感らしいですね！』小さな大學生は、嚙みつくやうに言つた。
ドクトルは小さな眼で彼の方を見て、不得要領に瞬きをした。
チーシュは暫く考へた。

『ナウーモフ主義者か！』彼は漠然と言つた。『科學や藝術の有らゆる價値を失つて、最後の一線にまで行き詰つた現在の社會にとつたら、あの男の說も眞理でせうさ。有らゆる歡樂を奪はれた社會が、「此の先き何うしよう？」といふ問題に到達すべきは當然な話です。それがナウーモフの理想によつて解決される……私もそれは認めますが……』
チーシュは活氣を帶びて來た。彼の冠毛は勝ち誇るやうに逆立つた。
『併し我々は未來の人道に眞黑な死のヴェールを投げ掛ける權利を有たない。生活の舞臺には勞働階級の人々が躍り出る。その旗には「全人類の幸福」といふ標語が誌されてある。新しい科學や新しい藝術が起る……彼等の胸は勇敢な美はしい生活の渴に充たされてゐる。ナウーモフなどには用がありません。彼等の心は空虛でない。ナウーモフの道德などを認めるもんですか。あの男の道德は飽食し疲勞した放埒な時勢の所產です。彼等は……』
チーシュの眼は輝いた。彼の頰には紅が潮した。
ドクトル・アルノリヂイは溜息を洩らした。
『彼等も自分の順番が來たら飽食しませうさ！』彼は力なく言つた。
チーシュは嘲笑した。
『貴方は怖ろしい厭世主義者ですね！　實際の話、ナウーモフより激い！』彼は叫んだ。

『或はさうかも知れません。』
『ドクトル！　そんなら何故自殺しないです？』小さな大學生は嘲弄するやうに訊いた。
ドクトルは何の表情もない小さな眼を、再び彼の方へ向けた。そして暫くは默然と彼の顏を見て居た。
『何のために自殺するんです？　私はとうから死んでゐる！』彼は低い聲で言葉すくなく答へた。
チーシュは戦慄した。彼の胸には不可解な惡寒がさして來た。暫くは自分が腰を掛けて、屍のやうな人間と話してゐる事も、夢のやうに思はれてならなかつた。
『ドクトル！　貴方は何を言はうといふんです？』彼は震へ聲で訊いた。
ドクトルは口を噤んでゐた。
『貴方は聽いてゐないんですか？　私は訊いてゐるんですよ、貴方は何を……』
ドクトルは狡るさうに瞬きをした。
『ドクトル！　氣が狂つたんですか。ドクトルつて言へば！』チーシュは急に甲走つた聲で叫んだ。
ドクトルはもう嘲弄の色も隱さずに、片方の眼を顰めた。軈て彼は太い腕を延ばして、二

つの杯に酒を充たした。
『飲みませんか？』彼は言つた。

三十一

街は眞暗だつた。そして間斷なしに風が吹いてゐた。
肥大なドクトル・アルノリヂイと小さな大學生のチーシュは、腕を組んで、雨に濡れた大通りの板道を歩いて行つた。チーシュは泥濘つた板に滑つて、腕を振り廻しながら叫んだ。
『ドクトル！　貴方は死人だ！　それつきりの人間さ！　貴方は死人の意味を知つてゐるか？　僕は貴方を愛してゐる。併し何と言つても死人だなア！』
『いゝです、いゝですさ！』ドクトル・アルノリヂイは彼の腕を抱へながら無關心に答へた。
『僕は眞正直に言ふよ。僕は非常に貴方を愛してゐる……貴方を愛してゐることを信じますかね？』
『信じますよ、信じ……』
『ドクトル！　此處は怖ろしい街だ！　死人の街ですぜ！　ドクトル！　僕はよくかう思ふね……たゞそんな氣がするだけだけれど……これは街ぢやなくつて、一つの幻影だ！　喰つ

たり、飲んだり、寢たりするだけのために、何千人といふ人間がこんな穴藏に生活してゐられますかよ？　まるで惡夢だなア！　まア、見て御覽なさいな！　闇に雨に泥濘に……往來には活氣がないし……見なさいつたら！　これが人間の街だ、此處には人間が生活してゐると言はれて信じられますかよ？　生きた人間がゐる？　所謂人道がありますかね？　僕と貴方ですか？　そりや我々は理解があるさ……だが他の奴等はどんなものです？　奴等は何の爲めに生きてゐるんだらう？　此の街が全く無くなつたと思つて御覽なさい……めちや〳〵に崩れてさ、雨に洗はれて、糞の塊のやうに……川に流されたつて……此の世界に變りはないね……こんな呪はれた沼が消えた事に氣のつく奴もありやしない！　何ういふ意味だつた？　官吏だつて、商人だつて、貧民だつて、士官だつて……あんな商人や貧民や士官や官吏なら、何處の街へ行つたつて……同じやうな奴があるさ！　原本が出鱈目なのに、何百萬の寫本が……莫迦にしてゐやがる！　今露西亞で起つたことは露西亞だけの出來事さ！　さもなければ一つの縣だけの出來事さ！　幾百といふ他の街でも矢張り雨が降つてゐるかも知れない……眞暗で、風が吹いて、路は泥濘つて、他のドクトル・アルノリヂイと大學生のチーシュが歩いて……全く同じ人間が……無益なドクトル・アルノリヂイと、大學生のチーシュがさ！　ドクトル！　貴方は癪に障らないかなア？　絶望しないかなア？』

『そんな事もありませんね……』ドクトル・アルノリヂイは答へた。彼は辛くもチーシュを支へてゐた。

『ちつとも癪に障らない！　貴方は死人だよ！　死人に過ぎないといふ事を自覺すべきだ！』

『それは貴方に話した……』

『話したのが何さ……さう感じるかつて訊くのさ！　ドクトル！　貴方は生きながら腐敗してゆくやうな氣がしないかなア？　我々はみんな生きながら腐敗してゆくんだ！　もう墓に入る時さ！　ドクトル！　何故つて、もうぷん〳〵匂つてゐる……解るかね、ぷん〳〵匂ひがするんだ！』

『もう墓に入る時ですね。』ドクトル・アルノリヂイは機械的に答へた。

『ドクトル！　貴方の生きてゐられる譯が解らない。それは死ですぜ！』

『死ですとも。』

『こいつはナウーモフより一歩進んでゐる……彼奴は撲滅にせよ何にせよ信じてゐるんだけれど、貴方は何も信じないなア！　ドクトル！　何か信じてゐるものがありますかね？』

『信じてゐますよ。』

『何をさ？』
『何でも……』
『といふと？　何でも信じないのかしら、何でも信じるのかしら？』
『行きませう、さア、行きませうよ！』ドクトルは遮つた。
『いや、待つて貰はう……何か信じるんですかよ？　貴方だつて空席ぢやあるまい！』
ドクトルは溜息を洩らして、小さな眼で悲しげに周圍を見廻した。
『空席かも知れない……』彼は疲勞しきつたやうな聲で答へた。
チーシュは笑ひ出した。
『ドクトル！　こいつは大出來だ！　じ……じ……じぶんを空席とお……　おもつて、それでお……お……　おちついてゐる所まで行つた人間はあるまい……併しそれで何うなるんだ？空席と思ふ事に異議はないさ……だがそれから先きは？』
『私には解りません……』肥大なドクトル・アルノリヂイは答へた。彼はチーシュの腕をしつかりと抱へた。
小さな大學生は二歩ばかり行くと、腕を振りほどいて、危く轉げさうになつた。彼は足もとを定めて、濡れた垣根に背中を凭せかけて了つた。

彼は悲しさうな不快さうな顏をしてゐた。髭は濡れてゐた。濕つた外套は風に音を立てゐた。顏は雨に濡れて、白と赤の斑點で蔽はれてゐた。そして眼は彎つてゐた。
『私には解りませんか……私には解りませんとは何の事さ？　誰にだつて意見はある……意見のない人間が生きてゐられるものか！』
『生きてゐられない事はない……みんな生きてゐるぢやありませんか。』ドクトルは冷やかに遮つた。
『生きてゐる？　生きてゐるんぢやない、惡臭を放つてゐるんだ！　莫迦らしい！　空氣を汚すばかりだ！　貴方の傍で生きた人間が氣息を喘ませてゐる！　ドクトル！　僕は此處で死ぬ！　これが生と言はれようか？』ドクトルの腕に縋つて、小さな大學生は泣聲で言つた。『これを生だと言ふ者はあるまい！　ドクトル！　金もない、煙草もない……こんなに酔つぱらつて……もうお仕舞ひだ……僕は死ぬやうな氣がしてならない！』
『何うしたと言ふんです！』ドクトルは勵ましした。
二人は狹い板道を滑りながら、闇の中で蹌踉いてゐた。風は荒れ狂うてゐた。曲りくねつた枝を八方に振り翳した眞黑な樹木や、濡れた屋根の上では、黑雲が渦卷のやうに疾走してゐる。チーシュは絶えず泥濘に足を踏み外した。曲り角の處で彼はまた轉げさうになつた。

ドクトルは漸くにして彼を支へた。そして小さな大學生を垣根に凭せ掛けると、泥濘の中に落ちた帽子を拾つて、泥を拭つてから、彼の濡れた頭に斜めに被せた。併しチーシュはそれさへ識らなかつた。

『けれども、僕には矢張り信念があるね！』彼は徒らに垣根から離れようと焦りながら叫んだ。『僕は死んでもいゝ……此處で死んでもいゝ……、へゞれけに飲んだくれても、僕は矢張り信じてゐるね！　ドクトル！　僕は信じる！　どんな事があつても僕は信じる！　ドクトル！　僕は人道を信じる！　民衆を信じる！　か……か……下層社會を信じる！　勞働者よ！　立て！』小さな大學生は調子外れな聲で叫んだ。『ドクトル！　未來は民衆のものだ！　僕は貧民さ！　ドクトル！　僕は……何人にも不必要な貧しき乞食のチーシュは……　此のチーシュは信じてゐる！　固く信じてゐる！　古き世界を燒き拂ひ……　ドクトル！　歌はう！　古き世界を燒き拂ひ……ドクトル！　歌はうつたら！』

『行きませう！　もう寢た方がいゝ！』ドクトル・アルノリヂイは彼を連れ去らうとした。

『何處へ行くのさ？』

『家へ！』

『家だつて？　ドクトル！　僕にや家なんてありやしない！　古き世界を燒き拂ひ、その灰屑を拂ひのけ……けれども僕は矢張り貴方を……』

眼に見えぬ合唱隊でも指揮するやうに、チーシュはドクトルの腕から跳び出すと、怪しげな足踏みをやりながら、遂に兩足を踏み外して、泥濘の中に坐り込んで了つた。

ドクトル・アルノリヂイはやうやうの事で彼を起して、すつかり泥だらけになつた帽子を再び彼の頭に被せてやつた。

『さア、行きませう！』

チーシュは醉が醒めたやうに眼を見張つて、ぢつと默り込んで了つた。そしてドクトルが餘り上の方に腕を組んでゐるので、幾らか横向きになつて、喘ぎ喘ぎ足を運んだ。

『莫迦に醉つぱらつてしまつた！』暫くしてから彼は、人が善ささうに哀れげに言つた。『唾を吐きかけられてもいゝ！　死ぬんなら、歌ひながら死にたい！　ドクトル！　もつともでせう？』

『もつともです！』ドクトル・アルノリヂイは疲れきつたやうな聲で同意した。

『何故つて、何うで同じ事だ……ドクトル！　同じ事だ！　これでも生活だらうか？　これでも僕は人間だらうか？　ドクトル！　僕はもう死んで了ふ……もうお仕舞ひだ！』

チーシュは急に泣き出した。そして蹌踉いたり、足を踏み外したり、腕を振りまはしたり

した。

三十二

翌日彼は遲く眠を覺ました。

部屋の中は灰色で濕つぽくて寒かつた。暗い寒い日で、鉛色の空は低かつた。

小さな大學生は頭痛がした。舌は棒のやうだつた。手足は衰弱のために震へて、胸の中には拭ふ事の出來ぬ羞恥の自覺が蟠つてゐた。

彼は昨日の出來事を思ひ出さうとしたが出來なかつた。

最初彼はドクトル・アルノリヂイと、人氣のない倶樂部の薄暗い食堂に坐つて、酒を飲んだり話したりした。そして此の時までは全く正氣のやうだつた。暫くすると急に黃色い火が點つて、大勢人がやつて來た。顏は一々覺えてゐないが、何でもチーシュを愛し同情してゐる連中だつた。彼は誰かとプロジットして接吻した。鰛魚と火酒の匂ひのする濡れた頰鬚のことが記憶に殘つてゐる。それから口論になつて、彼は誰かに決鬪を申し込んだ。誰かが彼の胸を抑へた。けれども彼はそれを振りほどいて大聲をあげた……それから暫くの間は眞暗な穴に落ち込んでしまつたが、驚て彼は再びドクトル・アルノリヂイと腕を組んで往來

を歩いてゐた。彼は唄を歌つた。ドクトルに愛を說いた。接吻しようとした。轉がつて泣き出した……

併しチーシュの記憶に殘つてゐる最も怖ろしい事は、彼が會計管理人と親しく杯を交はして、いざといふ時には職を拋つて、群衆の先頭に立つ事を約束させた一事である。會計管理人は何でも彼と腕を組んで、何もかも承諾して、しきりに家へ歸る事を勸めたらしい。

これは醜態であつた。愚かしい事だつた。情ない事だつた。チーシュには街中の人がその噂をしてゐるやうに思はれてならなかつた。彼は些細な事だ、酒ではもつと醜態を演ずる者もある、二三日すれば忘れられてしまふだらう、と思つて胸を落著けた。けれども羞恥と嫌惡の情には堪へられなかつた。

洋机の上には二通の手紙が來てゐた。彼は封を開いて、讀まうとした。けれども文字はちら〳〵して、彼の眼前に躍つてゐる。顳顬を刺すやうな頭痛と嘔氣は、彼が手紙を投げ出して、ぐつたりと安樂椅子の上に轉がつたほど激しいものだつた。と、安樂椅子はそろり〳〵と下の方へ下つてゆく。壁は後の方で動く。天井は一つ處でぐる〳〵廻る……

チーシュは頭を抱へながら起き上つて、窓際に腰を下した。彼は頭痛と嘔氣と哀傷に身の置場がなかつた。彼は相手のない憎惡に捉はれて、頭を床に叩きつけたいやうな氣がした。

けれども身體を動かすたびに顳顬はづき〳〵痛んで、眼はそれがために眩んで了ふ。小さな大學生は不本意ながら身動きをすまいとした。そして氣息さへも殺してゐた。

『ふう……もう一生酒なんか飲むもんか！』彼は絶望的にこんな事を考へた。

氣難かしい下女が來て、沸つたサマワールを置いていつた。熱い湯氣の渦は天井へ柱のやうに昇つた。それが爲めに一層氣持が惡くなつた。頭痛は激くなつて、不氣味な嘔氣は喉まで迫つて來た。

『何うしたと言ふんだらう！』チーシュは顳顬を兩手で抑へながら苦しさうに呟いた。

彼は自分が全く孤獨で、人々から見捨てられ、忘れられて了つたやうな氣がした。彼は誰かやつて來て、自分を憐れんで呉れゝばいゝがと思つた。彼は何うにか茶を沸かした。熱い苦い液體は幾らか彼を樂にさせたやうだつた——少くとも口の中の不快な酸味だけは消した——けれども胸は間もなく重苦しくなつてきた。

『ふう、何うしたと言ふんだらう！』チーシュは涙を流さぬばかりにして、絶望しきつたやうに頭を振つた。顳顬は聲をあげたいほど痛んだ。

彼は酸つぱいものでも飲んだら樂にならうと思つた。小さな大學生は壁を叩いた。

『アンナ・ワシーリエヴナ……レモンはありませんかね？　お願ひですから！』

『今持つて行きますよ。』

チーシュは主婦が壁の向うで歩いてゐるのや、戸棚の扉を開けたのや、皿の上でナイフの音をさせたのを耳にした。頭痛は愈々激しくなつて、時々は全くすてばちになつて了つた。何時まで待つてもレモンは來さうもない。彼は病的な苛立ちを覺えて泣きたくなつた。

主婦は漸く皿を持つて入つて來た。皿の上には黄色い大きなレモンが切られてあつた。

『今日は！　キリール・ヂミートリエヴィッチ！　レモンを持つて來ましたよ。』

『有難う！　だけれど何だつてそんなに澤山持つて來て下すつたんです？　僕は一片もあればよかつたんですよ！』

白粉をこて〳〵塗つた主婦の顔には狡るさうな微笑が浮んだ。顳はもう弛んで、額には縮毛が縺れてゐた。

『いゝえ、藥だと思つてお喰んなさい！　昨夜は一體何うしたんです……羞かしくもないんですか？』

『あれが羞かしい事なんですか？』チーシュは不自然な恰好をして、彼女の顔から視線を反らしながら遮つた。そして顳顬を抑へた。

『貴方は氣分が惡いんでせう？　頭痛がするんでせう？　可哀さうにね！』アンナ・ワシー

リエヴナは媚びるやうに言つた。『濕布をして上げませうか？』
『それには及びませんよ……かうしてゐりや治るんですから！』
『いけませんよ……すぐ持つて來て上げますよ！』
彼女は部屋著のリボンを動かして、大きな身體を振りながら、忙しさうに出て行つた。
チーシュはレモンの入つた茶を二杯ばかり飲んだ。彼は實際氣持がよくなつた。そして自分とても全然孤獨ではないといふ氣持が幾分か彼の心を溫めた。
『ほんたうは惡い女でもないんだ！』チーシュはこんな事を考へた。そして四十女の露骨な痴態に絶え間なく惱まされてゐる事は忘れて了つた。
主婦は直ぐに戻つて來た。彼女は酢に浸したタオルと火酒の小壜を持つて來た。
『これは何にするんです？』チーシュは言つた。彼は火酒を見ると全身を震はした。
『まア、まア、飲んで御覽なさい！　よく利きますよ。あたしの死んだ夫もよくやつたもんです。』
彼女は無理にもチーシュに飲ませようとした。小さな大學生は頭痛のために有らゆる意志を失つて、すつかり彼女の世話に從つてしまつた。そして彼女に看護されるのが快くさへあつた。彼は久しく愛撫とに親しんでゐなかつた。

杯を口に近づけた時、チーシュの全身には激しい痙攣が起つた。眼は暗くなつて、顏は綠色のものに蔽はれて了つた。
『何でもありませんよ！』アンナ・ワシーリエヴナは、彼を勵まして、彼の口の方へ杯をおしつけた。
チーシュは氣息が詰りさうになつた。けれども心地よい溫みは直ぐと腹に浸みて、疲勞のやうに全身に流れていつた。
『もう一杯……そうら！』
二杯目は、とても喉を通るまいと思つた。けれども火酒は不思議なくらゐ樂々と喉を流れた。頸へは止まつて、頸頸の痛みは鈍くなつたやうに思はれる。
『これでも厭ですか！　樂になつたでせう？』アンナ・ワシーリエヴナは氣遣はしさうに訊いた。もう彼女の態度には媚びるやうなところも見えなかつた。
チーシュは微笑を洩らした。
『えゝ、樂になりました！』
『それ御覽なさい……だから、これからは私の言ふ事を聽くんですよ！　身體が樂になつたら、此度は濕布をして上げませう。』

小さな大學生は狼狽した。

『下さい……僕は自分でしますから……』

『よう御座んすよ！　遠慮なんかしちゃ不可ませんー　そうら……』

チーシュは羞かしさうに笑ひながら、寢臺の上に横はつた。アンナ・ワシーリエヴナは彼の傍に腰掛けると、酢の匂ひのする冷たいタオルを置いて、小さな大學生の額を丁寧に兩手で撫でた。

彼女の圓々とした薔薇色の腕は、殆んど肉附きのいゝ肩のあたりまで、部屋著の廣い袖口の中に見えた。香水や白粉の匂ひがする。小さな大學生は愉快なやうな不快なやうな氣持になつた。

冷たい濕布で頭痛も輕くなつた。心地よい疲勞は全身に擴がつていつた。

アンナ・ワシーリエヴナは彼の傍に腰掛けて、時々氣遣はしさうにタオルを撫でた。チーシュは不自然に笑つて、思はずも彼女の廣い袖口を覗いた。其處には圓々とした腕の曲線があつて、腋の下のところには黑いものが朦朧と光つてゐた。

彼女は直ぐ傍に腰掛けてゐた。小さな大學生は、彼女の柔かい肉體の溫みを腰のあたりに感じた。

『何處であんなに飲つたんです？』經驗を積んだ中年の女が、自分に思召のある若い男と話す時のやうな口調で、彼女は叱るやうに訊いた。

『なアに……倶樂部へ寄つたんですよ……さうしたらドクトル・アルノリヂイがゐて……初めはちびり〳〵飲んでゐたんですが、後は何が何だか……』

『何うしてそんな無茶な事をするんですよ？』

『僕は退屈なんです！　アンナ・ワシーリエヴナ！』

『年中貴方は一人きりでゐるからですよ……たまには遊んで御覽なさいな……こんな事を言つて怒つちや厭ですよ。私は貴方のお母さん位のところですもの……』

『ほんたうに母のやうですよ。』小さな大學生は物好きさうに遮つた。彼の眼は再び露はな袖口を覗いた。

『莫迦な！　俺はつまらぬ事を言ふ！』彼は氣難かしさうに考へた。けれども妙に心地よい動搖を覺えた。『此の女だつてまだ捨てたもんぢやない。』

アンナ・ワシーリエヴナは笑つて、指先きで彼を嚇した。彼女は羞かしくなつたが、それと同時に厚かましい考へも起つた。

『むろんお母さん位のところですさ！』彼女は繰り返した。チーシュは彼女の溫かい、柔か

い、そして彈力のある腰が、自分の方へ重々しく寄り添うて來るのを感じた。『一度お酒の味を知ると、その次には……』

『貴方は僕が酒飲みにでもなると思つてゐるんですか？』チーシュは我知らず女の肉體の溫みに浸りながら笑ひ出した。

アンナ・ウシーリエヴナは幾らか赤くなつた。そして急に若々しくなつた。

『いゝえ、ほんたうですよ！　あたし、貴方がお氣の毒ですわ！　貴方は何時も一人きりで……そりや私だつて一人ぼつちですけれど、もう私はこんなお婆さんでせう……貴方なんかまだお若いのにね……貴方は可愛がつて呉れる人や……』

彼女の聲には實際溫かい響きがあつた。小さな大學生は彼女を感謝するやうに見た。

『アンナ・ウシーリエヴナ！　今日は莫迦に綺麗ですね！』

『ほんたう？』彼女は巫山戯るやうに訊いて、彼の上に低く〳〵身體を屈めた。

何でも知りぬいてゐるやうな彼女の暗い眼には怪しい火が閃いた。

『ほんたうですとも！』チーシュは震へ聲で言つて、自分でも思ひ掛けない事を言ひ加へて了つた。『僕は貴方に接吻したいですよ！』

二人の視線は暫く合してゐた。或る露骨なものが眼から眼へ取り交はされた。

『では寢て被居い！』アンナ・ウシーリエヴナは言つた。そして喫驚したやうに立ち上つた。

一分ばかり前まで、チーシュには彼女の接近が窮屈だつた。けれども今となつて見ると、彼女に立たれるのが急に口惜しくなつてきた。生理的に惱ましくなつてきた。

『もう行くんですか？』彼は氣まづさうに訊いた。

『眠らなければいけませんよ……　貴方は身體が惡いんですからね！』彼女は振り向きもせずに笑つた。そして眼れ上つた身體を幾らか彼の方へ差し延べた。

チーシュは彼女の腰に抱きついて、無理無體に自分の寢臺のところまで引張つて來ようかとも思つた。けれども彼女のでぶ〳〵した肉體の事を考へると、彼は一種の嫌惡を覺えて思ひ止つた。

アンナ・ウシーリエヴナは暫く其處に突立つて、髪を直してゐたが、軈て謎のやうな挨拶を言ひながら出て行つた。

『早くお治りなさいね……また來ますよ！』

三十三

嚴寒と降雪を思はせるやうな、乾燥した最後の秋の晴い日だつた。寒風は荒廢した花園の

露はな黒い枝を烈しく撓めて、黄色い枯葉を雲のやうに吹き飛ばした。道路の泥濘も凍つて、足もとに音をたてる鋼鐵のやうに固い轍の亂れてゐるところでは、細かい埃が渦を卷いてゐた。空は時々暗くなつて、低く〳〵下つて來た。そして殆んど眼にも止らぬ位の粉雪が空中にちらついて來た。

小さな大學生は自分の寢臺に腰掛けて、朦朧と床の一點を見詰めてゐた。其處には髪の毛の絡んだ女の髪針が落ちてゐた。彼の眼は暗かつた。冠毛は額の上に亂れてゐた。彼は實際病み衰へたシーシュ(鶸鳥)に似てゐる。

彼も今となつては萬事が終つて、長いあひだ夢見てゐた美しい生活が、永遠に自分から去つて了つたのを知つてゐた。

『もうおしまひだ!』

彼は何うしてこんな事になつたのだか解らなかつた。

彼は酒に酔つた。見苦しいほど酔つた。往來に轉がるほど正氣がなかつた。彼は唄を歌つて、誰だか警察の役人と接吻した。その後では宿酔の激しい頭痛と、堪へ難い孤獨の自覺である……

彼が兎に角人間と認めてゐた者は、もう一人として周圍に殘つてゐなかつた。怖ろしいものが街の上を過ぎて、彼等を恰も嘗て存在してゐなかつたやうに持ち去つてしまつた。騎兵少尉クラウゼやナウーモフやリーザやミハイロフの顏が霧のやうに思ひ出される……老耄れたドクトル・アルノリヂイ一人が彼と共に生き殘つて、愚かしい事を呟いた。

『私はとうから死んでゐます!』

周圍は平民や商人や僧侶や軍人や官吏ばかりだ。彼等は役所に勤める、骨牌を戲る、酒を飲む、結婚する、子供を產む。子供は同じやうな商人や平民や官吏や軍人になつて、同じやうに勤めたり、酒を飲んだり、果しなく子供を產んだり……

ドクトル・アルノリヂイの言葉は道理だ。歩いたり、話したり、感じたりしてゐても、彼はとうから死んでゐるのだ。併し彼は自分が屍である事を自覺してゐる。人間は腐肉に群がる蛆蟲の如く地球の表面に蠢いてゐるが、自分達は墓穴の掘り返されるまで、何人かのアイロニイによつて、世界を歩いてゐる屍に過ぎないと考へる者はない。

何故か小さな大學生のチーシュは此等の蒼褪めた屍の間を歩いてゐる。彼は何事かを信じて、何ものかの名によつて、熱したり苦しんだりしてゐる……彼は今でも信じてゐる。何を信じてゐるかは明かでないが、兎に角信じる事は信じてゐる。哀傷を覺え、苦しい痛みを覺えながらも、頼りなく信じてゐる。併し今といふ今こそ彼は自分の信じてゐるものから離

れたのだ。彼はどん底へ落ちて、深く〳〵沈んでゆく。

彼はすべてが破滅である事を、實際はとうから知つてゐたのだ。けれども手足を藻掻きながら、自分といふものを欺いてゐた。

人類の踏むべき道は廣くて遠い。小さな人間はそれぞれ二三歩も行くと、其處に踏み止まつて、永遠に跡方もなく消えて了ふ。偉大なる先驅者や豫言者や大學者は、年月が彼等の記憶を振り拂うて、時の塵で蔽ひ隱すまで、先へ〳〵と前進する人類の畜群を指導してゆく。幾人かの小さなチーシュは深くもない墓穴に急いで、それとも知らず積み重ねられる。何人かの冷淡な手で掻き捨てられる蟻の死體のやうに、彼等は微かな音を立てながら、穴の中に散らばつて、しまひには土塊で蔽はれて了ふ。その上には新しい道路が出來る。此等の道路の砂埃を、嘗ては悶え苦しんだ人間の化身だと思ふ者はない。

最後は避けがたい。小さなチーシュは自分の努力が無益で滑稽であるのも知らず、穴の傍で徒らに身を藻掻いてゐる、箒で掃き散らされて眩惑した蠅のやうに溫順しくしてゐても、彼にとつては別に變りがないのである。

彼は疲勞した。藻掻く事を止めた。そして無意義な生活や、でぶ〳〵肥つた愚かな女との見苦しい關係や、泥醉や、痴愚のどん底にまで身を墮した。

『何うしてこんな事になつたんだらう？』彼はまたも自分の胸に訊いた。

彼は寂しかつた。彼は斷片でもいゝから幸福といふものを得たかつた。誰にでもいゝから抱愛したり憐れんだりして貰ひたかつた。併し周圍には誰一人ゐない。彼の事などを考へようとする者は一人としてゐない。彼女さへ普通の善良な女に思はれる。

その日、宿醉の苦しい夢から覺めると、チーシュは街を徘徊ひに出た。何處も此處もがらんとしてゐた。夕闇は泥濘つた街や、見窄らしい家や、濡れた垣根や菜園を包んでゐた。彼は倶樂部へ寄つて見たが、一人として來てゐる者はない。彼は寂しく悲しくなつて、ドクトル・アルノリディを訪問した。併し彼も家にはゐなかつた。そして泥醉の餘り親しく杯を交はした例の會計管理人と顏を合せて了つた。

チーシュは素知らぬ顏をしようとした。けれども會計管理人は足を止めて、聲高に笑ひながら冗談を言つた。そして自分の家に來て呉れまいかと言ひ出した。二人はお互に人代名詞を避けようと努めた。チーシュは間が悪かつた。そして會計管理人の處へ行く事にした。其處で彼は酩酊した數人の官吏と一緒になつて酒を飲んだ。官吏達は大聲で笑つて、つまらぬ冗談を口にしたり、彼の宿の主婦に就いて怪しからぬ諷刺を言つたりした。會計管理人は彼の肩を叩いて『君も豚のやうな人間だなア！』と言つた。初めチーシュは堪へ難さうに顏を

反向けてゐた。けれども頭がガン〳〵して來るに從つて、官吏達も立派な若者のやうに思はれて來た。會計管理人も善良な人間に思はれた。彼等の猥らな言葉も一廉の諸論のやうに思はれた。しまひにはチーシュも莫迦を言つたり、接吻したり、唄を歌つたり、笑ひ轉げたりした。

夜も更けてから、彼は家に歸つた。主婦はもう寢てゐたが、扉を開けるために起きて呉れた。彼女は素肌の肩に大きなショールを掛けてゐた。酩酊したチーシュは彼女に調戯つたり、曖昧な事を言つたり、ショールを脱いで呉れと頼んだりし初めた。火酒や、裸體や、寢疲れのした女の匂ひや、甲高い聲や、神經質な笑聲は彼の頭腦を混亂させた。

小さな大學生が正氣にかへつて、酩酊し昂奮した哀れな小さな自分自身と、半裸體の鐵面皮な肥つた大女の姿に氣のついた瞬間もあつた。併し憎惡に似た不思議な絶望は彼を捉へて了つた。

『何うにでもなれ！』彼の頭腦にはこんな考へが閃いた。

見苦しい騒ぎがあつた。そしてその物音は突然チーシュの部屋に移つた……

『穢らはしい！』小さな大學生の心は惱ましかつた。

翌朝、彼は自分の部屋から出る事を怖れた。併し圖々しく打解けた彼女は、肉感的な微笑を浮べながら入つて來た。召使も家にはゐなかつた。中學校にいつてゐる彼女の小さな息子は、隣りの部屋で何か大聲に音讀してゐた。チーシュは子供が退屈になつて、不意に扉を開けた事や、狼狽した彼女が子供の方へ跳んで行つて、突き飛ばしながら荒々しく扉を閉めた事を思ひ出して、戰慄するやうな嫌惡と恐怖とを覺えた。

軈て一家揃つての食事になつた。彼女はチーシュをキリューシャと呼んで、御馳走を出したり、皿に鼻を突込みながら腰掛けてゐる子供を叱つたり、遠慮なく子供を叱つて呉れとチーシュに頼んだりした。

食事が濟んでから、自分の部屋に歸ると、小さな大學生は扉に鍵をかけて、寢臺の隅に身を隱した。彼は本能的な恐怖を覺えて、寢臺の傍に落ちてゐる泥だらけの曲つた髪針を見詰めてゐた。

夕闇はだん〳〵と濃くなつた。陰影は部屋の中に這ひ込んだ。落葉した花園の影繪が眞黒に描かれてゐる地平線上の赤い縞も消えた。

顏色の蒼褪めた小さなチーシュは、閉ざされた部屋の中に坐つてゐた。彼の頭髪は額の上に亂れて、恰も病み衰へた鶏鳥のやうであつた。

彼の考へは徐ろに這ひ出て了つた。彼の胸には、死んで了ひたいやうな絶望のほか何にも